

金貨が餘り多くならないやうに、自ら調節の働きをするものは、第一が内國の取付、第二が外國の取付、第三が消費取付此の三つである。其で金が多過ぎもせず、少な過ぎもせぬと云ふ働きのして居る。けれども紙は幾らでも譯なく出来る、其の代り要らないからと云つても少くならない。金ならば要らなければ外國に出る、或は指輪になつたり、色々な裝飾用にしてしまふが、紙幣では鼻紙にもならぬ。寧ろ半紙の方が役に立つ。紙幣となると、幾ら澤山になつても調節の方法がない、伸縮性に極めて乏しい。だから一度膨らんだら膨らんだ切りで縮むることが困難である。紙の通貨は出せば出す程膨らむ、それを承知して居て今度の戦争では各國共に之を出して居る。其の中でも露西亞の如きは減茶々々に出して居る、戦争前の四十倍も出して居る。革命後のことは更に分らない。而もそれに對して獨逸のやうな工夫もせず何もしないで、唯だ手當り次第に濫發し、紙で戦争をして居る。即ち各國とも紙で戦争して居ると云つて宜しい。斯くの如く紙の通貨を濫發した爲に通貨の値打が下つてしまつた。

物が殖えれば値の下ると云ふことは當然である。通貨が或る物に對して下つたので

なく、何に對しても下つたのである。戦争前は金の世の中で、通貨が一番偉いものであつた。ロムバード街を中央市場として各國が此處を取巻いて經濟を立つて居つたが、戦争が始まるや否や、金と云ふ立派なものが姿を隠して、其の代りに紙が威張り出して來た。それが非常に殖えたから、逆も以前のやうに人が尊重して呉れない。何か買はうと思つても、以前程には賣つて呉れない。米を買ふ絲を買ふと言つても、以前と同じ代價では物を賣つて呉れない。それが即ち一般の物價騰貴と云ふことである。

物價が騰貴すると、我々が物を得るに高い代を拂はなければならぬ。其の高い代を拂ふと云ふことは、取も直さず戦争の入費の一部分を脊負ふといふことである。税として取られる、或は公債の募に應ずると云ふことは、吾々が承知して戦費を負擔するのであるが、物價騰貴は取るとも言はないし、又吾々は取られるとも氣が付かない、けれども矢張り自分の飲む物、自分の食ふ物を出して戦争に使つて居ると云ふことになるのである。何となれば、今まで十圓で買へたものが十二圓に上つた、然るに自分の給料は元の儘であつたとすれば、物價の上つただけは自分の食ふ物、飲み物を減らさなければならぬ。其の減

つたものは、即ち政府が持つて行つて戦争に使つて居るか、或は成金連の暴富の一部分を形づくつて居るのである。英吉利國民が物價騰貴の爲め苦んで居る、獨逸國民が物價騰貴の爲に苦んで居ると云ふのは、戦費の一部を物價騰貴と云ふ形で取られて居るのである。税の方は是とは違ふ。税にも善い税と悪い税とあるが、兎に角民間から取立てたものは、徴税の費用を除いた以外の全部は政府の手に入る。差引かれるものが極く少い。公債は形次第ではあるが、差引かれるものが税に比べると大分多い。物價騰貴は、吾々國民が自分の用を節して出した高と、政府が實際に戦争に使ひ得る高とでは、其の間に非常の差がある無益の失費が多い。であるから國民所得の取上げ方としては最も不適當にして害の多い方法である。所が新に税を増し、或は公債を募ると云ふことになる。色々故障が出る。或は少し下手にやると、國民が大騒ぎをして政府に迫つて行くが、通貨を膨脹せしめて物價を高くしたのでは、國民は何とも言はない。政府から言へば、寔に容易い方法であるから、英吉利のやうな極めて慎重に事をする政府であつても、之を以て戦費の一の財源として居るのである。所で此の頃日本でも米價の調節とか物價の調節とか

言つて、一部の人は騒いで居るけれども、是が日本特有の理由であるならば、それは日本だけの手段で何うにもなるであらうが、世界的の原因である以上は、やはり世界的の理法で支配されるのである。

そこで戦後、是が如何になるかと云ふと、英吉利は今の三つの方法の中でも、大部分は借金を以つて戦争して居る。今の値の下つた金で借金して居るのである。所が戦後此の公債の償還をする時分には、貨幣の値が上がる。戦前程にはなるまいが、兎に角物價が今より下つて、貨幣の價値が上るに相違ない。其の時に償還するのであるから、今の公債の募りに應じた者は、安い金で貸して高い金で返して貰ふことになる。呼値は同じであるが一磅なら一磅に對する購買力は多くなつて居る。所が獨逸のやり方のやうに、全體の國民から無理に絞つて取つたのは、結局自分達が拂つて自分達が取る。利子の支拂も元金の償還も政府の収入を以て政府が拂ふのであるから、それを受取る個人々々には多少の相違があるとしても、國民全體の上から見ると同じになる。然るに英吉利の如く資産を多く有つて居る者が主として公債の募りに應じ、下層の者の應募して居る割合が非常に

少いと云ふ場合には、國全體の上からは出入は同じであるが、人に依て大變違ふことになる。戦後下層民の働いた公債を有つて居ない者の働いた高い金を取つて、利息を拂ひ元金を償還すると云ふことになるのであるから、貧乏人が骨折つて働いた金を以つて金持に返すと云ふことになる。従つて貧富の懸隔を益々大ならしめることになる。況んや英吉利は是まで資本が潤澤で、外國に貸してあつたことも非常に多かつたが、戦費として國內の富も消費し、又外國に貸付けてあつたものは回収したりしたので、資本の在りは非常に減つて居る。資本は減れば減る程金利が高くなる。金利が高くなれば労働者の勞銀が下る。勞銀が下つた時に於て労働者は高い税を取られ、而して其の税は金持の所へ、或は利子となり或は元金となつて支拂はれる。即ち貧乏人から取つた金が金持の所へ行くと云ふことになるのであるから、戦後に於ては、此は餘程の變調を持來すことになるは疑を容れないことである。

貧乏人から取つた金を金持にやると云ふことになる、茲に社會主義の思想が勢力を得るやうになると云ふ懸念がある。此の點は英吉利が最も憂慮すべきであつて、佛蘭西

も略々同様であるが、英吉利程ではない。獨逸に至つても其の憂がある。

今日の有様から考へても、戦後に於ては國民の所得の割合が大變に變つて來るに相違ない。其の場合に如何に富が流通するか、流通の仕方、今までとは餘程變つて來る。良くなるか悪くなるか分らぬが、兎に角流通本位の經濟になると言つて宜い。其の時に之を巧く處理することが出來れば、戦争で受けた創痕は意外に早く恢復する。十年も二十年も掛りはしない。けれども若し其の處理が悪いと、何年経つても恢復が出來ない。さうして其の恢復した資本は、必ず生産資本になるであらうが、それに就ても、其の移り變りの時に色々面倒の事件が起るに違ひない。戦争の爲に變つた所のものが、各々其の途を得るまでは、經濟界がガタ付く。或は非常に景氣が好くなつて、事業が勃興するやうにもなるであらうし、其の勃興も健全なる土臺の上で起つたものでなければ、又バタバタと倒れる。恐らく普佛戦争後の獨逸どころではなく、餘程大きな變動が來るに相違ない。若し歐羅巴が非常な亂調子になれば、日本にも自ら影響が來らざるを得ない。現に通貨の膨脹、物價騰貴の影響さへ及んで來て得る位であるから、戦後に於ける變動も必ず

日本に及んで来るに相違ない。此間に處して若し我邦がボンヤリして居つたならば殆ど挽回すべからざる苦境に陥るであらうし、處置宜しきを得れば將來益々福利を増進するであらう。此點は今から十分に考へて置かなければならぬ。此れが即ち戦後に於ける經濟生活改造の機運を語るものである。然らば其改造は如何なるものたる可きか、其は自ら別の機會を待つて論じたいと思ふ。

|| 大正六年五月稿同八月信州伊那教育會講演速記 ||

二 金の經濟と物の經濟

一 英國經濟政策の破綻

英國最近の經濟状態を見るに、全く從來の政策施設を抛棄して、今や事々物々獨逸の執

り來れる經濟政策を模倣するに至つたのである。例へば其の食料政策の如きも、獨逸と同様の施設をなし、食料長官なるものを置き、食料の分配代價等を調節制限する方法を採るに至つた。從來、獨逸の政策施設を罵倒嘲笑して居た英吉利が、今や其の罵倒し嘲笑した所の政策施設を、其の儘模倣するの已むなきに至つたのは實に天下の奇觀ではないか。實に英吉利は開戦以來、總ての方面に於て、從來誇りやかに執り來つた其の政策を變更して、之れを獨逸化せしめねばならぬ必要に迫られたのである。此の英吉利の獨逸化の新しい一例として、予は英吉利近時の軍事公債の募集方法が、全然獨逸式に依つて行はれて居ることを見逃し得ぬのである。即ち最近に至る迄、罵嘲して居た獨逸の公債政策を自ら模倣せざるを得ぬ場合となつたのである。此れ等の事實、即ち英吉利の獨逸化と云ふことは、實に英吉利の經濟政策の破綻を物語るものである。

斯くの如く自國の採れる政策制度が、最も進歩したるものであり、最も健全なるものであり、以て他國に範とせしむるに足ると自負して居た英吉利の政策制度は、今や大革命を施さねばならぬ時機となつたのである。現今に至る迄、英吉利の貨幣は、ポンド、シリリング、

ペンスと云ふが如き十進法に依らざる非文明的方法を以てして居る。然るに此頃になつて英國の實業家政治家學者等は此の貨幣制度の弊害に晩くも氣付いて、之れをポンド、プロリン、ミル、即ちポンドの十分の一はプロリン、千分の一はミルとする十進法に変更せよと力説して居る者がある。或は又亞米利加のドルを採用せよと唱へ、而して其は度量衡にメートル式を採用する前提たらしむ可しと言つて居る。斯くの如く從來は國自慢であつた政策制度を、今や改革しなければならなくなつた英吉利の最近の事情に因るも、時勢の變を知るべきではないか。然るに我邦に於ける英吉利心酔者は、今猶ほ舊き英吉利の政策制度を以て、此の上もない最高最上のものと考へて居るのは、寔に迂遠千萬と謂はねばならぬ。殿様の言動が絶對性を持つて居た舊幕時代に於て、殿様の爲す事云ふ事は何事でも善良であると考へて、殿様が跛を引けば臣下の者共も跛を引いて歩くことを、此上もない自慢と心得るやうなもので、其の愚や憐殺すべきである。英吉利が世界に横行闊歩して居た時代ならば、或は英吉利本位で遣つて行かねば不都合の場合もあつたが、今次の戦争に因つて英吉利は少くとも其の世界的中心たる地位を減縮せられたのは疑

ふべくもない。此の時機に方つて、猶も英吉利の眞似をして行かうとするは、愚昧の至りである。我邦の英吉利化は實に甚だしい。我邦從來の制度を以てした方が、餘程便利である場合にも、態々煩瑣な英吉利式を採用して居る。例へば鐵道の如きも、メートル式か又は日本尺を採用した方が簡易であるに拘らず、マイル、チェイン、リンクを用ひて居る。英吉利が此れ等の制度の煩瑣にして不便なるを感じ、今や之を改良せんと志して居るのは、英吉利が其れだけ賢明になつた證據で、英吉利の爲めに慶賀すべきことである。而して公債募集方法の改良の如きは、賢明になつたもの、中に於て著しいものゝ一である。

二 英國の「貸付金庫」の利用

蓋し獨逸に於ては開戦以來、五回の軍事公債の募集を行つた。想ふに今頃は第六回の募集に着手せんとして居る事であらう。而して第四回迄の公債應募の状況を見るに、回を重ねる毎に其の應募人員に於ても、其の應募金額に於ても、増加するの結果を示し、而して割合に少額の應募者が増加するの傾向を呈して居るのである。第五回目に至つて其の

應募成績は稍々不良の徴候を示した。是れ疑ひもなく獨逸の疲弊困憊せる事を表明するものであるが併し小口應募即ち二百マーク以下の應募者は依然として多數を占めて居る。斯る好成績を齎す所以は獨逸の巧妙なる政策に基くのであつて、即ち『ダーレーンス・カッセ』貸付金庫を利用するのである。英國は獨逸の此のやり方を嘲つて、右の手で奪つたものを左の手で與へるやうなものであると云つて居た。實際獨逸の此の政策は所謂伊勢詣りのひぢきのやうなやり方であることは吾輩の屢々公言した所である。されば英國の經濟學に養成せられた人々は、此の獨逸式のやり口を極めて排斥してゐたのである。貸付金庫を利用すると云ふのは例へば、何億圓かの公債を募集して得た金を、次ぎの公債募集に利用するのである。即ち人民に資金を貸付て應募せしむるのである。第一回の時にAなる人間が五百マークの公債を引受けたとして、其のAと云ふ人間は第二回の募集の際には百マークだけしか募集に應ずるの力がない、是以上の餘裕がないとすれば、五百マークの第一回の公債を抵當にして、六掛けか七掛け位で金を貸してやる、五百マークの七掛けであるから三百五十マークを貸す。此の借りた金に百マークを加へ

て四百五十マークの應募をなし得ることになる。第三回目には四百五十マークの公債を抵當に取つて應募の資金に充てしめる。第四回も是れと同じ方法を採用して、人爲的に人民の應募力を作つて應募せしめるのである。蓋し此のやり方は永久に持續せらるべき可能性を有つて居ない。故に斯る公債の募集方法は大いに戒慎すべきであることは云ふ迄もない。されば英吉利では獨逸の此やり方を罵嘲して居たのであつたが今や英國の銀行家、政治家、經濟家乃至は新聞雜誌は、此獨逸式の方法を唱道するに至つた。ロンドン・エコノミストやステーチストの如きも力を極めて之を推奨して居る。或る論者は獨逸式の此の方法に反對して、人民に金を貸して、其れに依つて公債に應募せしむるが如きは二重の手數が要る。それよりも銀行の預金を直接政府へ廻して、銀行と政府との間に貸借關係を成立せしめたならば可いではないかと云ふものがある。之れに對して今日の英吉利の金融經濟學者等は、銀行から直ちに政府に貸さないで、人民の手を潜ると云ふことに意義がある、新しい富は其所に生ずるのであると言つて居る。思ふに人民に借金をさせることは、人民をして何彼につけて儉約せしめる事になるのである、公債の償

還は概して長期であつて、其間は政府より人民へは金を還さぬ。所が銀行は人民へ貸付た金の返済を迫る、無理をして貸付けられた金であるから、人民はおいそれと金を銀行へは返済が出来ない、どうしても冗費を省き、身を儉素に守つて行き、以て借金を返済する方法を講じなければならなくなつて来る。即ち結局、國民に強制的儉約を行はせる事となるのである。獨逸の公債の募集の方法は斯る手段を以て講ぜられて居る、これ實に國民節約野戦を間接に行ふものである。英吉利國民は贅澤な生活に馴れて居るので、戦争に當つても中々其の贅澤が止まぬ。自分の金で自分が贅澤をするのに何んの悪いことがあるものかと云ふやうな氣持で居る。之れには英吉利の爲政家は閉口する、そこで何うしても獨逸の眞似をして強制的に國民を質素に生活せしめるやうな方法を講じなければならぬと考へた結果、公債の募集方法を貸付金庫に因つて行ふことにしたのである。之れも英吉利の獨逸化の著るしい事實である。

三 『金の經濟』より『物の經濟』へ

英吉利は今次の戦争の勃發するや、異口同音に獨逸の軍國主義は、世界の平和を攪亂するものである、人道の敵は實に獨逸である、されば獨逸の軍國主義を破壊して、平和攪亂の種子を根絶せしめねばならぬと教團いたのであるが、獨逸を破るところか實際は其の反對に英吉利が獨逸の政策制度施設に征服されて了つた形である、即ち英吉利は日一日プロイセン化して軍國主義を濃厚にして行くばかりである。所謂ミイラ取りがミイラになつたのであつて、英吉利當初の云ひ分を思ひ浮べると滑稽の至りである。故に英吉利人の中には、縱令戦争には負けても構はないから、英吉利は何所迄も英吉利の特色を發揮して、プロイセン化せぬやうにせねばならぬと憤慨して居る者もある。そして英吉利人は今回の戦争は全く義戦である、人道の爲めの戦ひである、平和の爲めの戦ひである、白耳義が中立を犯され、悲惨な運命に陥つた、ために戦つて居るのであると稱して居るが、これは殆んど荒唐無稽の空言であることは智者を俟つて後に知るを要せぬ。今や英吉利人の中にさへ、前言の空言であることを告白して居る者さへあるではないか、經濟學大家のエヂウオールスなども公言して居るのである。之れで幾ら外國人を瞞着しやうと思つ

ても駄目である。然るに我邦の識者の中には、今尙眞面目に英吉利の戦ひは正義の爲め、人道の爲め、平和の爲めなどと思つて居る。英吉利に化かされて居るにも程があると云はねばならぬ。斯くの如くにして英吉利の表面上の戦争の理由、即ち平和人道の爲めと云ふ理由は立たなくなつて了つた。故に表面から云へば英吉利は其の戦争の意義を失つたのである。之れは英吉利として残念千萬の事であらうが、我々から見れば結構な事である。其だけ英吉利は國家として賢明になつたものだと言へるではないか。元來英吉利人は個人主義功利主義の國民であるから、公に奉ずると云ふ精神に乏しい。此の點に於て獨逸人は數等優つて居る。此の私を捨てると云ふ精神の旺盛なことは實に獨逸の強味である。と云はねばならぬ。英吉利が後ればせに變則的に獨逸の眞似をするに至つたのは、英吉利が覺醒し改革の機に入つたものであつて、之れを喜びこそすれ、決して悔むには及ばない。

以上は英吉利のプロイセン化の一例に過ぎぬのであるが、總ての政策制度に於て、英吉利は従來自慢にして居た自國の政策制度を抛棄するか、若しくは改革しなければならな

くなつたのである。之れを經濟上から見れば英吉利本來の『金の經濟』が意義を失つて、『物の經濟』にならねばならぬと云ふことになつたと云ひ得るのである。即ち英吉利の『金の經濟』主義は國家の存立を全うして行く上に於て完全なるものでないと云ふことが暴露された。『金の經濟』主義は覆滅崩壊したのである。之れに代るに獨逸流の『物の經濟』主義を以てするの氣運に赴いて來たのである。

四 『金の經濟』の組織缺陷

『金の經濟』は總てのものを金に替へて見る、金を中心として總ての仕事仕組が行はれる。故に『金の經濟』に於ては、金に現はれた需要のある物は生産される、眞に需要があつても金の利益の少いものは生産されない。富者の贅澤品の如き物は利益が多いから盛んに生産されるが、貧者の生活の必需品は利益が少いから、比較的閑却されると云ふ傾向になる。此の事に就ては河上肇博士が其の近著『貧乏物語』に於て甚だ趣味深く説明して居られる。勿論『金の經濟』には長所のあることは否まれぬが、然も其の弊害に堪へざ

る事が夥しいのである。予が近著『國民經濟講話』本全集に於ても詳説して置いた通り、第二集に於ても詳説して置いた通り、國民經濟なるものには主體がない故に統一的に意思を定め、一定の秩序や計劃を立て、やると云ふことがない。之れが爲めに河上博士の云つて居る通り、生産と云ふことが甘く調節され按配されない、金持の贅澤の爲めに、貧乏人に取つての必要品の生産力が減殺される様な傾向を呈する。されば富者は或る程度以上は其の贅澤を止める丈けの自制心があつて欲しい。併しながら之れは望んで實行し得らるゝ事は先づ以て困難である。今日の經濟組織に於ける缺陷は、實に富者の満足を充たして貧乏人の満足を充たすに缺くるの憾みある事である。今日では生産はデスポーニール・キアピタルが左右して居る。富者が生産品の種類なり數量を決めて居るのである。英吉利流の『金の經濟』組織は此の弊害を甚だしく發揮して居る。

五 資本侵略戦の時代

今次の大戦の原因を世間では種々の方面に求めてゐる。勿論戦争を惹起せしめた原

因又要素としては、政治上のこともある、經濟上のこともある。併しながら、それ等のことを以て主要原因と見るは淺薄である。其の主要なる原因は、英國のキアピタル・マグネート即ち資本閥が、其の最高の利益を獲得せんが爲に反目確執した事に存して居るのである。即ち新興の獨逸の資本閥が現狀を打破して、世界に覇を唱へんと欲する意志と、英國の資本閥が現狀を維持して、依然として世界の金權を自己の獨占たらしめんと欲する意志との衝突である。資本閥の争覇戦——之れが今次の大戦の真相である、少くとも其の主要素で、英獨間の感情上の反目が之れに伴つたのである。

惟ふにトレード・プロフィットの時代は去つた。今日迄は自國生産の商品を外國へ輸出して、以て利益を得んとして争つたのであつたが、今や貿易に因つて利益を獲得せんとする時代は去つて、代りに資本を投下して資本利益を收めんとするの時代となつた。従來は商品の賣買に因つて利益を擧げたのだが、今は資本投下によつて利益を收める時代となつた。従來は販路の争奪即ちトレード・ウオーアであつたが、今やキアピタル・ウオーアの時代に推移したのである。『金の經濟』を以て唯一の最上のものと考へ、且つ之れに

依つて世界の金權を倫敦に集めて居る英吉利が、今次の戦争に因つて財政困難を感じるに至つた。於是乎英吉利は證券動員を行はなければならなくなつた。證券動員とは英吉利の資金が外國の事業に投じてあつたものを本國に引上げる事である。即ち外國に投資せる金を英國に回収するのである。英吉利の金網は世界の到る所に張られて居る、其の張られて居る金網を引上げたのである。惟ふに戦後は此の金網を恢復し、又は新たに張るに付て激甚なる競争が惹き起るに相違ない、英吉利は從來の如く、其の金網を張つて行かう、撤去した所は之れを回復しやうと努める、獨逸は自國が取つて代つて此の金網を張り、其の經濟的勢力を伸張して世界の金權を自國に集中せしめんと努めるであらう。慾と慾との衝突資本と資本の侵略戦となるであらう。

六 新局に處するの道

併しながら戦争前途の英吉利の經濟政策は、決して完璧なるものでない、大なる缺陷があると云はねばならぬ。先づ自國の内部を強固にした上で、海外發展をなさねばならぬ。

英吉利の政策は此の點に於て、非常なる缺陷があつた大なる過誤を有つて居た。獨逸には此の缺陷が少なかつた。之れ獨逸が四方に敵を受けながらも、能く其の困難苦痛に堪へて居るのみでなく、今日までは進んで攻勢的態度に出で、戦局の上に於て有利なる地位を獲得せる所以である。之れに反し、英吉利に於ては、『物の經濟』が『金の經濟』になつて居た食料品も兵器も悉く『金の經濟』になつて居た、世界の到る處に植民地を有し、日沒なき大國として誇つて居た國が、戦争以來は食料品の缺乏に困却するに至つた。是れ實に『金の經濟』の弊所短所を暴露した者である。勿論金の經濟なくして、『物の經濟』のみで行かうとするは、今日の文明生活から推して一のユートピアであるが、『物の經濟』を無視した『金の經濟』は確かに畸形物である。今次の戦争に因つて英吉利が其の誤れることを痛切に感知し、『物の經濟』に注意を拂ふやうになつたことは、英吉利の國家存立の上から見て悦ぶべきことであつて、決して悔ゆるには及ばないのである。且つ一般の國家人類も、今迄は是が非でも英吉利の政策が絶對無上のものであるかの如くに考へて居たのが、今次の戦争に依つて大なる教訓を得、其の經濟の立て方に就て深く考慮を拂ふやうに

なつたのは賀すべきことであると云はねばならぬ。されば我々は此の教訓——眼前に開展され提供された活事實を研究し、之れを利用して國家存立の上に適切なる政策を施さねばならぬ。今日迄我邦は無闇に英吉利の文物制度に心酔し、一にも英吉利、二にも英吉利英吉利の眞似さへして居れば國家の興隆は疑ひなしと思つて居たのが、今度の戦争に依つて其の誤れる事が分つて來た、之れは我邦に取つては寔に喜ぶ可き事である。我々は進んで此の經驗を利用せねばならぬ時期に到達したのである。然るに我邦の現状を見るに、成金が出来たとか在外正貨が増加したと云つて夢中になつて恐悦して居る。今日は其んな事に有頂天になつて居る秋ではない、國民經濟の大本を確定し、内には國力を充實せねばならぬ秋である。

『金の經濟』は自然の勢であるが、今日迄は其の當否を考へなかつたのである。社會主義の主張する所は、今日では一種の空想である出來ない相談である。しかしながら、此の戰の爲めに『物の經濟』の重要なことが分つた。『金の經濟』を固執して居た英吉利も、『物の經濟』に降伏せざるを得なくなつて獨逸化するに至つた。從來は空想として斥け

られて居た問題が、近き將來の問題として考へらるゝに至つた。是れ實に重大なる問題ではないか。立憲だの非立憲だの政黨だの官僚だのと云つて空なる騒ぎをやつて居る時代ではない。政黨も官僚も政府も國民も、力を合せて此の新らしく打開せられた局面に處して行くの方法を講ずるのが當面の急務だと思ふ。其れには獨逸が減んでも日本は少しの得もしない如く英國が減んだとて日本には別に損はないと云ふことを、先づ頭に置いて一切萬事を新らしい目を以て能く考へることを要する。

|| 大正六年五月『日本評論』掲載 ||

三 戰時經濟の一福音

茲に戰時經濟と名附くるは、主として交戦中にある國の國民經濟の事をいふのである。更らに適切に言へば、軍國經濟と呼ぶべきであらう。英語でエコノミックス・オブ・ウォー

(Economics of war) 獨逸語でクリーグス・ヴイルト・シアフト (Kriegswirtschaft) である。我邦の如きは假令聯合國の一であるとはいへ、戦時經濟を營み居るとは言へない、無論戰爭により影響を受けて居るけれども、現に交戦しつゝある國とは趣を異にして居る。亞米利加の如きも亦同様で、支那も愈々戰爭に参加することとなつても是亦適切なる戦時經濟に入るのではない。何となれば英佛獨逸露伊の如く現に交戦中にある國の經濟状態は中立國と異なるは勿論、日米支の如き國とも亦遠つて居る。即ち今世界の表には三種の國民經濟が存して居るのである。第一は純然たる平時の國民經濟であるが、之れは殆んど無いと言つても宜しい、第二は戰爭により大なり小なり影響を受けて居る經濟状態である、第三は茲に言ふ戦時經濟である。

戦時經濟は特に著しき特色を帯び、單に戰爭により影響を受けて居るといふが如きものにあらずして、殆んど歴史上未曾有の變化を來したものと云ふ事が出来る。今より百年前の英佛戰爭に於ても戦時經濟状態は現はれたけれども、當時は規模小なるが爲め其の經濟上に及ぼす影響も今回に比すべくもなかつた。二十世紀に於ける經濟界の發達

は歴史上殆ど其の比を見ない位である。今其の特色を説明すれば、先づ經濟には平時戰時を通じて異なる特色を帯べる二種ある事を明かにせねばならぬ、即ち『物の經濟』と『金の經濟』である。吾々の日常生活は『物』に於てすると同時に、『金』に於ても經濟を立てゝ行かねばならぬ。一個人でも町村でも府縣でも、大にしては國の經濟でも植民地の經濟でも、常に物と金の兩方面を備へて居るのである。其の一方が具はつたからとて萬全なりと言ふ事は出来ない。兩方面とも充實しなければ圓滿なる經濟は成立しないのである。例へば我邦に於て五千萬石の米を生産するとして、此の五千萬石を如何に分配し貯藏するか、何處へ何程を輸出するかといふことは、一面物の經濟であるが、又同時に金の經濟を呼起すのである。米價一石四十圓とすれば五千萬石は二十億圓、五十圓とすれば二十五億圓である、其の二十億なり二十五億なりの金高が如何にして定まるかといへば、第一米の價格の高下に依るのであるが、價格は大體に言へば需要供給の關係に基くけれども、仔細に觀察すれば、社會各種の原因が綜合して居ることが判る。今日に於ては米を澤山作りたりとて、必ずしも其の人が富めりと言へず、又經濟安全なりとも言ひ得ない。

國に於ても亦同様に五千萬石が六千萬石になれりとして、之れを以て直に富力増進したりと言ふ事は出来ない。即ち物の經濟に於て成功したればとて、價格が之れに伴はなかつたならば富力を増したとは言はれない。適切なる例を言へば英國去年の貿易高は金高に於ては一昨年比し増加して居るけれども、物の數量に於ては却つて減じて居る。之れは戰爭により物價が著しく騰貴した爲めである。此事は戰時經濟に取りては最も重要な點である。此一事で略々明瞭なりと信するが、戰時經濟の特色は金の經濟が重要を減じ、物の經濟が重要を加へた事是れである。二十世紀の經濟狀態は此の戰時經濟と全然反對に進みつゝあつた。殊に英國の如き萬事金の經濟の支配する處であつた。單り英國のみならず、何れの國も金の經濟が大勢力を持ち大發達をなして居つたのである。獨逸如何に強しと雖ども、英國の富力は優に之れに對抗して餘りあるを得べしとは、英國の金の經濟を以て獨逸の物の經濟に對抗し得るの意味であつた。英國人は餘程先見の明ある人にも、金の經濟が今日の實際狀況を呈し様とは考へなかつた。英國の金の經濟に養はれて居つた頭では無理もないことではある。併しながら之は非常な失策であ

つた金の力の案外小にして物の力の非常に大なることは、流石の英人にも明瞭になつて來た。之れを以て獨逸思想にかぶれたと言はれても辭する事は出来ない。

今日英國に於て計劃されて居る各種の事柄は、殆んど獨逸の跡を逐うて居るのである。獨逸は戰前は勿論其後も常に一步づつ前きに物の經濟の處理を進めて行つた。英國は絶大を誇る富力あれど、之れは物の力にあらずして金の力である。金が萬事を支配する時代に於ては可なるも、今日となりては其の所謂富力は極めて薄弱となつて來た。金が如何にあつても、其れのみでは甚だ不足を感じざるを得ないことになつて來た。ロイド・チョーヂは「獨逸の砲彈に酬むるにはチェック（小切手）を以てすべし」と云へるが、之が英國の弱みである。平素ならば直に肉に代へ彈丸に替へらるゝも、今の戰時經濟に於てはそれは出来ない。斯の如くにして英國は平素の國是として固守せることを、片つ端から棄てなければならぬ事となつた。自由貿易主義を放棄し遂に國民節儉野戰或は戰時節儉運動といふものを初めて、國民に向つて極端に物の節儉を勸説して居る。殊に外國輸入品の使用を極端に制限すべきことを唱へて居る。普通節儉と云ふは金の儉約である

が今の英國のは金を使ふなといふにあらずして、物を使ふなといふのである。アスキスの令嬢が盛大なる結婚式を挙げたことに對して、有識者は之れ即ち國民節儉野戦を無効に終らしむるものであると論じて非難して居る。

又英國が軍事公債を募る場合には、成るべく之れを銀行に仰がずして、國民の微細なる資金を集むる方針を取つて居る。之れ必ずしも銀行に資金乏しきが爲めではない。各階級に互りて公債を募るときは、自然國民全般の節儉が行はれるからである。最近六百萬人が公債に應じたるに對して、非常に喜んで居るのは此の意味である。之れに反して、獨逸は物の經濟には出來得る丈けのことは疾くに遣つて居る。四面敵を受けながら今日尙ほ滅亡せざるは、物の經濟に力をそゝいで居るからである。無論無い袖は振られぬ。いから永久に續くことは出來ない。現に尠ならず疲弊して居ることは争はれぬ。獨逸にては敵兵の死骸を絞りにて油を作つて居るといふ倫敦電報があつたが、之れは眉唾ものである。如何に獨逸人が非人道的なりとて之れは容易に信じ難い。恐らく馬匹より油を取つて居る位の事を誇張した報道であらう。道德上の是非善惡は別として、如何

に獨逸が物の經濟に最善の努力を盡して居るかを想像することが出来る。要するに戰時經濟に於ては、平時に於て重要視される金の力が案外役に立たず、之れと反對に物の力が如何に重要なかを痛切に感ぜしめて居る。

扱て此の戰時經濟は戰後には果して如何になるであらうか。講和成立後は直に元の金の經濟に其儘復舊するであらうか。斯く苦しき教訓を受けた實物教育が痕跡も遺さず、戰前に於ける金力萬能の經濟に戻らうとは信じられぬ。金の經濟は誠に心細いものである。金の經濟の頼み難きことは、其の本家本元たる英國人自ら最も著しく學んだのである。今日迄進歩した經濟總ては金を本位として立て、來たのである。生産も流通も總て金が本位であつた。之れを司るものも金力即ち之れ權力であつた。自由競争の時代に於ては全く金權萬能であつた、之れには非常に善き點もあれど亦惡しき點もある。之れを救済せんとして識者間には研究もされたのであるが、何分にも金權強く如何とも爲し能はなかつたのである。金の經濟には一方に於て非常な無駄が行はれて居つた。金の有る者は人生に何等必要もなき贅澤品に巨費を投じて、何等の非難も受けず、之れ

と反對に日常の生活にすら苦しむ者は非常に多數である。國の經濟の立て方でも金本位なりし爲め、心ならずも無駄をして居ることが幾らもある。斯くの如くにして止まらなかつたならば、社會の將來は實に慘澹たる時代が來るであらう。

戰爭は一大慘禍なると共に一大幸福を齎したとも云ひ得る。何となれば物の經濟が如何に重要なかの實物教育を示したからである。之れを善用せば人類社會を益すること決して尠少ではない。殊に下層社會は著しく緩和されることが出来る。貴族が身を下して職工となることは英佛等に於て聞く處なるが、而も彼等は實用に適せず、平素厄介視されて居る下層社會勞働者階級が如何に重要であるか、證據立てられた。此の實物教訓によりて金權萬能の勢を著しく殺ぐことが出来ると思ふ。而して講和後英國が全然金本位の經濟に復舊せず、戰爭によりて得たる尊い教訓を利用して、物の經濟に亦重きを措くに至るのであらうと思はれる。然らば我邦は如何であるか、我邦は云ふ迄もなく戰時狀態ではなく、従つて物の經濟の重要なことを痛切に感ずる事がない。否所謂戰爭成金なる者出で來り、益々金權萬能の勢を長じ來つたことは誠に憂ふべきである。

英佛は戰爭には苦しめるも將來幸福を齎すべき貴重なる實物教訓を受けた。我邦が戰爭の爲め遺憾なく其の弱點を暴露せる金の經濟に益々深入りする事は危険千萬である。我々は深く反省するを要する。

|| 大正六年六月十五六日『臺灣日々新報』掲載 ||

四 戦後の經濟界に於て眞に恐る可き事は何

此度の戰爭は經濟上に種々の變化を齎したが、其終局後に於て——否な現に戰局中に於ても——眞に恐る可き事は何であるかに就て、我邦の論者の論ずる所我輩の承服し

難いものが多々ある。新聞雑誌の求める儘に別に考へを旋らさないで、當座の思ひ付きを公表することは無用なるのみならず、有害であると云ふ一の好證左として、吾輩は數多き戦時經濟談を擧げねばならぬと信ずる。論者はメノコ論から首斷して曰く、此度の戦争は人命を損ずることも莫大であると共に、歐洲の富歐洲の資本を費消し盡くしたことに實に空前である。従つて戦後の歐洲經濟界は資本の缺乏に苦しむであらう。起るべき生産も資本の缺乏の爲めに起らず、而して其恢復は十年や二十年を期して待つ可きではない。或は五十年百年を要するであらう、是れ實に戦後經濟界に於て最も恐る可き事である。而して獨逸に就ては特に此恐れ大なりとし、獨逸は戦争の上に於て如何なる成效を收むるとも、其富力の上に受けた打撃は實に甚大なるものであるから、戦後長い間經濟上の發展を沮まれ飛躍を爲すこと能はず、英佛米の爲めに壓倒せられるであらうと。今吾輩を以て見るに、此論程の愚論は減多にないのである。

二

第一此種論者は十九世紀の舊經濟觀たる資本萬能主義の夢想を脱せぬものである。生産の効程は常に既存資本の額によりて定まる *Industry is limited by Capital* と云ふジョンスチュアートミルの謬論から覺めぬものである。第二に此種論者は經濟界は活物であることを忘れたものである。成程資本なくして生産が起らぬことは言ふ迄もない、併し乍ら資本と云ふものは、資本なる固定態を取つて存して居るものでない、一國の資本は限定せられた或物ではない、否資本と云ふ具體的な物があるのではない。有るものは富である、其富の中或ものが生産營利に於て或る用法に向けられるときに始めて資本となるのである。生産が資本によつて限定せらるゝよりも、資本は生産の必要によつて或は増され或は減ぜられるのである。資本に對する必要大なるとき、具體的に云へば、資本に對する需要が大にして、利子率と利潤率と（或は其一丈けが）が高いときは、今まで資本たらざりし富も資本となる。其反對に資本に對する需要減ずるときは、今まで資本として使用せられた富も資本でなくなつて仕舞ふ。而して資本となる可き富も一の流れの如きものであつて、決して不動の固定態にあるものではない。直ちに消費することの要大

なるか、又は直ちに費消する方が國民經濟的限界餘剰大なるときは、富として保有せられるものは少くなる。其反對に直ちに消費するよりも、富として保有し又は進んで資本として生産に投下する方が、國民經濟的限界餘剰大なるときは、富従つて資本は其瞬間に於て増加するものである。決して一定不易に富又は資本の高が限定せられて居るものではない。經濟界は絶へず限界餘剰價值の活則によつて支配せられ居る活物である。資本も此活則によつて支配せられて、絶へず時々刻々に或は著しく増し、或は著しく減ずるものである。國民資本と云ふが如き固定の大きさのものは、決して存するものではない。是れが最近の經濟學理の打勝得た眞理で、ミル一流の資本觀の一擲せられた所以である。

三

従つて戰爭中資本の減少したのは事實に相違ないが、戦後何十年間も減少した儘で續く等と云ふのは、經濟界の通則を少しも知らぬ人の言である。我々は左様なる幼稚な愚説に迷はされてはならぬ。況んや戦後五十年も百年も資本の缺乏に苦しむ可し等と論

するが如き、馬鹿らしくて挨拶も出来ぬ次第である。資本の増減は人口の増減と同様である。否人口の増減よりも速かに働くものである。此度の戰爭で何十萬かの人命を損じたから、戦後二十年も三十年も歐洲は人口の少きに苦しむ可しと主張する人があつたら、其人は馬鹿者の稱を直ちに下されるであらう。戦後歐洲の出生率は必ず増進すべきこと今より逆睹することが出来る。戰爭の爲めに起つた人口の減少は、或度まで——或は全部——此の出生率増進の爲めに補填せらる可きことは、今日から之を斷言しても差支ない。此の如く戰爭の爲めに減少した歐洲の富歐洲の資本は、必ずや戦後生産率の増進資本形成力の増進の爲めに、或度まで——或は全部、或國にては戦前の状態を超越するまで——補填せらるゝと考ふ可きである。唯其十分に補填せらるゝ迄には多少の日子を要する。然し其は決して甚しく憂ふ可きこと甚だしく恐る可き事ではない。減少した資本を以て行はるゝ生産は生産能率——企業能率、勞働能率、土地收穫率——の増進を惹起すに相違ない。資本減少の迷惑は相對的たるに止まる。英國に於けるより獨逸に於ける方資本の減少が大なるときは、其相對關係に於て獨逸は苦しむ。何となれば、獨逸に

於ては英國に於けるより資本に對して高き報酬を拂ふことを要し、其れ丈け生産費を高めるか、又は勞銀利潤の分け前を減ずるかせなければならぬからである。

四

然るに歐洲各國共に戦争の爲めに富の減少を來たしたならば、迷惑を被る度合は寧ろ少ないのである。即ち迷惑は主として相對的であつて、絶對的ではないのである。英も獨も佛も富の減少を見るならば、資本減少の爲めに生産費の嵩むこと、又は他の分配者の分前の減少することは同様であつて、國際競争上別に大した不利益を見ないのである。少なく生産すれば少なく消費し、多く生産すれば多く消費する。資本減少の結果は消費を少なくすることにはなるが、活物たる我々の經濟生活は又た之に順應して行くから、其處に甚だしく憂ふ可き事恐る可き事は起らぬ。唯暫時の不便とアプスチネンスとが一般に要求せらるゝに止るのである。斯くの如く戦争の爲めに富の減少した事は、之れなきは之れあるには勝れりと雖も、決して之を以つて戦後經濟界に於て眞に憂ふ可き事眞

に恐る可き事とするには足りないこと、戦争の爲めに幾十萬の人が死んだとて、世界人口の永久的減少を憂ふるに及ばないと同一理に歸着するのである。

以上極く簡単に説明したから、舊經濟界の謬想に囚はれて居る人を正路へ導き來るには不十分であるかも知れぬが、先入の僻見を有せざる人に對しては、粗ぼ事足りると信ずる。

五

さて然らば戦後の經濟界に於て眞に恐る可き事は何であるか。今此問に對し一言を以て答へれば、戦時中に採用せられた誤れる經濟財政々策の爲めに、國民所得分配の行程を根本から破壊する事である。歐洲交戰國に於ては國民は皆必死な努力を爲して居るは疑がないが、然し戦時爲めに誰が何の階級が最も多くの犠牲を獻じたかと云へば、其は無産者階級である。有産者階級は上に行くほど犠牲の財産に對するパーセンテージは少く、或る有産階級は戦争成金とさへなつて居る。自己の生命をさへ國家の爲めに

獻じて居るものが澤山ある他方には却つて戦争の爲めに財産を肥したものをさへある。不公平も亦極れりと云ふ可きであるが、其は兩極端に就て言つたものであるから姑く論外として、其中間者流に就て見るに、戦争の爲めに國家が費した莫大な費用は何れも國民の富又は所得を以て支ふる外はないのである。

六

さて國家が此費用を國民から取り立てるには三つの方法がある。第一は課税、第二は公債の募集、第三はインフレーションである。課税に就ても其負擔の割合は無産者、下層社會に重く、上流の有産階級には比較的輕いのである。正しく言ふならば、英國の如き新たに徴兵制度を強制して、人民の生命をさへ國の爲めに徴發することゝした以上、有産階級に對する課税は或額以上は其人々の所得の全部を徴收す可き筈である、中流に向つても生活の必要を十分に充し得た殘餘に對しては100%の税を課して然る可きである。此く言ふと或は反駁して云ふ人があらう。其れでは國民の貯財心を全く絶滅して、百年

の長計たらずと。然り平和の時に於ては此くす可きではない。然し今戰時中に於ては富の蓄積資本の形成を沮喪する云々の顧慮は少しも要らぬのである、平和恢復すれば直ちに100%の率は廢さる可きは無論であるが故に其爲めに富の蓄積の妨げらるゝを憂ふるに及ばぬ。戰爭中は富は蓄積するよりも直ちに之を國家の用途に充つ可きは無論である。ドーセ其れ丈けの富は消費せられるのであるから、之を蓄積したとて何にもならぬのである。然るに英國を始め何れの國でも、下層社會に對しては生活の必要以外の所得に對して100%に近い課税を實行して居ても、有産階級、上流階級に對しては50%にすら及んで居らぬ。即ち課税の上に於て戰時非常の時と云ひつゝ、猶此の不公平が行はれて居る。然し之れは未だ眞に恐る可き事とは言へぬ、又た平時さへ課税の不公平は現存して居るのだから、特に戦争に伴ふことゝも言へぬ。

七

次は公債の募集であるが、此れは二つに分けて見ねばならぬ。眞に國民が新たに得る

所得——又た新たに得可き所得を擔保として得たる借金——を以て之に應ずるは誠に結構な事であるが、既に一寸述べて置いた通り、英國でさへ此頃は獨逸の眞似をして銀行の融通による應募を大に奨励して居る。『公債應募の爲めの貸付の義は特に精々勉強して御相談に可應申候』との銀行廣告は、英國の新聞雜誌に此頃頻繁に見る所である。此れ隠れたる一種のインフレーションである。加ふるに現はれたるインフレーションがある、今次に此二つを一つにして論じて見よう。

八

吾輩は戦後の經濟界に於て最も恐る可きは此の二種のインフレーションであると確信する。何となれば、インフレーションは國民所得分配の根本を滅茶苦茶に破壊するものであるからである。

戦争に要する費用は、現在又は將來の富を割いて之に當てる外はない。戦時増税は現在の富又所得を以て戦費を支へる所以であつて、最も合理的にして最も餘弊の少い支辨

法であるが、歐洲各國共租税のみを以て戦費を支辨して居らぬ。租税に依頼する割合の最も多いと言はれて居る英國ですら、其割合は半分にも達して居らぬ。ソコで現戦争は主として將來の富と所得とを當てにして居るものと云はねばならぬが、其將來の所得を當てにすることが正當に行はれて居り、明瞭に確實に行はれて居れば、弊害はあつても不
得止所と言はねばならぬ。即ち國民が將來何年かに涉つて年々生産する富、年々收得する所の所得の一部分を割いて、戦費の補填に正直に當てゝ行くのであれば、現在直に支辨するには劣るけれども、之を除いては先以て最も確實健全な方法と認む可きである。インフレーションは即ち之と異なるのである。是又た一の戦費支辨法であるが、其弊害最も大なるものである。其弊害は戦時中に於ても著大であるが、其最も恐る可きは平和克復の後に於てある。

九

此の方法たる誰が負擔に應ずるか少しも明瞭ならざる隱密曖昧の一の方法であつて、

而して主として下層社會から甚だ多く其所得を奪取る所の方法であるからである。インフレーションに二種ある。一は前云ふ如く、借金をして公債の募に應ずる是れである。其借金をした國民が向後の所得の中から其借金を償却して行けば別に差支はないが、無理に借金を奨励すること獨逸の如く、佛國の如く、又近頃の英國の如くであれば、自然借金をした國民は、融通に融通を重ねることとなる。自分が正直に贏得した所を以て償却すること能はざる程の無理な借金をする。又た戦時公債の募に應ずる爲めに、今迄持つて居た他の有價證券を賣放つて其手取金を以て應募するが如きは唯だ乗り換へに過ぎずして、國民から云へば何の貢獻を成す譯でなく、而して其結果は一種のインフレーションとなる。何故なれば、銀行からの融通又た證券の賣り放ちは銀行預金の増加、通貨の増加といふ形を取るに定まつて居る。従つて其額だけは通貨を膨脹することになるのである。インフレーションの第二種は英國の戦時貯金證券 War Savings Certificate 並に流通證券 Currency notes の發行、又た獨逸の貸付金庫證券 Darlehenskassenschein の發行を初め、各國に於ける不換紙幣の増發即ち之であつて、直接に流通要具の額を増大することである。

國家は課税と公債とを以てして猶足らず、更らに自ら積極的に通貨を膨脹せしめて以て一時を糊塗する。成程至極簡便な方法であるが、素人の手療治で一時病を抑へたのと同じく、却つて病根を深からしむるものである。何故となれば、通貨の膨脹は物價の騰貴を來し、其結果つまり國民一般に課税以外に騰貴せる生活費に於て、戦費を負擔することになる。不知不識の間に非常なる負擔を爲す譯である。

十

物價騰貴の爲めに受くる打撃は有産階級よりも無産下層社會に強いことは言ふ迄もない。即ち唯さへ戦費の負擔の不公平なのを更らに助長することになつて、下層無産階級は益々苦む外はない。加之公債の募に應ずる者は兎に角多少の餘裕ある者である。彼等が戦後に於て長い間受くる所の利子の支拂は、一般國民が負擔する、而して其負擔は下層者に重い。即ち下層者は戦後長い時期に涉つて、有産者の懐へ利子を拂ふ爲めに納税に於てのみならず、騰貴せる生活費の形に於て不公平に重い所の負擔を支拂ふ譯にな

るのである。而して公債の募に應じた有産者は、一方に増税の負擔を爲すと共に、他方公債利子の支拂を受けるのみならず、戦時中價の下つた貨幣を以て應募したに對し、價の恢復した貨幣に於て元金と利子とを支拂はるゝのである。戦時中の百磅は戦後に於て百十磅百二十磅に相當する購買力を有するに至るであらう。是れ丈けでも彼等は利益を占める。加之年々支拂を受くる利息も、亦戦後に於てより、大なる購買力を有するに至るであらう。然れば戦後に於て、下層者は彌々苦しむと共に、有産者の利益は遞増的となつて、茲に國民所得の分配状態は根本的に破壊せらるゝこととなる。是れが戦後に於て尤も恐る可く憂ふ可き事である。之に比すれば資本の減少の如きは到底日を同ふして談ず可きではなからう。

十一

我邦に於ては戦後と云はず戦争中の今日に於て、此作用が明かに現はれて居る。即ち當今の一般物價の騰貴就中米價の騰貴は、即ち我々國民が此戦争の爲めに要求せられて

居る犠牲を意味して居るのである。我邦は戦争の爲めに直接増税の苦しみは受けなからうと安心して居るが、爰ぞ知らん我々は高き米高き生活費高き運賃高き保険料の形に於て、一種の課税をされて居るのである。而して他方には七割の配當をする郵船會社あり、國家が二千萬圓近くの戦時補償金を損して居る他方に、莫大の利を占めて居る海上保險會社があり、又た幾十幾百の成金と稱する輩があり、米の買占に巨利を得て居る人々がある。我々一般國民が苦しい生活を爲しつゝあるは、我々所得の一部を高き物價の形に於て、彼等暴富者に獻上して居る次第である。然るに怠慢なる政府は、戦時所得税は調査中に屬す、米價の調節は議會の閉會を待つて考究す可し等と無責任千萬な事を唱へつゝ、此の有様を高見の見物して居る。

十二

さて我邦が此くの如き物價騰貴を繼續するに至つた根本の原因は、(他の原因は姑く措き)在外正貨の手品にある。外國銀行預金を以て正貨準備に充て恬として耻ぢざる

大非違にある。在外正貨を正貨準備に計上して、ドシ／＼兌換券發行額を膨脹せしめるから、物價は他の原因なくとも騰貴するは當り前である。試みに大正四年六月より同六年五月に至る二ケ年間の物價指數と兌換券流通額とを表に作つて見たに、左の如き有様を示して居る。前段六四一頁
乙表を見よ

兌換券流通高の増加と物價指數の大きさは、大體に於て如何にも規則正しく併行して居ること一目瞭然たりと云ふ可きである。此事實は政府當局者が如何に辭を構へても之を否定することを許さないものである。在外正貨を正貨準備に充つる制度は、自ら兌換券の膨脹を來し而して物價の騰貴となり、我々國民は眼に見えざる大なる増税を賦課せられ而して他方成金共を肥して居ることゝなつて居るのである。

我邦も歐洲も（米國も今や參戰し而して其戰費を租税のみに求めず、巨額の公債（自由公債と云ふ美名を附してあるが、其實は奴隸公債と云つた方が當を得て居る——）を募る以上同様である）何れも戦後に於て國民所得の分配の根柢を破壊する事になる外はない。予は戦後の經濟界に於て眞に恐る可き事とは、實に此の謂であると確信する。資本

萬能論者以つて如何と爲すか。

|| 大正六年七月十六日稿同八月『理財評論』掲載 ||

五 意氣地なき戦後經濟論を排す

一 愚説の好標本

我邦の經濟界には、屢々餘計な取越し苦勞や愚にもつかぬ杞憂等が行はれる。目下經濟界に於て盛んに論議せられて居る所の戦後の經濟戰爭説や、獨逸の廉價投資問題の如きは、即ち其の好標本である。若し我邦の學者にオリチナリチーがあり、我邦の經濟界に自主的精神があつたならば、斯くの如き迷論愚説が事々しく行はるゝ筈はないのである。元來今次の世界大戰は、漫然英吉利の口吻を眞似て説をなす者の言ふが如く、カイゼル

の野心や乃至は獨逸の軍國主義のみが其の原因では無いのである。吾輩をして云はしむれば、其の主要なる原因は英獨のキアピタル・マグネート（資本閥）が其の利益を獲得擁護せんとする事に存するので、詮じ詰めて云へば、資本閥の爭覇戦である。言を換へて云へば、他國の利權販路勢力等を奪ひ若くは之れを壓迫せんとする經濟的帝國主義の結果、勃發したるものであると云ひ得るのである。

二 英國經濟政策變動の原因

蓋し英吉利は自由貿易主義の國家であつた。英吉利が自由貿易國たり、且つ自由貿易國を以つて今日の繁盛を見るに至つた所以は、彼が商賣國であつたからである。即ち彼は品質佳良にして價格低廉なる貨物を製出し得る國である。已に品が良くて價が廉ければ、其商品は何處へ賣り出しても賣れるに定つて居る。されば他に妨害者が無ければ、其商品の販路は維持擴張することが出来るのは見易い道理である。従つて國家が態々是れに對して干渉するの必要を認めない。さればこそ英吉利には自由貿易主義が行

はれ、而も巨大の國富を蓄積することが出来たのである。

斯くの如く良くて廉い品物を生産し得る商賣國たる英吉利であるから、自由貿易主義が行はれ、且つ其の成功を見るに至つたのである。此の英吉利の事情を知らずして、英吉利の經濟政策を其の儘他國に應用せんとするは大なる誤りである。オリヂナリチーなき學者の多くは、兎角斯る迷謬に陥るが誠に困つたものではないか。例へば三越呉服店の如き信用ある聲價ある大商店ならば、正確な品物を正當な價格で販賣すると云ふ事が世間に知れて居るから、別段自家の賣品の佳良なる事や、價格の正當なる事杯を吹聴する必要を認めぬけれ共、他の小商店に於ては其の販路を擴張し顧客を作るためには、勸誘員を出したり目立つた廣告杯をしたりして、世間に自家賣品の眞價を知らせねばならぬ。三越は恰も自由貿易主義の英國の如く、後者は保護貿易主義の國家の如きものである。

前述の如く、商品を賣ることを本位として居た商賣國たる英吉利は、爾來自由貿易主義に據つて着々其の功果を擧げ、國內には富が充溢するに至つた。於是乎、彼は從來の商品專賣より轉じて、國內に充溢せる富を他國に投じて利益を收めんとするに至つたのであ

る。商品輸出本位より轉じて、今は資本輸出國とならねばならぬ事となつた。然るに商品の輸出と資本の輸出とは、二者大に趣を異にせざるを得ぬ、商品は單に賣りさへすれば宜しい、對手は何んな者でも構はぬ。然るに資本の輸出には、其の輸出先即ち債務者を吟味する必要がある、そして安全にして確實なる者を選択せねばならぬ。之れは申す迄もなく、金を貸せば、結局は其の貸したる金を回収せねばならず、利子も取立ねばならぬ。若し債務國が確乎たるものでなかつたならば、貸金の回収も出來ず、利子の取立も出來なくなる、と云ふ結果を生ずる。故に資本輸出の時代には、從來の如き自由貿易主義では危険である。國家が相當の干渉保護をせねばならなくなつて來る。是れ即ち、保護主義に變轉せねばならぬ所以である。今や英吉利の經濟政策が一變しつゝあるのは當然の成行で、其の大海軍は嘗商質をてつ保護したものであつたが、今日では資本をも保護するの責務を帯ぶるに至つた。吾人は斯の世界的情勢を能く觀察し了解して置かねばならぬ。

三 戦後のダムピングを恐るゝは愚の至り

自國生産の商品を外國へ輸出して利益を收めんとする時代には、販路の争奪は實に國際商業上に於ける重大問題である。而してダムピング (Dumping) に據つて其の販路を擴張せんとする者の出現するは、實に對手國に取つて大に警戒すべき事であるが、今日では販路争奪の時代に非ずして、キアピタルウオアの時代に推移して居るのであるから、之れは恐るゝには足らぬのである。

蓋し、現大戰の結果、歐洲の各交戰國は甚だしく疲弊して居るが如くに觀察せらるゝが、世人は兎角今次の戦争の絶大なることを論じ、歐洲交戰列國は其の富其の資本を極度に費消盡したから、戦後に於ては列國の經濟界は資本の缺乏に苦しみ、それが爲めに生産困難に陥り、其の恢復には數十年も掛るであらうと臆断するが、これは舊い經濟觀即ち資本萬能主義に囚れた議論で、今日には通用せぬ。勿論、生産は資本が無ければ出來ないが、併しながら資本は固定したものでない、資本は生産に依つて左右せらるゝ作用を有つて居る。即ち生産に依つて資本は増減せらるゝものである。舊經濟觀たる資本萬能主義で、戦後の經濟界を判断すると飛んでもない迷論謬説に陥る、我々は頭を一新して觀測

を下すの要がある。

扱て然らば戦後の世界経済界は斯くの如しとすれば英吉利も獨逸も夫れ相當に活躍するのは分り切つて居る。戦争の爲めに獨逸のマーケットは他國に奪はれて居るが併し今日奪つて居る國の商品よりも獨逸の商品の方が佳ければ結局獨逸が其のマーケットを恢復すべきは當然である。現に獨逸の製品でなければならぬ物も随分有る。戦時の今日は獨逸の製品を得ることが出来ぬために他製品で間に合して居る所もあるから戦後に於ては獨逸の商品は旺んに市場に流れ出づるに相違ない。尤も其の商品は戦争中に生産せられた物であるとか或は開戦當時より停滞して居た物であるとか云ふものではない。戦後に於て生産せられたものであるべきだと思ふ。斯くして獨逸は旺んにダムピングを行つても而も之れを防止せんとするは愚の骨頂で事實出来る事でもない。獨逸のダムピングが英吉利に取つては勿論苦痛である可きで、今日から英吉利がそれを惧れて居るのは無理もない話であるが、それは苦痛を感じる英吉利にして初めて惧るべき筋合のもので、苦痛を感じぬ日本などが同じやうにダムピングと云つて

惧ろしがつて居るのは、何の事やら吾輩には了解し兼ねる次第である。こんな心配は全く意味の無い心配である。況んや戦後の経済戦などと云つて騒いだり惧れたりするのは馬鹿々々しい話である。英吉利が惧れて居るから日本も惧れねばならぬ。英吉利が騒いで居るから日本も騒がねばならぬと云ふのなら、英吉利が亡びたら日本も亡びなければならぬと云ふ事になる。こんな馬鹿々々しい話があるか。吾輩は日本が英吉利に囚はれてゐる以上、正當な議論や觀察や判断は起らぬと思ふ。

四 戦後経済界の重大問題

獨逸が戦後に於てダムピングを行つるとか、戦後の経済戦が何うのかうのと騒ぐは愚の骨頂で有と云事は、以上述べた通で、吾輩から見ればこんなとは問題にならぬと思ふ。其よりも戦後に於て英獨共通の大問題が横はつて居る、之は貧富の問題である。今次の戦争の爲に國民所得の分配が著しく病的となつた。無資産者階級即ち貧者が多くの犠牲を拂ひ、其と反對に有産者階級は寧ろ戦争の爲に利益を占て居る、此が戦後の大問題である。

蓋し戦争の爲めに國家が巨大の費用を支出して居る。その費用の調達には三種ある。課税とインフレーションと公債の募集とである。公債は之れを外國債に據つたものもあるが多くは内國債である。殊に獨逸の如きは巨額の内國債を募つて居る。而して此の戦費に使用される爲めに調達せられた金の負擔額を考へると富者よりも貧者に重いのは疑ふ可らざる事である。課税も然り殊にインフレーションと國債の募集とは戦後の經濟界に恐る可き結果を與ふるものである。尤も國債も政府がそれを募集する時には應募者に貸付金をして、その貸付けた金で應募せしめるのであるから、結局國債の募集もインフレーションを齎すことになる。斯くして通貨は膨脹し物價は騰貴する。物價騰貴の爲めに受くる打撃は富者よりも貧者に甚だしいと云ふのは改めて言ふ迄も無い。同時に又政府は其の國債を償還せねばならず、償還するまでは多額の利子を支拂はねばならぬ。之れを英吉利に就て見るも二十億圓と云ふ巨額に達して居る。これが爲めに政府はその資金を國民から調達せねばならぬ。その調達の方法は、結局課税に據らねばならぬ。税金は之れを一般國民殊に貧者から絞り取ることとなる。貧者から取り立てた

金を富者に渡す。即ち右から左へと出すので、貧者は富者の犠牲に供せられる譯である。何となれば國債の所有者は富者であるから、どうしても富者の懷中に金が吸収されて了ふ。其の結果貧富の懸隔が益々激しくなつて來るのは自然の理である。これこそ實に戦後の重大問題で識者の第一に顧慮すべきことである。兎も角、今や世界經濟界は非常の大變化大激動を受けつゝあるのである。

五 英獨の如き侵略主義の國たる勿れ

ダムピングに對する吾輩の見解及び吾輩の戦後の大問題とする貧富問題に對する意見は、簡單ながら以上を以て足れりとして、扱て各國は何れも今次の悲惨なる大戰に依つて、不當に他國の市場を侵略せんとすることの不可なる所以を知り、之が爲めに飛んでもない結果を起したと云ふ事を悟つたであらうと思はれる。蓋し獨逸の軍國主義は勿論憎む可く、是非共此を滅亡せしめる必要があるが、同時に英吉利の慾張り主義、我利々々主義をも排斥せねばならぬ。其でなければ世界の平和は維持するとは出來ぬのである。

姉崎博士は昨年十一月の『中央公論』に於て『戦後の世界』と云ふ論文を發表した。我輩は博士の意見には或る點に於て賛成し、或る點に於ては賛成することが出来ない。如何なる點を賛成するか、それは博士の言を縮めて言へば『日本人は侵略主義の考ばかりから戦後の世界の形勢を判断するの傾向があるからいけない』と云ふ點である。即ち各國とも自由を尊重し、平和を維持することに努む可きで、日本も勿論斯くある可きである。然らば我輩は如何なる點に於て博士の言に首肯することが出来ぬか。曰く博士が英吉利や亞米利加のみが自由平和の確保者で、獨逸は侵略主義の代表者であると云つてゐる點である。これは大なる謬りである。侵略主義は獨逸のみではない。英吉利の如きは慾張りの甚だしきものであつて、明かに侵略主義の國家である。米國も亦然り、尤も米國は先年迄は人道主義の立派な國家であつたが、輓近の傾向は正義人道を無視して、侵略的政策を取るに至つた。故に姉崎博士が英米を正義人道の國の如くに見做して居るのは妄の至りである。我輩は英米獨何れも平和人道の國家に非ずして、侵略主義の國家であると信ずる。たゞ國々に依つて、其侵略の形式が相異して居るに過ぎぬのである。

但し我輩は各國が人道主義を以つて世界に國を樹つるに至らんことを望む。此の點に於ては博士の意見に賛意を表するものである。

日本としては英米を人道主義の國家の如くに買被るのは愚の骨頂である。従つて英米の眞似をする必要は毫も無いのである。日本は日本として正しき道を進む可きである。即ち日本の國是を其のまゝにして進むべきである。今日迄日本は歐羅巴の先進國のやうに悪いことをやつて居らぬ、尤も悪い事をしやうと思つても、境遇上出来なかつたのであらうが、兎も角悪い事をやつて居ない。されば戦後と雖も、英獨の疲弊の虚を衝いて、彼等の利權を獲取せんとするが如きは全く謬つた考へである。若し日本が斯くの如き金權的侵略主義を取るならば、それは第二の英國若くは獨逸である。

蓋し正義人道は政治上許りではない、經濟上に於ても本當の正義人道に立つのでなければならぬ。姉崎博士の所謂世界が如何なるか許り考へて、如何すると云ふ意氣のないのは世上の經濟論者に於て殊に甚しい。ダムピング何ぞ恐るゝに足らん。其を恐れて我邦の立場を定む可し、杯と云ふのは、姉崎博士の言を借りれば『國を亡ぼす』謬想である。

|| 大正七年一月『日本評論』掲載 ||

六 戦後の世界經濟當面の大問題

一

聯合軍側も獨逸側も戦争の爲めに非常なる損害を蒙つたから、戦後に於ては兩方とも餘程の困難に陥るであらう、其恢復には恐らく数十年を要するであらう。而して經濟財政上に於ても其打撃は莫大なるものであらうが所謂經濟戰なるものが始つて獨逸などでは極力『ダムピング』を實行して市場の争奪に勉めるであらう、聯合國は決して拱手しては居るまい、同じく極度まであらゆる方策を用ゐて之と對抗するだらう、是れが戦後の世界經濟上の最大問題と認む可きである、唯幸にも我邦は此度の戦争の爲め經濟上甚だ有

利なる状態を現出し何等の損失を蒙らなかつたから此勢を持續して行けば、戦後に來る可き經濟戰に處しても甚しき不利を感ずることなくて済むであらう。唯問題は如何にして戰時中に得た利益を戦後までも持續して行く可きや否やにあると。是れが目今我邦識者の大多數を支配して居る戦後經濟觀であるように見受ける。吾輩は此の説に對して根本的に異なる考を有して居るものである。よつて此一文に於て少しく卑見の次第を開陳して見たいと思ふのである。

二

此度の大戦争が聯合側敵側に均しく非常な打撃を能へた事は言ふ迄もない、其經濟上の打撃の如きは寧ろ小なるものに屬する。其れよりも遂に大なる損害を兩方とも蒙つて居る。人命の損失は勿論負傷者の驚く可き數丈けでも、經濟上の損失などとは到底日を同うして語る可きものでない。精神上の損害に至つては殊に大である。道德上の損害も筆紙に盡くし得ぬ。尤も他方には戦争の爲めに愛國心報國の精神、自己犠牲心の著

しく高まつたと云ふ美點も考へに入れねばならぬが、他方に於て國と國民と國民との間に深き敵對心を植ゑ付けた大損害がある。基督教徒同志が異教徒に對するよりも甚しき憎惡の念を互に構へるようになった損害がある。數へ立てれば實に際限のない事である。人類が被つた此の莫大な損害に比較するときは、經濟上又は財政上の損害の如きは殆んど言ふに足らないと斷じて誤はないことゝ信ずる。歐洲の人は今まだ戰爭に熱中して居るようであつて、戰爭の爲めに受くる人文の這個の大悲慘を或は十分に自覺せず、何處迄も此の戰爭を繼續しようとして居るが如くであるが、靜かに思を旋らして見れば、*Is this war worth fighting?* (此の戰爭は戦ふの價ありや)との根本的疑惑が胸中に湧き來ることゝ信ずる。殊に露國の如き其軍隊には殆んど闘志なしと傳へられて居る。其國民も今や殆んど戰爭繼續を希はなくなつて居るようである。然るに英佛國は其の闘志なき露國の兵士をして、其戰爭を厭ひ始めたる露國々民をして、飽迄も戰爭を繼續せしむ可しとし、休戰又は講和の如きことを敢てするならば、其の露國を敵とす可しとして強制しつゝあるのである。英佛又は米國の識者中高き道德の立場に立歸つて、此くの如

き強制と所謂獨逸の軍國主義なるものと、何れか人類存在の深き意義から見て、より多く非人道的であるかの疑問を起しつゝあるもの絶無ではあるまい。併し此は今予が論ぜんとする所ではない。予の論ぜんとする所は大戦の與へた幾多の損害中、寧ろ其小なるものに屬する經濟上の事柄にのみ限つて居るのである。

三

他の意味に於ける損害との比較を全く考慮の外に置いて、單に經濟上の損害如何を考へて見ても、其は中々莫大のものであることは世人の云ふ通りである。聯合國の一切と獨逸側の一切との開戦當初から今日迄に費した戦費支けを見ても、其額は實に莫大なるのである。さて此の戦費なるものには廣い意味の戦費と、狭い意味の戦費と二様あることを知らねばならぬ。今例を聯合國の旗頭たる英國に取つて一寸説明して見よう。英國が開戦當初から今日迄に被つた經濟上の損害即ち戦費とは、廣い意味で云へば、英國政府の費やした戦費と英國々民全體が費やした戰爭に直接關連する費用とを總計したも

の、謂である。此額は精確には知ること出来ない。國民の一人々々が直接間接に戦争の爲めに費した額は、如何に統計調査の機關の遺憾なきまで發達して居る英國と雖も、到底之を調査計上する道がないので、唯だ概測を下し得るのみである。然るに狭い意味の戦費に至つては、精密に之を數字に顯はして計算することが出来るのである。狭い意味の戦費とは何を指して云ふか、答英國政府が支出した戦費是れである。其額は明かに且つ詳かに之を知ることが出来るのである。今最近の數字をあげて見ると、千九百十四年八月一日から本年（大正六年）十月六日までの合計五十六億五千三百萬磅で、其内聯合英國及領地への立替貸金（七月二十一日までにて）十一億七千百萬磅を差引くと、英國政府が戦費として使つた高は四十四億八千二百萬磅ザツト四百五十億圓である。此れが狭い意味で云ふ英國の戦費であるから、之れに國民全體が支出した高を加へたなら、實に驚く可き巨額に達するのである。此事實丈け見ると、戦争の齎らした犠牲は經濟上に於ても實に莫大なものであつて、其與へた打撃は想像も及ばぬようにも考へられる。英國一ヶ國でさへ此くの有様であるから、他の交戦諸國の戦費を總計したら猶更以つて言語に

絶する次第である。ソコデで戦後の世界を考へるに當つて、先づ此事實から出立せねばならぬ。戦後の世界經濟は此莫大な戦費の爲に被つた打撃の下に立つと云ふことが其前提である。而して英國以外の國は此巨額の戦費は殆ど全部負債を以て支辨して居るから、其戦費の全部は戦後の各國政府が其々に償却せねばならぬ次第である。英國文は健實な方針を取つて戦費の一部は戦時中増税によつて支辨して居る、乍去其は一部分に止まつて居るので英國と雖も、大部分は矢張負債を以て支辨して居るので、右にあげた額の中國庫現収入を以て支辨した高は十三億五千七百萬磅に過ぎず、殘十二億九千五百萬磅即ち約四百三十億圓は負債である。從て其利子許りでも戦後に於て一ヶ年に我日本の公債の元金總高以上に當る額を支拂はねばならぬのである。此は英國の様な豊かな財政と雖も、中々以つて堪へ兼ねる大負擔である。況んや其他の交戦國をや。故に此點丈けを捕らへて考へると、戦後の世界經濟に於て現交戦國は非常にハンデキャップ付けられて居て、米國なり我日本なりは、此點に於て甚だ有利な状態に立つ様に一般に考へられるのも無理はないことである。然し乍ら此點が先づ吾輩に異論の存する所である。

四

成程右の如き數字を見ると、我々は唯だ驚愕に囚はれるの外はないが、其處が大いに吟味を要する點なのである。先づ第一に右に數字を以て現はした戦費は貨幣價值を以て言表はした戦費であることを忘れてはならぬ。貨幣價值を以て言表はすと云ふのは金高を以て言表はしたと云ふことであつて、實際其れ丈の金が消費せられたと云ふことは同じではない。四百五十億圓といふ貨幣が戦争の爲に費消せられたのではない。英國は開戦以來四百五十億圓を戦争の爲に使つたと云ふが、能くまあソナに澤山な金が英國に在つたものだと言ふ人がある。是は間違ひである英國だとして四百五十億圓などと云ふ金がある譯ではない、四百五十億圓と云ふのは開戦以來最近迄に使つた富（物及働き）を金高に積て見れば左様なると云に外ならぬのである。其使つた物と働きとは如何なる物であるかを見なければ、實際の戦費なる物は分らない。其主なる物を舉れば、第一には陸海軍の將卒の働き、第二には間接に陸海軍の用を勤める人々一切の働き、即ち兵

器軍需品の製造に従事する人々の働き、及び此製造に使用した器械や材料、第三は戦争の爲に使はれた各種運送機關（鐵道、汽船其他）の働き、及其従業員の仕事、第四は傷病兵救護治療其他に使つた物及人の働き、第五は陸海軍人の食料被服其他（但し平時要する物に當る分を差引かなければならぬ）等である。此等の物や働きは戦争がなければ入らぬのであるが、平時とても陸海軍に入費がかゝつて居るのであるから、其分は戦費の内に組入る可きではなく、差引かなければならぬし、又戦争の爲め新たに起つた物や人の働きは之を差引かなければならぬ。例へば平時に於ては無職者であつたものが、戦争の爲めに職業を得て働くようになれば、其れ丈け國の富を増したのであるから、之れは戦費から控除す可きである。従つて金高で言表はした支出高は實際の戦費（即ち實際戦争の爲めに要した餘分の失費）とは同じものではない。戦争の爲に交戦諸國が被つた經濟上の損害なるものは國民各々が被る物は別としても、其國の政府の支出高文に就いて言つても、右に表はした金高の數字とは一致するものではない。此事は前段に於て『金の經濟』と『物の經濟』との區別に就て論じたが、我々は平時經濟に於ては常に金の經濟の支配の下

に立つて居つて、凡て經濟上の物事を金の經濟に養はれた頭を以つて判斷して居るものだから、戰時經濟に就ても動もすると金の經濟の頭許りで判斷すると云ふ誤に陥るを免れない。前段六〇頁『ロムバードストリート』 本位の戰時經濟論を笑ふを見よ。戰費とは戰爭の爲に直接間接に費やした支出の謂である。戰爭の爲に支拂つた金高ではない。支拂つた金高の中には眞實の費用も入つて居るが又其他の物も含んで居るし、又反對に眞實の費用にして金高に表はれないものもある。戰爭用の軍需品製造工場で何萬圓の貨銀を拂つた、其貨銀總額は皆國の損に歸すると云ふものあらば、其誤なることは誰も直ぐ氣が付くであらう。否更に一步を進めて考へなければならぬ、英國は今日迄之を金高に積算して見ると、四百五十億圓に當る丈けの物を政府として使つたのであるが、さて然らば此四百五十億圓に當る丈けの物（即ち以上あげた五項及び其他）が取りも直さず、英國が其政府を通して被つた經濟上の損失であるかと云と、實は左様ではないのである。其れ丈けの物を使つたには相違ないが、使つたと云ふことゝ損をしたといふことゝは、必ずしも一致しないのである。何故なれば前に言つた通り、其使つた内には戰爭が無ければテンデ作り出されないものがある。

又其使つた人の内には戰爭が無ければ徒手遊食する人もある。であるから眞に戰爭の爲に被つた損失とは如何なる物であるかと云へば、其は積極的に現に使つた物ではなく、其等の物を作り出す爲に生産が中止せられた物、其等の働きを爲すが爲めに打捨られた働きの合計が、眞實に云ふ戰爭の損失となるのである。戰爭がなければ、軍人軍屬の大部分、軍需品製造其他戰爭關係事業の従業員は、夫々平和の産業に従事して、富の生産に従事するのであるが、戰爭が在るが爲めに、其等の産業は打捨てられ停止せられた。此く打捨てられ停止せられた生産物及人の働きの合計が、即ち戰爭の爲めに一國が被つた損害の總計であるのである。然るに金の經濟に育てられた頭から見ると、此の眞實なる損害は支拂金高さへ見れば、其れで間違はないものと考へる。其誤なることの一點を云へば、四十五億磅といふ金高は平時經濟の金高とは甚だ意味が違ふのである。英國の戰前に於ける一ヶ年の國民所得高は約二十四億磅と推算せられて居た、此二十四億磅に對して四十五億磅の損失があつたと云へば、餘程事重大に考へられるが、二十四億磅と云ふ其磅と、今日の四十五億磅と云ふ磅とは大に違ふ物である。即ち英國に於ても他の國に於る如く

物價は非常に騰貴して居る。ステートチスト指數によると、戦前の千九百十四年六月三十日の指數に對する本年八月三十一日の指數は、總平均に於て十一割六分五厘の増加を示して居る。即ち磅の購買力は戦前に比して半分以下に落ちて居るのである。されば四五億磅と云ふ金高を戦前の磅に言直して見ると多くとも其半額にしか當らぬ譯で、即ち二十四億磅位となる。之を言換へると、英國の年所得は二十四億磅であつたと云ふは昔の話で、之れを今日の購買力にて言表はすときは、少くとも其の倍額四十八億磅以上に當つて居るのである。此く正して見れば單に金高丈けから云つても戦費の大なることは勿論だが一見して喫驚した程大なるものでないことは疑を容れないのである。所が此に對して次の如きことを考へるものが尠からずある。成程四十五億の戦費は購買力を減じた貨幣を以て言表はしたもので、戦前に於て云ふ四十五億磅とは大いに譯が違ふには相違ないが、他方に於て戦前二十四億磅と計上せられた所得は今日は非常に減じて居るので、此の減少した所得から右の如き巨額の戦費を負擔すると云ふことを知らねばならぬ。假りに貨幣の購買力が半分になつたとして、戦前二十四億であつた所得は、今日の金

高に積つて見ると四十八億磅に當るとした所で、今戦時中の所得は此の四十八億よりは遙かに少いのである。即ち實際の戦費は四十五億に加ふるに、戦争の爲めに直接間接引上げられて居る國民の所得高を以てした物に當る筈で、直接間接戦争に従事する國民が戦前に於て得て居た丈けの所得は、戦争の爲に全く損失に歸した物であると。是れは甚しい謬想である。何となれば、右の様に考へることは一つものを二度算入することに當るのである。直接間接戦争に従事する人の働きは産業から取り去られたから、其れが損失に歸するものだと云ふなれば、其他方に於て政府より受くる所の俸給給與は、之を利得の中へ算入して損害から差引なければならぬ。反對に政府が直接間接軍事に従ふ人々に支拂ひ、又其の給與に費した高を以て損失なりと認むるならば、此等の人々が平時に於て得て居た所得を更らに損失として之を加算す可き筈のものではない。政府の支出以外に此等の人々が受く可かりし所得が損失であると云ふのは、軍事に従事しつゝ猶ほ産業に従事し得るものと考へる間違に陥つて居るものである。戦争に従ふことが損であつて、更らに其人々が平和の産業に従事し得ぬことも損失であるとは、一寸考へると如何にも尤

千萬の様に考へられるが、其は事實に合つて居らぬ。損失は戦争に従ふことであるか又は平和の産業に従ひ得ぬことであるか、何れか一方のみでなければならぬのである。戦争に従つたことも損であり、其爲めに平和の産業を營むことの出来なくなつたのも損である。と云ふ可きではない。戦争は平和の産業に従事して居る人何百人かを一方より他方へ移して使つたので、其眞の損失は此く移したることによつて平和の産業が營めなくなつたことは是れである。

さて右を以て戦争の爲めに被つた經濟上の損失なるものゝ性質内容が分つたとして、其れが戦後の經濟に如何なる關係を持つかを論じて見よう。戦後英國を始め各國は巨額の負債を始末せねばならぬと云ふことが、先づ第一の問題である。戦費を負債にて支辨したことは、つまり將來を見當てに戦争をして居ることであると普通の解釋である。成程國の政府の立場から云へば正に左様である。各國とも政府は戦時中の歳入を以て戦費を支辨した部分は甚だ少いか又は皆無であつて、何れも將來の國庫收入を見當に戦費を融通して居たのである。然し乍ら此れは政府の立場から云ふときの話で、國全體と

しての立場から云ふときは事態が違ふのである。英國を始め獨佛等の負債の大部分は内債であつて、外國から借りた部分は少い、殊に獨逸の如きは今日迄七回に渉る募債は全部國內に於て募入したのである。外國から借りた分は將來の返済に國の生産品なり正貨なりを輸出せねばならぬから、將來其れ丈けの富は新たに稼ぎ出すか又は自國の富を其れ丈け取り去られるかせねばならぬものである。利息の支拂も無論左様で、年々公債の利子に當る丈けの富は外國へ取り去られるのであるから、其れ丈けの苦しみを國民經濟は忍ばねばならぬは勿論のことである。之に反し國內に於て募集した公債は自國內の富を使つたのであつて、公債の應募者が應募の爲め他から借入れた場合は、其借入金金の返済の爲め將來に涉つて餘計の生産をするか、又は自分の費用を節するかせねばならぬので、其れは將來を見當てに使つた高であると云ふ可きであるが、現に自己の有する財産又は所得を以て應募した分は、政府から云へば將來を見當てにしたのではあるが、國全體から云へば左様ではない、現在の富を使つたものである。英國の四十三億磅の公債高の大部分は將來を見當てに支辨した高ではなく、戦時中に生じた所得又は現在の富を戦争

の爲めに使つたものである。英國全體として見れば、其高丈は負擔して將來に持越す物ではない。既に現金拂にして仕舞つたのである。其内には資本を喰ひへらしたのもあらうし、個人消費の富を戦争の方へ繰替へた部分もあらうが、大部分は戦争中に右に生じた所得を左に戦争の方へ投じたものである。即ち國民各自が或は直ちに消費し或は將來の爲めに貯蓄す可き分を政府に貸付け、政府は之を取り入れて戦争の爲に使つたのである。だから其爲め國民の貯蓄高が減つたことは疑を容れない。又た生産々業の爲に用ゐらる可き資本が減じたことも疑ひを容れない、是れは戦後の經濟に重要な關係を持つて居る、即ち戦後の歐洲經濟は各國共著しき資本の減少を被むる可きは逆睹するに難くない。併し乍ら其高は決して國全體としての借金ではない。即ち消極的に資本が減じた丈けであつて、積極的に其れ丈けの負擔が残るわけではない。我々が病氣に罹つて醫藥料の失費が嵩むとき、出来る丈け家計を節しても猶且つ及ばないから、郵便貯金を引出したり、又は家具家財を賣拂つて病院の支拂を濟ませたのと事理は同じである。其爲貯金高は減り、家具は減少はして居るが、別に借金が残つて居るのではない。而

して家計を節して醫藥の費に當て、又は家内が平素營まない内職をして藥費の一部に當てた分は、財産も減らないし借金も造らずして事を辨じた物である如く、英佛獨其他の國に於て國民が戦時節約をやつたり、非常特別の働きをしたり、婦人が職業に従事したり、徒手遊食の輩が夫々職業に有り附いたりして公債の募集に應じた高は、恰も家計の節約細君の内職によつて藥費を支辨した如く、少しも國の富を減ぜず資本に手を付けず、又將來に負擔を持越すことなくして、戦争の費用を支辨したものである。此く考へ來れば各國共其政府の立場から見た負債高は實に莫大なものではあるが、其内眞に國全體の借金として將來に持越す所の積極的負擔たるものは一部分に止るのである。大部分は現に戦中に於て支辨し了つたものである。戦時増税によつて支辨したものの、みみみ、決済すみの戦費であると思ふのは大なる間違である。國民は租税として政府へ上納する以外に、公債の應募と云ふ形ちに於て戦費の大部分を、右から左へと現在端的に負擔し終つて居るのである。決して戦後までも之を持越すものではないのである。再び前の例を以つて云ふと、主人は病中僅かしか収入がないが、細君が自分の貯金や内職の所得を主人の醫

藥の費に提供した如くである。其家全體として何の借金も病後へ持越す次第ではない。唯だ主人は細君に對して深き感謝と而して若し細君と會計を別として居るならば、主人は細君に對して其れ丈け借金を背負ふこととなつて居るのである。即ち各國とも國全體としては其れ丈けの借金の持越しは無いけれども、國の政府は國民に對して其れ丈けの借金を背負つて居るのである。故に細君が主人に對して私の立替金は帳消にして下さいと云ふが如く、國民が政府に對して公債償還の權利を放棄すれば、借金はなくなつて仕舞ふのである。外の國は左様な事はあるまいが、露國丈けは政府の方から強談的に汝の立替金は負けて置けと細君を壓迫する亭主の如き態度を取るかも知れない。

さて露國は別として、他の國は獨塊側と雖も左様な事は必ず爲すまい。況んや英佛の如き健實なる財政を維持する國をや。然れば戦後に於て此等諸國は年々の公債利子の支拂と、期限到着のとき又は數回借替後の或機會に於て、元金の償還との義務を負担せねばならぬのである。乍去政府其自身には利子を拂ふ可き高も元金償還用の高も所有して居るのでなく、又た自己の所得なるものは（官業及官有財産収入は別として）ないので

あつて、右に當る高は必ず租稅專賣其他の形に於て國民から徴收する外はないのである。國民全體として云へば、其應募した公債の元金も利子も取る權利が一方にあると共に、他方には又た其れ丈けの高は政府へ納む可き義務を課せられて居るのである。即ち國民全體として云へば、貸しも借りもない出入らずである。假りに英國の内債高三十億磅とすれば、國民は他日何時か其れ丈け政府から返して貰ふ權利を有すると共に、何年かに涉つて又た四十億磅丈けは一般政費以外に政府へ租稅其他によつて納めなければならぬのであつて、差引零に歸するのである（外債は別問題たること勿論なり）。而して此四十億磅と云ふ内には戦前に在つた富を以て之に充てたものもあらう、其れ丈けは國の富が減つたのである。富の内産業に資本として使はれて居た分は、其れ丈け資本の減少を來たしたわけであるが、其補填は政府は之を爲すのではない、矢張國民が戦後に於ける經濟的活動によつて自ら補填する外は道はないのである。而して四十億磅中の大なる部分は、戦時中の所得を以つて支辨したものであるから、其分は別に補填は要しない。即ち戦後に於て補填を要する持越し高は、決して四十億磅など云ふ巨額によつて表はさる可き

ものではない。唯だ其一部分のみである。

五

右は國民全體として見た話である。而して英も佛も獨も埃も伊も露も皆同じ道理の下に立つのである。歐洲諸國は均しく戦争の爲めに減少した資本の補填を爲さなければならぬ仕事を持つて居る。お互ひに恨みつこなしである。而して此點に於て英國は兎に角租税を以て戦費の一部分を支辨したし、又公債應募にも餘り無理な細工を用ゐず、國民現實の所得を以て右から左へと現に支辨した部分が多くあつて、資本を喰ひへらした部分は或は小であるから、他の交戦諸國よりは戦後に於て樂であるかも知れず、其の反對に獨逸は貸付金庫の巧妙なる運用によつて随分無理に借金せしめて公債に應募せしめ、且つ租税支辨は全く爲なかつたから、國の資本を喰ひへらした部分も可也大であるかも知れない。而して米國及日本は資本を喰へらした事がないから、或は可也有利なる状態の下にあるかも知れないが、此點は後段に論ずるとして、資本の喰ひへらしと否とに拘ら

ず、兎に角政府として巨額の負債の始末をせねばならぬのであるから、此點から先に論じて見よう。此が戦後の經濟の最根本的問題であるから。

六

各國の政府が巨額の公債に對して年々利子を拂ひ、又早晚其元金を償却せねばならぬと云ふことは、歐洲交戦國が何れも同様に背負ふ所の重大事項であるが、其支拂償却は國全體として見れば、右のものを左に移すと云ふ問題であつて、國外へ取去られると云ふ問題ではない。經濟學の術語で云へば、生産の問題でなく分配の問題である。其れ丈け新しい富を作り出さねばならぬと云ふことが重要な意義を有して居るのでなく、其れ丈けの富が國民間に於て地位を換へると云ふ事が甚だ重大なる意義を有して居るのである。何故なれば前に縷述した様に、其れ丈けのものゝ全部が將來に持越されて居るのではない、將來に持越されて居る物は資本の減少の補填及外債の元利支拂ひ丈けであつて、其以外の分即ち大部分は、國全體として見れば既に已に支辨し了つて居るのである。戦後に

於て新たに其れ丈け作り出さねばならぬわけではない。唯だ主人と細君との間の立替勘定を處理することを要する如き丈けである。政府としては一方一般國民から其れ丈け取つて、他方公債所有者たる國民に其れを拂渡すを要する丈けである。此點が戦後の經濟の特色を形づくる最重要の點である。即ち戦後の歐洲諸國の經濟界に於ては、富の分配に非常なる變動が起ると云ふことは是である。政府が巨額なる公債の元利支拂を要する收入を得る爲に課する租税專賣其他の増徴は國民一般に課せられる物である。獨り有産者富者のみに増課するのではない、無産者労働者貧者も亦た必ず之を負擔せねばならぬのである。殊に間接税の増徴は比較的多くの負擔を下流階級に課する物である。英國が戦前まで取り來つた健實なる財政方針によつて重きを直接税に置くとするも、猶全く間接税に手を觸れないと云ふわけには行かぬ。況んや獨逸の如き其帝國財政が甚だ重きを間接税に置いて居た國をや。然れば戦後に於て他の點は今問題外としても、比較的の下流階級の負擔の増すことは、如何しても免れない事と覺悟して置かねばならぬ。而して他方に公債の元利の支拂を受くる所の國民は、多く如何なる階級に屬するかと云

へば、先第一に財産階級であるは勿論である。其に次では財産階級とは云へなくとも、兎に角多少の餘裕があつて公債の募集に應じ得られた人々である。最後には其の餘力はないけれども、多少の經濟的信用があつて公債應募の爲めに借金をすることが出來、其借金を以て應募した人々である。獨逸の如きは随分極端まで範圍を及ぼしたから、所謂下流社會又は労働社會の人々でも、公債所有者は少からぬであらうと思ふ。先頃大藏省に開かれた黒田參事官將來の獨逸戦時經濟書展覽會出陳の材料で吾輩が調べた所によると、二百麻克以下の應募の數が

第一回	二十三萬千百十二人
第二回	四十五萬二千百十三人
第三回	九十八萬四千三百五十八人
第四回	二百四十萬六千百十八人
第五回	百七十九萬四千八十四人

ある、三百麻克以上五百麻克以下の應募者は

第一回	二十四萬千八百四人
第二回	五十八萬千四百七十人
第三回	八十五萬八千二百五十九人
第四回	九十六萬七千九百二十九人
第五回	六十八萬千二十七人

ある最も多かつたのは第四回で、五百麻克以下の應募人員が總應募人員五百二十七萬九千六百四十五人の内無慮三百三十七萬四千四十七人ある。此内には右に云つた無理な借金應募をしたものも澤山あらうし、又た健氣な心掛けで身を切詰めて應募したものもあらうが、兎に角戦後の分配大變動に當つて、聊か其の影響を緩和する作用を爲す次第であつて、獨逸としては心強い點と云はねばならぬ。併し之れは唯だ人員の數から見た事で、金高から見ると、第四回の總募入額百七億千二百萬麻克の内、五百麻克以下の募入總額は僅に六億八百萬麻克にしか當らず、二百麻克以下の募入總額は二億百萬しかない。即ち人員の方からザツト百分の六十に當る五百麻克以下の少額應募數も、金高から云へば

僅かに百分の六にしか當らないのである。無理に無理を重ね切り詰めに詰めた獨逸でさへ斯くの有様であるから、英國の様に遂に樂にやつて居た國に於ては、公債權利額の大々部分は無論裕福の者の手にあつて、下層社會の與る高は極めて少ないことは推し量られる。即ち戦後に於て政府から公債の元利として支拂ふ高の大々部分は、國民中の少數なる財産階級富豪者の手に入るのである。而して此の少數者に政府が支拂ふ爲めに要する金は、貧者も中流階級も一般に租稅其他として政府へ納入することを要するのである。即ち言葉を改めて云ふと、戦後の公債始末は國民中の貧者労働者下流社會の富を富豪財産階級へ年々ドシ／＼運び移すことを意味するのである。吾輩が生産の問題として重要ではなく、分配の問題として重要なりと斷言した理由が是れで十分に明白となるであらう。所が之れのみには止まらない、右に説いた通り、公債應募租稅増徴又は其他の方法で、現に戦時中各國が自國の資本を喰ひへらした部分が尠からずあることは疑を容れないから、戦後の歐洲經濟界に於ては資本の不足を感じるであらう。而して戦後産業の復舊否改新には資本を要すること愈々急切となるは疑を容れない。即ち戦後に於ては

資本に對する需要は戦前よりも増加す可きに、他方資本の供給は戦前より減少して居ることゝなるに相違ない。需要が増して供給が少ければ、經濟の大則によつて資本の價が騰貴す可きは當然である。資本の價とは即ち金利のことである。ソコデ少くとも戦後若干年間は歐洲に於ては資本の價たる金利は、戦前よりは高かる可きは今より逆睹とす可き現象である。所が金利が高ければ、勞働者の受くる勞銀も必ず其影響を受くる事を免れない、其影響とは勞銀が金高では依然として居るかも知れないが、實質に於て即ち其購買力に於て下落することは是れである。戦後に於て通貨の縮少が行はれれば別であるが、此は當分望まないことゝして通貨が多ければ物價の高いことは、依然として繼續するであらうから、勞銀は金高では下落はせず或は却つて騰貴しても、其購買力は却つて減ずるのであらう。或は物價は多少下落するかも知れない（其は物品によつて必ず起ることゝ信ずる）が、勞銀も亦下落することゝなれば、結局勞働者の實際所得は少くなるのである。金利として資本家の方へ取り去らるゝ部分が多くなれば、其れと同額とは云へないが、或割合丈けは勞銀として勞働者の手に入る可き所得が減することは、何の道免れ難

いことである。而して右に假定した第二の場合、即ち戦後通貨の縮少が行はれて貨幣の購買力が恢復することは、歐洲各國の爲め希はしいことたるは勿論であるが、其は又他方に更らに一の新しい不公平を加へることゝなる。其の理由は財産階級富者が應募した公債金額は、戦時中購買力の著しく減じた貨幣を以て政府に拂込んだのである。然るに戦後貨幣の購買力が高まるものとする、政府が公債所有者に元利金として支拂ふ高は金高には相違は起らないが、其支拂ふ貨幣は購買力の増加した貨幣であるから、公債所有者は其間に更らに利益を受けることになる。安い貨幣を拂込んで高い貨幣で元利を返済して貰ふのであるから、其れ丈け得となる。即ち戦後下流社會から取つて上流社會に運ぶ富の實際高は、其金額を以て言ひ表はされたものより更らに多いことになる。

七

斯う考へて來ると、戦後の歐洲經濟界に於る勞働者、貧者、下流階級の運命は、實に同情に堪へない氣の毒極まつたもので、他方に富者、資本家階級の地位は實に言ひ様のない結構

なものである。斯くて戦後の世界經濟當面の大問題は此の富の分配上に於ける大變調を措いて外にないことは讀者の十分なる諒解を得ることと信ずる。而して平和一度來らば陸海軍人並に間接軍事に従事せる莫大なる人員は復員せられて産業界に職を求め其調節が果して直ぐ行はれるか如何か、當分は職を得られない勞働者も澤山起るであらう。又た國內に止まつて男子の代りに職に就いて居た婦人勞働者の間に失職の現象が起るであらう。此等は長い間には其々其處を得て失職離職は戦前よりも多くはないことになるかも知れぬが、當分の間は必ず戦前よりも多いであらう。是れ又勞働階級を苦しむ可き一の事柄である。戦争は無職者を根絶した形であつて此は不幸中の幸であるが、其幸は戦争が終ると共に消え去つて、却つて悪くなることを考へなければならぬ。

八

更にも一つ考ふ可き事がある。其は通貨の過増に基く物價騰貴である。戦時中に於ては各國民共臥薪嘗膽の覺悟で、あらゆるものを國の爲めに犠牲として居るのであるから、

物價騰貴より來る苦しみも亦不得止事として忍ぶのであるが、若しも其れが戦後まで繼續するとなると、此犠牲は實に堪へ難きものとなると思ふ。元來戦時中に於ける物價騰貴には種々の原因もあるが、吾輩の信ずる所では、其最大の原因は不換紙幣不換銀行券又は名は兌換にして其實不換なる紙幣及銀行券證券の過發是れである。此を英語で『インフレーション』と名けるが、『インフレーション』は一種の隠れたる増税と看做して大過ないものである。直接税なり間接税なり明かに租税と名乗つて國民から取つて戦費に當てる外に、各國民は『インフレーション』の形に於て其所得を政府へ徴收せられて居るのである。物價が騰貴した爲め支出高が多くなるから不得止節約する、其の節約した富は國民の貯蓄とはならぬ、誰の手に歸するかと云へば、過増通貨を發行する政府の手に歸するのである。二片喰ふパンを一片に減じた、残りの一片は實は政府の收入に歸して戦争又は一般政費に充てられて居るのである。衣服を減ず飲料を減ず子供に與へるのを減ずる、其減じたものは何れも政府へ入るのである。此は戦時中は無論致方なしとして甘んじて犠牲を獻するが、戦後に涉つて殊に切り詰め一杯の生活をして居る下流社會

が犠牲を繼續することは實に容易ならぬことである。

九

右段々説いた所で、戦後の世界經濟當面の大問題は生産の問題でなくして、分配の問題であることが明瞭になつたと思ふ。即ち戦費其ものゝ額が莫大であつて、而して各國の公債高が非常に増したことが戦後の大問題で、我邦や米國の如きが、大に有利の地位に立つ所以は、此の大負擔無きことと是れであると云ふ説の受取り難いことは分つたであらう。問題は戦費が莫大であつたことと其事でもなく、又其爲めに公債高が増したことと其事でもない、其れから起つて來る作用たる富の分配の一大變調是れである。所謂經濟學者が得意の題目とする國際間の經濟戦とか、獨逸ダムピング之に對する聯合側の對策の如きは、事決して輕微ではないが、右に論じた根本の大問題に比すれば到底同一の談ではない。經濟戦やダムピング問題にのみ頭を没して居るのは、畢竟素町人經濟學に囚れた古い思想である。大戦争の與へた大教訓を理解する能はざる低級の經濟觀である。予の所謂

ロムバード・ストリート本位の經濟財政觀である。金權的侵略主義の謬想を脱せざるものである。市場の争奪、金融權の争奪のみが大事件だと考へつゝある間に、世界の經濟界は其根柢に於て這般の大動搖を起しつゝあることに氣が附かないのである。今や米國は自ら求めて此の大動搖の渦中に國を投ずること歐洲諸國と同一となつた、而して此は米國である丈けに更らに細心の考究を要する。戦前『プルトクラシー』金權政治の跋扈し開戦と共に驚く可き富の増加を主として、此の金權階級に附け加へて大成金を現出した米國が、今更らに正義人道の爲めとか小國の自由とか人道の解放とか、様々に立派なる名義を列擧して大戦に加入したことは、之を經濟上の眼から見ると、右に段々説明した富分配の大移動の大潮流へ自ら好んで身を投じたものに外ならぬ。既に『プルトクラシー』の横行に於て世界第一の國である上に、更らに自ら求めて其勢を急進せしむ可き機會を作り出したことが、米國參戦の經濟上の眞意義である。

十

翻つて我邦を見るに、世上論者の所謂戦時中の利益なるものあるは元より言を須たず、戦後亦た此點に於て有利の地位に立つ可きことあり得るには相違ない。併し乍ら其れが我邦の最大幸福ではない、戦後に涉つて世界の變調に處して巧みに我邦の地位を維持することは實に希はしいこと勿論である。併し其れが可能であることが、我邦の最大幸福ではない。従つて其を可能ならしむ可く努力することが、凡ての經濟政策の、『アルファ』にして『オメガ』たる譯では斷じてない。元より此れが爲めに努力することを怠つてはならぬ、乍併最大の努力、最善の貢獻の要求せらるゝは自ら存して他にある。我邦の最大幸福は、右云ふ如き富の分配の大變調の渦中に投じなかつたこと是れである。多少は成金も出來たが他方には下層社會も惠に浴して居る、物價騰貴の爲めに苦しむものも澤山あるが又利したるものも少からずある、即ち或度まで富の移動は惹起されたが、是を右に述べた歐洲諸國に比するときは到底同日の談ではない。是れが我邦の優勝の地位に立つ所以である（歐洲出兵の如き妄舉の斷じて非なる所以は、經濟上から云へば、此の優勝の地位を一擲する結果に終るからである）。

然れども害のある所には利がある、得のある所には損がある。歐洲諸國は右の如き大難局に陥つたと共に他方大なる利益を經濟上に得た。其れは別事ではない、戦費を負擔する爲めに極度まで無駄を省き、又種々有用の工夫發明を起し、國民が緊張した氣分を養ひ得たこと是れである。戦費の大部分は實に既に國民の節儉勤勉によつて支辨し了られたことは其事が喜しい丈けに止まらぬ、之によつて養ひ得た國民能率の増進、耐苦の風俗習慣が永く戦後に涉つて、彼等の生産力を高めること是れである。是れ實に苦中に得た樂、不幸中に見出した大幸福である。此生産力の増進能率の向上、勤儉活動の習慣のある以上は、以上に列擧した大難局に處しても、早晩國力を十分に恢復する事を得るに至るであらう、其の多い國民ほど戦後に活躍し得る。獨逸の如き戦時中實に名狀する可からざる困難を嘗めたが、其代償として得た國民生産力の増進も亦た實に非常なものであらう。獨逸が戦後疲弊に倒るゝが如きことの斷じてないは、此點から考へても明白々疑を容れない所と思ふ。英佛兩國に就ても亦然りと思ふ。其反對に我邦は世上論者の云ふ如く戦時中大なる利益を得た、戦後も其は或度合まで續くであらう、是は實に有

難仕合である。乍併其と同時に他方には歐洲諸國が得た這般の大利益は殆んど我邦に來つて居らぬ。多少の新面目を呈した事は勿論であるが、歐洲諸國民が命懸けで得た貴重な経験國民能率の大増進に比すべきものは、我邦に於て之を見ることが出来ないのである。戦後の世界經濟に處して我邦の最も憂ふ可きは此一事である。獨逸のダムピング米國の保護政策、歐洲諸國の經濟戰の如きは、此一事に比すれば甚だ小なる憂である。戦後の世界經濟は一方には非常に緊張した氣分著しく増進した能率を養ひ得て Social Reconstruction (英國人の近頃唱ふる『社會改造』) を企つる所の歐洲諸國と、他方には此の變化を被らなかつた日本始め他の諸國とによつて經營せらるゝことゝなるとは、我々の一刻も忘れてはならぬ所である。

論じて茲に到れば、次の如き結論は總明なる讀者の首肯を購ひ得ることゝ信ずる。歐洲諸國は此の長所を飽迄助長するによりて、富の分配に於ける大變調を無事に切り投げることを第一の務とする如く、我邦は此の大變調を蒙らなかつたと云ふ長所を飽迄助長し、無益なる政策によつて其渦中に投ずるが如きことを極度迄戒飭し、又た社會政策の建

設を進むることによりて、今後に於て新たに此種の現象の起らぬよう飽迄努力すると共に、他方には能率の増進、國民覺悟の緊張を出来る丈け歐洲諸國民の程度に近づかしむるによつて、其の差違より來る不利益を可成軽減することが、日本が戦後の世界經濟に處する最大の務である。是れ吾輩が堅く執つて信ずる所である。

|| 大正六月十二月一日稿 全七年一月『太陽』掲載 ||

四 國本は動かさず

|| 黎明日本の諸問題 ||

一 新社會とは何ぞや

此度林毅陸君を中心として同志の友人等が新社會と云ふ雑誌を創めらるゝと云ふ誠

に結構な企てと思ふ。我邦では新の字を附することが一種の流行で、新しい女だの新日本だの新教育だのと云ふ。新社會も亦斯の如き意味にての『新』かも知れぬが、我輩は之に已流の解釋を附けて、林君等の意味する新社會は新しくさへあれば其れで宜しいと云ふものでなく、眞正なる意味にての新社會の實現を期するものとして論じて見たい。

新社會と云へば無論舊社會に對する言葉である。即ち新社會を實現しようと思ふ企てには、少くとも舊社會に満足せざる又は舊社會を大に非なりとする意味が含まれて居るものと見て間違はあるまい。舊社會を非なりとするにも色々あらうが、自分は凡て根本的に物事を考へる事を仕事として居るものである故に、其非なりとする意味は、舊社會の依つて立つ根本主義が宜しくないと云ふ意に解釋する。ソコデ其非なり又は不満足なりと認めらる可き舊社會の根本主義は何であるかと云ふことから論じて見なければならぬ。

社會は絶へず進化發展して已まぬものである。従つて社會に新舊を別つ標準は一體那邊にあるか頗る疑はしい。今日云ふ處の舊社會なるものも、其成立した當時には新社

會であつた。其一つ前に舊社會がある、其舊社會も或時代には新社會であつた。其前の舊社會も亦或時代には最新の社會であつた。されば今日云ふ所の舊社會なるものは、何れの時代から繼續して來たものであるかと云ふに、我輩等の立場から云と、今日の現社會即ち諸君等の嫌らずとする舊社會なるものは、其根本の基礎に於ては西洋で云へば佛國大革命以後の産物であつて、今日に於ては、英國に於て最も完全に發達して居るものは是れである。其當時に於ては今日の舊社會は最新社會であつたのである。此佛國革命前後に成立した舊社會の根本主義は何であるかと云へば、身體財産の安固を本位とする個人自由之れである。社會は社會として其各員に身體と財産の安固并に自由を保障することを以て最高の使命とする。従つて其社會の凡ての制度一切の機關は、此最高の使命から割出されて居る。國政治の生命も其處にある。憲法と云ふことも之を精神とする。殊に其社會の法律は身體財産の安固自由を期する爲めに、其時迄に成立し來つたあらゆる權力關係あらゆる財産關係を、其重要な度に従つて夫々に保護する。自然法説でも歴史法説でも必竟は成立權力關係があるが儘に認め、之を凡ての機關を以て保護し擁立す

るのである。國と國との間の關係も亦然り、即ち國際法なるものは既成の各國間の權力を殊に英國を中心としてあるが儘に認めて之を擁護するを以て最高の任務として居る。従つて社會の又は國際法の敵とは此既成關係を變更せんと欲する凡ての者を汎稱する言葉である。英國に對する獨逸即ち然りである。

然るに此既成關係は人類全體並に個人各自の最理想的狀態であるならば、其認定の上に築かれたる舊社會は永く新社會たるを失はないで、之に對して不満足を抱き其狀態を嫌らすとするが如き者は狂人か愚人か、兎に角明かに社會の共に齒するを恥づ可き種類の人々のみである。苟くも健全なる常識を具へた者なる以上は、其狀態に満足せざる譯はないのである。然るに右の舊社會の根本主義必ずしも理想的狀態でない時は時勢の進歩するに伴ひ茲に不平家不滿家を喚起せずして已む能はざるのである。

舊社會が起つた時には慥かに其存在の理由はあつたのである。此舊社會が代つて取つた舊々社會とは即ち封建の社會である。封建制度に伴ふ弊害を絶除するには、個人の自由財産の尊重を以て生命とする所の社會は誠に新社會たるの實を備へて居たもので

其時世には最も恰當のものであつた。封建社會は不動産の社會である。社會一切萬事現狀固守の時代である。而して此現狀にして固守せらるゝ限り、凡ての階級凡ての市民農民は或度までの生活の保障を與へられて居た。武士は秩祿を受け町人は家業を傳承し農民は父祖傳來の土地を耕すことによりて、乏しき乍ら生活上に不安を感ずることなく、親より子へ子より孫へ相續して居た。然るに此狀態が破壊せられてからは、此の安固の保障は全く無くなつて、各人各階級各職業何れも皆常住不斷的の不安の狀態（之を自由競争と名く）に陥つた。之を緩和するものは公私の法律による身體財産の擁護であつた。此が與へられなければ社會の根柢が動搖する。ソコデ封建時代に代つて起つた新社會が此身體財産の安固なるものを以つて其存在の第一義と爲したは、如何にも尤も千萬なる事であつた。然るに此身體財産の安固なるものは、身體を維持し財産を維持するの安固であつて、何等維持す可き財産なきものは此安固の保障によつて何の得る所はない。身體を維持する第一義たる職業なく所得なきものは、如何に其安全が保障せられても何の役にも立たぬ。封建時代に於ては生活が保障せられて居たが、此時代には生活

に對して何の保障をも與へては居らぬ。何等かの財産あり又所得ありて生活を支へ得るものは、其生活によつて生くる身體は保安せらるゝが、其等の道のないものは根本に於ての安全は有して居らぬ。

現社會に不満あり慊らずとするものは、必竟此根本的不安の状態に満足せぬことの謂である。所謂個人本位の自由主義とは、其實有てるもの、即ち所有階級財産階級の自由主義有産者の個性の尊重であつた。有たぬもの即ち無産者の個性の尊重は毫も其中に含まれて居らぬ。所謂プロレタリア階級は其身體も其財産も保護せられぬ。何となれば、保護せらる可きものを有して居らぬからである。此社會の政治は必竟有産者の政治である。選舉資格を納税額によつて定めるの一事最も露骨に其真相を語つて居る。有産者即ち賢者たり無産者即ち愚者たることを一般とする舊時代に於ては、ソレデモ大した差支はないが、其著るしく變化して來た今日に至つては不都合千萬な事となる。所謂政黨等と云ふものも若干の取除の外は——労働黨を其中に計上するのは中らない——悉く是れ有産者の機關であつて、無産者の利害とは殆んど没交渉である。議院政治と云ふ

こともプロレタリアの立場から云へば、畢竟一の權力機關に過ぎざるものであつて、彼等の存在に是非なくてはならぬ程の重要を有するものではない。

斯く舊社會の根本立場が身體財産の保障でふ社會大多數にとつては全く無意味にて、風馬牛なる事柄に存して居ることが、之を不満足とす可き理由であると分つたら、新社會に向つて要求す可き事は先第一に此虚理を破壊し、新道德原則を打立つることにある可きは多言を要すまい。即ち有名無實なる身體財産の保護を廢して、代りに名實相具はつた生活の安固を以て根本原則とする新社會を要するのである。所謂社會政策とは或は僅ではあるが、此根本に觸れた又は觸んと欲して居るものである。即ち凡ての社會的學問の中、新社會の實現に意を用ゆること最も多きものと云ふて大過はない。其正反對の極點に立ものは法律諸學就中私法之である。所謂私法は私權の擁護を最高の眼目とする。今日云ふ所の私權とは、人が法律の許す範圍に於て主張し得るインテレストの事である。即ち主として財産權である。換言すれば、有産者の自己利益（セルフ・インテレスト）是である。無産者は何等のインテレストを有たぬ。従つて事實に於て何等の私權

を享有せぬのである。故に彼等無産者に取りては私法なるものは殆ど何等の意味を有して居らぬ。田を耕して食らひ井を掘つて呑む私法我に於て何かあらんと言はんと欲するであらう。此私法制度の下に於ては財産を有する者は其個性を尊重せられ自己の伸張を爲し得ると雖も、其なきものは個性を認められないも同じで、従つて何等の自己伸張を爲し得ぬ。否個性は滅却せられ自己は萎縮する一方あるのみ。所謂犯罪とは斯く個性の蹂躪せられた結果として起るもの最大多数を占めて居る。財産に關する犯罪とは多くは財産なきものが之あるものを侵すことである。是は個性を維持し個性の道徳を守る丈の財産なき爲め起るもの其最も多きに居るのである。然るに今日の舊社會は這箇有産者に對する侵襲を直ちに社會其者に對する侵襲として取扱ひ之を制裁するに其標準よりして爲のである。其實社會其ものは少しも侵害されない場合も尠くはないのである。於茲乎法律は主として有産者を無産者——其或もの——に對して擁護する所の手段となり公平の眼より之を見れば如何にも満足し難き現象を呈するのである。乃ち生活の安全は却つて爲めに妨げらるゝが如きことも往々にして起るのであつて所

謂社會法學の要求、換言すれば今日の如く有産者保護に偏する法律でなく、一般に社會の一切の部員に對して、生活の安全を保護する作用ある可き法律を要求するに至るのである。此れ實に社會政策の期する所と同一趣に出づるものであつて、新社會の實現を期する上に於ては、何事よりも先に私法の根本的社會化を要することである。彼の政黨や彼の政治やは今日に於て舊社會の毒氣を侵染せらるゝこと餘りに多くして、此方面から新社會を呼起す可き勢力を期待することは殆んど不可能である。今日に於ては宗教も倫理も教育も、亦皆舊社會の型に囚はれて其處に新生命を宿して居らぬ。世間或は新教育を唱ふる人ありと雖も、其新の意味たる單に自家廣告の爲めにするに過ぎざるが如く、新社會の教育と云ふ意味にての新教育を主張するものと思ふは大に非也である。今日の教育は有産者を無産者に對して擁護するに必要な道行を教へ込むに過ぎぬ。所謂市民教育（シヴキツク・エヂュケーション）とか自由教育とか云ふものは皆然りで、殊に我邦でよく人の口にする常識の教育、紳士の教育と云ふものは包まず藏さず有産者擁護の教育なることを標榜して居る。彼等の所謂常識とは有産者を尊重することを指して云ふ。

彼等の紳士の教育とは有産者のみ個性を伸張することを意味して居る。今日の文明國に於て最も多く此の有産者擁護の社會制度の發達して居るのは英國である。従つて常識の教育とか紳士の教育とか云ふものも亦英國に於て尊重せられて居る。乍去アダムが耕しエヴァが織りし時代に於て何處に紳士ありしや。誰人が常識の涵養等と云ふことを主張したりしや。紳士の常識とは馬鹿でも金のある人は旦那たり賢くも金のなきものは従者たり、従者はまさに旦那の命維れ奉じ敢て逆ふこと勿れと云ふなり。常識は金のなきものは其個性を主張せざれと云ふなり。故に金なくして個性を主張する者は、一概に皆非常識、淺常識、非紳士的として擯斥せらるゝのである。

今や紳士常識の本来本元たる有産者偏重社會の典型たる英國は、世界の面に於て著しく其プレスチツヂを失ひつゝある。舊社會の舊自由主義、舊個人主義の迷夢より醒め得ざる人々は、かくして其の崇拜の本尊を奪はれんとしつゝある。然る間に新社會到來の機運は刻一刻熟しつゝある。英國は世界の最先覺國である。其英國は此度の戦争に甚だ見苦しい成績しか擧げて居らぬ。其原因は多々あるべしと雖も、其最大なるものは

余輩を以て見れば、其偏したる自由主義偏したる個人主義の上に築かれたる政黨政治と、此政黨政治の出立點として居る紳士の教育が漸次に當初の清新潑刺たる英氣を失つて、多くは形式のみに流るゝに到り、従つて時々刻々熟し來る所の新社會——而して此機運はまた世界の最大文明國たる英國に於て最も早く熟しつゝあるは疑ふ可からざる所である——の要求と乖離することにあると思ふ。換言すれば、アングロサクソン文明の誇とする所は又其最弱點である。我々は其長所は十分に之を認識すると共に、其短所も亦明かに判別せねばならぬ、一も二もなくアングロサクソンの優秀に眩惑せられてはならぬ。其最弱點の一は政治に依つて立つ私法である。教育である。然るを何等の詮索を加へず、其政治、其私法、其教育を模倣せんと欲するは大なる考へ違ひである（此點に於て我邦の政黨者流は甚しく時勢後れの觀がある。又た菊池氏等の學藝大學杯と云ふものは、最も多く舊時代の誤れる教育の形式に囚はれて居るものである）。之に反し英國の最長所は其の經濟道德に在る、其のビジネスに在る、其の財政に在る、其の工場法に在る、換言すれば、傳來の私法と政治と教育との魔力の及ばざる所に、吾人の最も學ぶ可き所が潜在

して居る。所謂ロイド・チヨージズムも或度までは此長所を發揮し從來の私法の型を著るしく打破し、從來の紳士教育有産者本位の政黨政治の弊風を脱したものであつて、他の文明國が大に學ぶ可き所を有して居る。思ふに英國は戦争に敗北するも、此の長所は決して之を失はぬのみならず、却て戦敗——ソレは殆ど疑を容れぬと思ふ——の爲めに刺戟せられて益々此長所を發揮して行くであらう。然れば一方に失ふ所は他方新社會の促進てふ大利益の爲めに優に償ひ得て餘あることゝ信ずる。我邦が模倣すべきは此方面の英國である、新社會促進の活力を最も多く包蔵する所のアングロ・サクソン文明である、彼の舊時代舊道德舊政治舊政黨舊教育の型に囚はれて居る所の功利主義の英國ではない。

知らず林君等の創めたる『新社會』は斯くの如き意味にての新社會の鼓吹を以て任とするものなりや否や。

——大正四年八月七日稿全九月『新社會』掲載——

二 二大政黨對立論を非とす

一 新聞の論説を鵜呑みにすな

予は過日、各學校を代表する青年の聯合演説會に招かれて『日本は英吉利の植民地に非ず』といふ題下に一場の演説を試みた。其中に予はかの二大政黨對立論なるものが、全く英吉利政治の無意義なる模倣であつて、それが現に與へられたる事實であるならば兎も角も、是から骨を折つて日本にそれを移植しようとするのは、好んで英吉利の社會的疾患を求めらるやうなものであるといふ事を痛論した。處が辯論などをやる青年は、主に民黨の新聞紙などを教科書として、それを鵜呑みにして居る連中と見え、演説會が終つて食卓を圍むと、彼等は殆んど云ひ合せたやうに、予の非二大政黨對立論に反對した。青年

が新聞を読むのは結構だが、それを鵝呑みにするのみで、少しも自分の見識を立てるといふ事の出来ないのは困つたものである。文藝にしても政治にしても経済にしても、只與へられたものを受入れるといふだけで、之を咀嚼し之を批評して自分の意見を立てると云ふことが出来ない。今の青年に對しては間違つても好いから、事毎に自分の意見を立て、所謂思索力を養成して貰いたい。それと同時に世の新聞雑誌記者に對しても、之等の事實に徴して自己の責任の愈々重且つ大なることを自覺して貰ひ度い。

二 權力階級の手段としての政黨

予は近頃往々にして『政黨政治は勢也』といふ叫びを耳にする。政黨政治が勢であるといふ事は何ういふ譯であるか、予には能く分らぬが、之は二つの意味に取れる。其一つは政黨政治といふものは文明社會の自然の成行であつて、人力を以て如何ともする事の出来ぬものであるといふ意味と、他の一つは政黨政治は權勢其ものである、實力其ものであるといふ意味とである。先づ第一の場合に就いて考へて見るに、成る程議會政治の存

する以上政黨の起るべきは勿論であるが、現に存する政黨の發展を自然の勢であるといふのは少しく考へものである。更に第二の場合に就いて、政黨は權勢そのものであるといふ事は或る意味に於て正しい。何となれば今日の政黨は其何れも、權力階級が其實力を永久に把持せんとする一種の手段であつて、權勢其ものであるといふ事も云はれる。早い話が英國の政黨にしても、其は決して事物の自然の發達を経て來たものではない。二大政黨對立の事實はあつても、國民の大多數はその孰れにも屬せぬ。二大政黨の對立といふのは、要するに利害を異にする權力階級の對立で、大多數の國民とは全く没交渉のものである。その證據には、英吉利人の自慢して居た二大政黨の對立も、今度の戦争に際しては、殆ど遺憾なき迄に破壊されて居るではないか。

三 必然起るべき労働黨

今日我邦の政黨者流によつて、金科玉條とせらるゝ二大政黨對立の理想は、現に世界何れの國に於いても行はれつゝあるが、英吉利が這回の大戦争に際し、遺憾なくその破産を

暴露した事は前述の通りである。獨逸にも佛蘭西にも其他歐洲各國を通じて二大政黨對立の事實はない。只之あるものは亞米利加のみである。けれども亞米利加に於ける二大政黨對立の弊害に就ては、かのオストロゴルスキーが殆んど完膚なき迄に之を痛論して居る。我國民が所謂憲政運動の犠牲を拂つて到達すべき目的として、予はその弊の餘りに甚しきを思はざるを得ない。二大政黨の對立なるものが、時代後れの甚だしきものであるといふ第一の理由は、その孰れもが國民の大多數を占むる労働階級を代表せぬといふことである。換言すれば、保守自由の二大政黨は、現存する社會の事實と全然交渉のものである。労働階級の勢力は將來如何にしても其頭を擡げ、古き二大政黨對立の夢を破るに相違ない。此時に際し強て二大政黨を對立せしめやうとしても、其結果は、兩者は孰れかゞ労働階級と結託するか、然らざれば激烈なる政争を惹起するに至るべきは、火を賭るよりも瞭かな事である。

四 既存政黨と労働階級

英吉利に於いて保守黨といひ自由黨といふも、國民の大多數を占むる労働階級とは全く没交渉のものである。何方が政權を得たにしても、齊しく是れ權力階級の政府であつて、労働階級とは全く其利害の關係を異にするのである。我邦の政黨は英吉利のそれの如く、截然二大政黨に分れては居らぬが、既存政黨の凡が、同じく權力階級を代表するものであるといふ點に於て英吉利と酷似して居る。歐洲に於ては労働階級の勢力が社會に其頭を擡げて來るに連れて、既存政黨の或るものは之と結託して多少彼等の利益を計り、労働階級も亦既存政黨の勢力を利用して、多少とも自分達の要求を貫徹するといふのが殆ど其例となつて居る。亞米利加に於て社會黨が發達しないのは全く此結果である。亞米利加に於いては二大政黨が選舉の必要上、それ〴〵労働者の要求を容れて其綱領とするので、今迄は純平たる労働黨の發達を見る事なくして止んだ。併しながら此状態は何時までも續くものではない。例へば今度の鐵道の大ストライキにしても、實際は資本家黨たる現存政黨が之に賛成し得べき道理がない、巧に表面を糊塗して労働者の利益を代表するもの〴〵如く見せかけて居るけれども、何時か一度は其正體を暴露する時が來る

に相違ない。其時こそ勞働階級が既存政黨を見捨て、自ら第三黨を組織する時である。之を要するに、第二大政黨の將來は、勞働階級の利益を代表する第三黨が現はれて、之に其理想の夢を破られるか、若しくは兩者の中何れか、勞働階級の前に兜を脱ぐか二途其一である。何れにしても此社會葛藤の前に見て、已に崩れかけて居る第二大政黨の對立を我邦に輸入しようとするのは、骨を折つて態々チレンマにかゝるやうなもので、實に愚の極と云はねばならぬ。

五 勞働黨の成立は勢也

今日我邦の政黨を見るに、其一として勞働者の利益を計る事を政綱として掲げて居るものを見ぬ。之は權力階級が其權勢を維持せんとするの手段たる現存政黨として當然の事である。何となれば、今日の政黨が勞働者の利益を計る事を標榜するのは、政黨その者の自殺的行爲である。茲に於いてか、彼の矯激なるサンチカリストの如き、議會も政黨も到底恃むに足らぬ。勞働者は須らく自己の實力を自覺し、自己實力によつて自己の正

義を主張すべしと説くのであるが、之は勞働者が最後の勝利を占むべき手段でない。勞働者としては矢張り飽く迄も與へられたる憲法の範圍内に於いて政治上の手段により、自己階級の權利を主張しなければならぬ。斯く云へばとて、予は我邦に勞働黨と非勞働黨とを對立せしめ、激烈なる政争を惹起せしめよといふものではない。又吾々がそれを理想として進むといふ事は間違つて居る。只勞働者も現代社會に於ける一大勢力である以上、其勢力を代表とする政黨なくして止むといふ譯に行かぬ。何の途國家が勞働黨といふ一つの勢力を認めなければならぬ時が来るものとしたならば、寧ろ之に相當の立場を與へて、健全なる發達を遂げさせた方が國家の利益であるといふのである。現に歐洲各國に於いては、勞働階級の利益を代表する政黨が第三黨として國家に重大の地位を占め、第二大政黨の間に介在してキャスティングヴォートを占めつゝある。殊に注意すべきは、今度の戰爭に際し、勞働階級の反抗によつて英國の第二大政黨が事實の上に於いて消滅したといふ事である。之は日本の第二大政黨對立主義者の大に考ふべき事實である。事實の前には如何なる理想も屈服せねばならぬ。國家の運命を賭して大戰爭をやらうと

いふ場合には、主義も理想もなくなる。英吉利の二大政黨主義は、此大戦争の前に夢の跡なきが如く消え去つた。

六 獨逸の舉國一致を見よ

苟も現代に國をなすものが、其の政治に於いて労働階級の利益を認めぬといふことは、富國強兵策の上からも斷じて許さるべき事でない。英吉利が國家の運命を賭して空前の大戦争に参加しようといふ危急存亡の秋に際し、労働階級の猛烈なる反抗に遇つて舉國一致の歩調が甚しく亂れたのは、平素労働階級の爲に政治上適當の地歩が與へてなかつた結果である。英吉利の二大政黨は権力階級の對立であつて、其何方が政權を握つても大多數労働階級の利害とは全く没交渉であつた。之が爲に英吉利は大切の場合に労働者の大反抗に逢つて舉國一致の歩調が亂れた。之に反して獨逸は平素から労働階級の利害を代表する社會民主黨に政治上の地歩が與へてあつた爲に、却つて立派に舉國一致の實を擧ぐる事を得た。二大政黨の對立といふ理想は、此點から見ても明かに時代後れの甚だしいものである。

それから予が二大政黨主義に反對するのは、今一つプリンスブル・オブ・コンチニエーチの必要からである。國家が二大政黨に分れて、一つの政黨が國民の信望を失つた場合は、其反對黨が必ず反對の政策を以て之に代るといふ事であると、プリンスブル・オブ・コンチニエーチといふ事は行はれない。併し實際は二大政黨主義の本家本元たる英國と雖も、外交だけはプリンスブル・オブ・コンチニエーチでやつて來た。それはちやうど我邦に於いて陸海軍大臣が政變の外に超然として居る如く、英國に於いても外務大臣だけは別格扱ひされて來た。此點から云ふと英吉利の二大政黨主義も其外交の上に徹底はして居なかつたといふ可きである。

七 政府の棚卸し勘定

然しながらよく考へて見ると、之は單に國防や外交に關する事ばかりでない。財政、經濟の問題にしても、内閣が變つたからといふので、事毎に反對の政策をとられては堪らな

い。予は思ふ。是からの政治には益々政府棚卸し勘定が殖えて行くに相違ない如何に反對黨の政黨と雖も前政府の財政計劃は或る程度まで之を襲踏して行かねばならぬ。例へばかの減債基金還元の如きそれである。經濟政策に至つても同様、或る程度迄はブリンシプルオブコンチニユイティーに従はなければならぬ。例へば鐵道の廣軌案の如き、一度廣軌の方針を決定した以上は、反對黨の政府と雖も之を繼承して一日も早く其完成を期せねばならぬ。産業の保護獎勵にしても、自由主義で飽く迄も之を放任するといふ方針なれば兎も角も、苟も産業を保護獎勵しようといふならば、一定の方針で少くとも三十年や五十年は繼續してやつて見る必要がある。是から先の文明國の政治には何うしても固定資本が多くなつて流通資本が少くなる。二大政黨の對立などいふ事は此點から云つても無意義のものとなる。何となれば、反對黨が政府の失策を責めて取つたとしても、政策の大部分は變らぬ。要するに反對黨は、政府の監督をするといふだけのものがある。又政府として其反對黨に取つて代られるやうな自明の失策を度々されては困る。意見の相違位な程度ならよろしいが、何人が見ても失策に相違ないといふやうな過を度

々やられては困る。又それ程の失策もないのに反對黨が取つて代つたとすれば、それは反對黨が政府の失策を針小棒大にして國民に誣ひたといふ事になる。國民を欺瞞し虚偽の説を流布して、政權を争ふ如き政黨政治は眞平御免を蒙り度い。

八 眞理は中間に在り

之を要するに二大政黨の對立拮抗となると、國民は容易に眞理を捕捉する事が出来ぬ。古い語であるが、眞理は中間に在りて、事實の問題は、慎重なる吟味と忠實なる研究との結果に俟つべきもので、却々一夜漬の選舉演説などで分るべき性質のものでない。二大政黨が分立して選舉の競争に火花を散す時、何人が其間から嚴正公平なる判断を捉へ得るものぞ。其處へ行くと獨逸のやうに數黨が分立して、種々の立場から種々の意見を發表する國に在つては、國民は冷靜に判断を下して、其中最も自己の利害に近いもの、自己の意見に近いものに投票する事が出来る。

九 高遠の理想よりも手近な實行

日本の現状は二大政黨の對立とは云へぬが、大勢は殆どそれに近く、其弊害に至つては斷じて英米二國のそれに譲らぬ。最近の選舉に於いても、政友會に投票するのは厭だが、同志會に投票するのも面白くないといふやうな國民が澤山有つたことは想像に難からぬ。さればこそ大正五年も末といふに見るが如き變態の内閣が生れた。閣族内閣も官僚内閣も國民が求めて與へられたものに外ならぬ。若し政友會、同志會の外に、國民の信頼を買ふに足るべき有力な第三黨、第四黨が有つたならば、今日恐らく此變態内閣を現出せずとも好かつたであらう。見よ、二大政黨主義は已に其本家本元たる英吉利に於いて恐るべき政治的、社會的、經濟的組織の大缺陷を暴露した。さうして政治に於いても戦争に於いても、獨逸の多黨主義に對して見るも無殘の敗を取つた。二大政黨主義の亡者は今日尙ほ英吉利の例に倣つて、陸海軍大臣は必ず文官を以て之にあてよと絶叫して居るが其英國でさへ今は過去の失敗に懲りて軍務大臣には武官が出て之に當つた。陸海軍

大臣を必ず武官に限るとするのも愚であるが、反對に必ず文官に限れと云ふのも間違つた話である。吾々は一日も早く英吉利といふ偶像崇拜の夢から醒めねばならぬ。

最後に予は日本の政黨政治が何時まで經つても、官僚閥族の支配を免れる事の出来ぬのは、全く二大政黨對立の妄想が其累をなして居るからであるといふ事を斷言し度い。政治は手近い所から改良して行くがよい。國防にせよ、財政にせよ、外交にせよ、今日一步を進め、明日又一步を進めるといふやうにして行けばそれで好いのだ。政治は空論に非ずして實行に在る、『高遠の理想』は語らずともだ。例へば日支親善といふ問題がある、誰が日支衝突せよと主張するものがあらう。日支親善といふのみで、少しも其實を擧げないのは云はぬも同じ事だ。革命黨を助けるか、共和政府に伍するか、南方に大陸政策の根據を置くか、北方に之を求めるか、政治上の干渉までもするか、利權の獲得に止めるか、本を定めずして實績の擧がる道理がない。趙然主義の『不言實行』もよろしくないが、高遠なる理想を説くもの、『多言不實行』も亦甚だよろしくない。今日の日本は少しづつでも手近な所から其主義政綱を行つて行く政治家を要求する。而も斯くの如き堅實

なる政治の發展を妨げるものは、徒に英吉利流の政治を模倣せんとする二大政黨主義の妄想である。

更に二大政黨主義の弊としては、一國を擧げて政争の渦中に投じ、教育も産業も地方の自治も悉く其の犠牲として、國家内に二個の小王國を現出するに至る恐れがあることは是れである。我邦に於いても各地の補缺選舉は正にそれで、第三黨、第四黨の存立が此弊害を幾分とも匡救し得べきは言を俟たぬ。予輩は我國民が一日も早く英吉利てふ偶像崇拜の夢から醒めて、二大政黨對立の理想が時代後れの甚しきものであるといふ事を、知覺するに至らん事を切望して止まざるものである。

||大正五年十一月十日『實生活』掲載||

三 新らしい意味のデモクラシー

此頃我日本に於て就中新しい思想を懐いて居る人々の間に甚だ勢力のある流行語の一つは、デモクラシーと云ふことである。然し此語の用法は必ずしも一定して居らず、又た之に對する世人の向背も一向首尾貫徹して居らぬ。例へば『デモクラシーの心理』と題した一文が、内容に於て別に大して所謂危険思想を包んで居らぬにも拘らず、其文をのせた某雑誌は發賣禁止を命ぜられた。又たツイ先日臨時議會に於て貴族院議員高橋博士は政府に質問して、歐米諸國に於ては此度の大戰はオートクラシーに對するデモクラシーの戰であると言つて居るが、我政府の之に對する所見如何と言つたら、寺内總理大臣は此質問に直答する事を避けて、唯だ外國に於ては如何様なりとも、我邦の國體は些の影響を被るものにあらずと答へた。心ある者から見れば斯くの如きは不透徹も亦甚しいのであつて、獨逸のオートクラシーの時勢後れなることは、現に昨今七月十七日此文を草す頻りに來る外國電報の傳ふる、獨逸政界の危機が最もよく之を證明して居る。我邦には明治の初年以來獨逸流のオートクラシーは決して存して居らず、又た其來ることを否定して居る。英佛米の諸國と共に我日本が此のオートクラシーを敵として其廢滅を期するの

は、我國是に合した正々堂々の事たる可きこと、我々は信じて居る。寺内總理が此事を、すら明言するのを避けたのは、オートクラシーを可なりとするためではなく、デモクラシーと云ふ事に對し或は誤れる判断を下して居る爲め、我邦がデモクラシーに左袒すると云はれるのは不可也と考へた爲ではあるまいか。果して然りとすれば此は甚だ惜む可き事である。何となれば、我日本の國體は如何なる點に於てもデモクラシーを容れぬものではない。唯だ舊い意味時代後れのデモクラシー、否な其墮落態たるデマゴギーは決して我邦に許されぬものである。真正なる殊に新しい意味のデモクラシーに至つては、我國是は明治の初めに於て既に十分に之を認承したものである。否な封建時代以前の我邦に於ては多くの度合に於て、此の正しく解せられたるデモクラシーを許して居たと云ひ得るのである。

然らば何をか舊きデモクラシーと云ひ何をか新しいデモクラシーと云ふか。舊いデモクラシーとは名斗りのデモクラシーである本當の其れではない、『デモス』なる名の下に、實は國民中の或特殊階級のみを意味して居るものである。之に反し正しき

新しきデモクラシーとは眞にデモス、即ち國民の凡ての階級凡ての身分を總括するもの、謂である。否其れでなくてはならぬのである。

舊きデモクラシーは唯だ政治の一方面のみを見た。彼等は政治を以て人文の一切と考ふる誤謬より出立して居る。成程十七、十八世紀に於ては政治は甚だ肝要であつて、人文の向上は先づ政治上の新運動に待たねばならなかつた。而して主として第一、第二階級を抑へて、當時國民の中堅たり精髓たりし第三階級 *Bourgeoisie* の驀進を必要とした。此の第三階級の驀進には政治上の改革が最重要問題であつた。故に代議政體の樹立と云ふ政治上の主張が最も重要視せられた。之れがデモクラシーと名づけられた。而して之を運用する爲めに、所謂政黨は其最有力の武器として採用せられ、代議政治即ち政黨政治と云ふ形勢を造り上げた。第一、第二階級の特む所は固定の財産である、不動産である。第三階級は之に反して流動の財産即ち動産を力の源とするものである。故にデモクラシーとは動産を以て不動産に戦を挑むこと、考へられた。かくて人格の自由と財産の保障とが政治の二大緊要事と叫ばれたのである。

然るに不動産にせよ動産にせよ、財産を有するものは國民の全部ではない否却て其小部分である。國民の大部分は何等の財産を持たぬものである。従つて財産の保障と云ふ事は彼等に取つては殆んど意味を爲さぬ。又た人格の自由と云ふ事も實は財産を有する人の人格自由に限られて、財産なきものは人格の自由を實際に享有することは出来ないのである。即ち此等多數の無産者に取りては代議政體立憲政治は格別の恩恵を齎らさないのである。民法の何百條其五分の四は財産ある者を保護する條文であつて、財産なく自己の勞働にのみ衣食するものは、雇傭契約に關する十何ヶ條の外民法の恩恵に浴せぬ。彼等は謂ふだらう、井を掘て呑み田を耕して食ふ民法我に於て何かあらんと。實に此くの如き有様である。故に其のデモクラシーの發達は此等の多數の國民の休戚には全く没交渉である。其の爲めに幾多の紛亂を來し苦しみを嘗めるのは實に馬鹿らしい事である。政黨政治が樹立したとて國民の大多數は何事も之によりて利する所はない。唯一部の有産階級が或は利し或は損するに止まつて居る。我日本が今更骨を折つて、此くの如き時代後れの歐洲の眞似をする爲めに苦しみを重ねるは愚の至りであつ

て若し此意味のデモクラシーの爲めに歐洲大戰が戦はれるものならば、我日本は須く參加を拒む可きである。

然るに歐に於ても米に於ても眞正の新しいデモクラシーの勢は日一日と熟して居る。彼等の得んとして戦ふ所は右様の時代後れのものではない。新しい眞のデモクラシー即ち國民全體を意味する、殊に財産なく勞働にのみ衣食する大多數人民のクラシーと云ふ意味にてのデモクラシーである。佛蘭西に於てレオン・ブルジョア以下の人々の主張する『ソリダリテー・ソシアール』とは此意味に解す可きものである。此のデモクラシーは最早政治を以て萬事とするのでない、否眞のクラシーは人間としての勝利を云ふので、單に政治上の權力を奪取るなどと云ふ低級な一手段を以て甘んずるものではない。彼の獨逸社會民主黨の根本主張たる階級戦争、即ち第四階級は先づ政治上の權力を第三階級より奪ひ來らざる可からずと云ふのは、決して眞正なるデモクラシーの主張ではない、プロレタリアン・デモクラシーに過ぎないもので、矢張舊式のデモクラシーの一種と目す可きものである。此新しいデモクラシーとは人文の一切に涉りての解放と勝利と

を意味するものである。下層無産の大多數に取つて人文の勝利とは、先以て經濟上の安固生活の保障、即ち予の常に主張する生存權の認承が與へられるのでなければならぬ。従て先以て經濟上のデモクラシーとなつて顯はれる。英米人の所謂『インダストリアル・デモクラシー』是れである。我日本に於ては殊に徳川時代に於ては四民皆其業を守り、兎に角生活の保障は與へられてあつた。形式的には四民の別嚴重にして甚しく人格の自由を束縛して居る様である。成程今日と比べては慥に左様であつた。乍併他方に於て其は生活の安固を意味して居たを看道してはならぬ。皮相な新文明論者は其誤に陥つて居る。今日の新しいデモクラシーは更らにより進んだ形に於て、此の昔あつた生活の安固を更により完全に、徹底的により、高き意味に於て與へんとするものである。其でなければデモクラシーとはならぬ。而して其を武士とか農民とかの一部階級のみ止めず、國民の全部に對して生活の安全を與へんとするものが、今日の眞正なるデモクラシーである。此は決して日本の國體と矛盾するものではない。否却つて昔の王朝時代大化の時代の精神を、更らにより大にしたものと見ることも出来るものである。

此度の戦争は國民の兵士としての價値が政治家よりも將官よりも何よりも勝つて、國に取つては大切なるものを十分以上に示した。而して此れによつて右云ふ意味のデモクラシーの勢を深くし強くし大きくした。何となれば、國の礎たり國力の源泉たる國民に生活の保障を與ふる國にあらざれば、一朝事あるの日共有て一切のものを、其精神其身體を必要に應じて徵發するの資格なきものたるを明かにした。故に向後世界の表に雄飛し文化國の地位を保たうと志す大國家は、平時に於てデモクラシーの貫徹に勉め、經濟上に於て而して人文の一切に於て其國民を強くして置くことが、主として何事にも勝る肝要事たること、一點の疑を容る可きなきに至つたのである。

此く觀察すれば、デモクラシーの一語にビク／＼することは不必要で、貴院の質問を好機會として堂々と經世的抱負を述べること出来るし、又た青年者流の間に誤り傳へられて居り、又た徹底して居らぬ乍ら、段々普及して來りつゝあるデモクラシー思想を善い方へ導いて行くことが出来る可き筈である。

|| 大正六年七月十六日稿全八月十六日『極東時報』掲載 ||

附錄一 寺内内閣の社會的施設を評す

現政府の社會的施設は、之れを大限内閣の同種類の施設に比べると、少くとも次の事は云へると思ふ。即ち其主義は一應徹底してあるし若干の誠意も認められる。大限内閣のやうに一貫した主義も何も無く、申さば支離滅裂な輕佻の施設と同視すべきではない。大限内閣の米價調節、蠶絲救済などは、主義の上では徹底しなかつたし誠意は認められず、結果についても殆んど何人をも利してゐないのみならず、害を寧ろ國家に與へた。之に比べると現政府の社會的施設も、結果から云へば一向感服出來ないけれども、其動機には誠意があり、實行の上にも多少一貫した筋道が立つてゐると思ふ。

然し乍ら其の現政府の施設も、觀來れば随分批議すべき點が少くない。物價調節令・船舶管理令の如きも第一時機の點から云ふと甚だ遅れ、手續の上から云ふと甚だ誤つてゐる。今日に至つてかゝる施設を爲すならば、豫め臨時議會に於て誠意を以て政府の方針のある所を披瀝し、議會の協賛を得べきであつた。法律を作つて置けと迄は云はないが、大體に於て如何なる方針を執る可きかに就て、豫め政府の意圖を述べて國民の意思を問ふべきであつた。然るに臨時議會

に於ては何等其邊の配慮は無く、今日に至つて遂かに思着いた如く應接に邊の無い程各級の施設を爲すは、立憲政治の上から云つて其手續を謬つた者と云はねばならぬ。之を法律の上から責めない迄も、折角の政府の誠意が國民に徹底しないと云ふ大なる損害を招いたではないか。時機の遅れた事も單に時機のみの事ではなく、政府の誠意を普く知らしめる點に於て損がある。船舶管理令も英米等の聯合國に強要された結果だと解釋してゐる者さへある。此説は必ずしも僻みと許り斷言する事は出來ない。之れも主として時機を過つたから起つた缺點である。乍去最も肝要な事は内容と實質である。物價調節令と云ふ名稱は國民が勝手に附したもので、政府は必ずしも之れによつて各級の物價を調節しやうとしたのではない。物價調節令では名が大きい過て其實施される内容が大變小さい。政府が積極的に物價調節をやる積ならば、暴利を目的とする奸商取締などは小なる一部分に過ぎない。全體に亘る物價調節をしないで、部分的な方法を執つたのは其成功を傷ける所以である。若し政府が全般に亘る物價調節を企てるならば、我邦の物價騰貴の根本原因に斧鉞を加ふべきである。今日我邦に於ける物價騰貴の主なる原因は、兌換券の過發である。であるから兌換券の過發を抑制し、餘分のものは回收すると云ふやうな根本的施設をしないと、物價調節も甚だ無意味に了る。政府は或はそれも追つて行く積りだと云ふかも知れないが、既に奸商を取締つて物價の上一指を染めたのだから、追つて行くと云ふは手緩りであり怠慢でもあると云はねばならぬ。故に政府は自ら唱へないまでも、あ

の施設を物價調節令と呼ぶは過つた名稱である。單に一部分的な施設に過ぎない。戦争を利用し又は最近の風水害に乗じて、不當なる利益を食ふ輩のあるは寔に慨嘆すべきである。かゝる輩に政府が注目してそれを取締らんとしたのは、結果は兎も角も、其趣意には我輩は双手を擧げて賛成する。大隈内閣の遣り方とは大變な違ひである。元來今までの政府は歴代皆財産階級に對して不當な自由を認め其の跋扈を許して、少しでも財産階級の利益を妨ぐる事を恐れてゐた。現政府が此歴代内閣共通の情弊を矯めて破天荒な事をしたのは、少くともしやうと決心したのは甚だ結構なことである。或人は之を脅喝恫喝に過ぎぬと云ふ、然し政治は罪人を作るのを以て目的とするものではない。罪人を作る前に之れを取締る事が出来れば結構である。罰よりも恫喝の方がより、小なる悪である。効能さへ同じなら恫喝の方が宜しい。然し乍ら惜しい哉成績から云ふと小なる暴利者が處罰されたのは認められるが、大なるものは勿論中なる暴利者も何等の取締りを受けてゐない。風水害に乗じて二十五錢のものを一圓に賣り、五圓のものを十圓に賣つたと云ふ様な小さな奸商は取締られたが、千萬圓のものを二千萬圓に、五百萬圓のものを千萬圓に賣つて非常な暴利を占めてゐる輩は恬然として顧みられない。大きな暴利者や財産階級は全く免がれてゐる。尤も之れは現日本政府のみを咎むべきではない。交戦諸國に於ても免がれない現象である。近來米國が參戰して以來種々の珍聞奇聞が傳はるが、小なる暴利者が取締りを受け、大なるものが處罰されない例は枚擧に遑がない。英

に於ても同じ現象が公然の秘密となつてゐる。内閣更迭と云ふ事を唯一の目的とするものから云へば、之れも政府攻撃材料にはなるかも知れないが、世界の形勢を見れば獨り現政府のみを咎める譯には行かぬ。

それにしても、我邦のは餘りに偏し過ぎてゐる。殊に残念なのは警察の力を藉りると有効で、藉りないと効果の擧がらない事である。警察の力は即ち政府の力を代表してゐるのであつて、此點に於て我邦は立憲國と云つても、依然警察國たる實を脱しないのである。警察の有力なるは一面は甚だ結構だが、一面には其の力を藉りなければ政治が行はれない事になる。警察政治は立憲の本義から云へば甚だ慨くべき事である。船舶管理令も之れと同様、警察の力が及ぶ範圍が暴利取締りより少いから、從て其の効を奏する事も暴利取締りより少い。一にも警察二にも警察である。而かも船舶管理令が多少有効なのは、物價調節令と同じく、小なる社外船の持主の間で、郵船會社の如き大なるものは無關係である。社外船の持主にしても大なるものは郵船會社と同様、高見の見物をしてゐられるのである。從來しない事を斷行したのは可いが、之れが爲めに警察政治の色彩を更に濃くしたるは功罪果して相償ふか、長い眼で見ると寧ろ功は過を償はずと斷言しなければならぬ。若し此の調子を以て他の種々の問題に向ふと、それこそ由々數大事となりはしないか。例へば先頃各所に起つた同盟罷工の如きを、警察の力で片端から鎮壓するとなるとそれこそ大事である。資本家に對しても工場法の施行は結構であるが、それも警

警察の力で工場監督官が警察官の如くなるのは困つたものである。工場法を以て工場を取締るは労働者を保護する爲めである。労働者を保護するは畢竟國の生産力を増す所以である。警察政治を以て工場を取締つても、徒らに餘計な負擔をなす事になるのでは駄目である。

併し余輩は決して我邦の警察が諒解の無い干渉許りしてゐると云ふのでは無い。要するに問題は人である。警察機關の主腦に其の人を得れば、警察政治でも立派な事は出来る。例へば先頃の早稻田大學の紛擾に對する警察のやり方である。大隈侯の周圍にある人々は警察の干渉が不十分であると攻撃して居るが、監視廳や所轄警察署が已むを得ざる場合にあらざれば、干渉せずとの態度を取つたことは、同盟罷工やロックアウトの場合にも歓迎すべきである。右は諒解ある警察政治にはなかく、いゝ事もあるといふ小さな例である。畢竟問題は警察政治其ものよりも、主腦者其人の理解人格にある。

船舶管理令に關聯して海上保険再保險の官督も亦一の社會的施設と見られる。之れは批難する人も有るが、余輩は現内閣の行つた善政の一であると思ふ。始めから再保險官督の主義を取らべかりしを、今までは戦時補償法をやつて居た爲め國民に餘程損を與へた。政府が何もしないなら兎も角、苟も何かしやうとするならば、豊富なる外國の經驗を利用すべきである。然るに我邦では今まで外國の實例を顧みず、一番拙劣な補償法をやつて居た。再保險の官督は其成績或は戦時補償法より悪いかも知れないが、主義としては無論此方を歓迎すべきである。

暴利取締令を批難する人は、やつても物價調節に功無し、何故最高價格を制定しないかと云ふが、之れは批難する方が批難される人より馬鹿である。生活の必需品について最高價格を定めるは一應開えたが、到底實行さるべき事でないのは、獨逸英吉利が具體的の例を示して居る。それを行はれ得るものと思ふは、經濟の理法を全く無視したものである。獨逸や英吉利は皆背に腹は換へられずにやつて、而かも失敗したのに拘はらず、大變狀態の違ふ我邦に實施しやうと云ふのは、益々警察政治の勢を助長させるものである。日毎に常なく變動する日用品の價格を制定して、それを破つたものは警察の力でどしどし檢束するとすれば由々敷事になる。それよりも寧ろ獨逸が試みつゝある官沒主義の方が遙かに有効である。然し之れは我邦の現狀態では行ふ可き施設ではない。最高價格制定論の如きに比ぶれば、少くとも現政府の方針は徹底してゐると云へる。

今後の施設についての希望としては、國民の生活に密接な關係ある積極的の施設をするならば、官僚の獨斷でやらずに、國民の意思、代表者の意見、専門家の意見を十分尊重することはである。海上保険再保險の官業には民間の専門家を委員にしたやうであるが、各般の施設は皆さうありたい。かの經濟調査會の如く、何も知らぬ有象無象を並べた大隈流のやり方では、何等効果ある施設も出来るものではない。既に臨時外交調査會には政黨の首領さへ入つてゐるではないか。一般の社會的施設をなすならば、眞に知識ある公人の意見に飽くまで聽くべきである。さらで

だに一般の社會的施設は、之れを政治施設などに比して、大抵萬全を期せられないもので、實行上何等かの缺點を生じ易いものである。故に完全は期せられないとしても、出来るだけ缺點の無いやうな施設を企てやうとするならば、日本が持つ所の人材は遺漏なく之を求めて、野に遺賢なからしめるやうにしなければならぬ。

||大正六年十一月「中央公論」掲載||

附録二 速かに物價調査會を起せ

一

近來の諸物價騰貴は實に驚く可きものである。嘘の様な話と稱して大過ない。今迄は物價騰貴と云つても他方に我邦の富の増進があるから、我々の國富増進の犠牲となつて居る者であると考へて我慢に我慢を重ねて來たが、此頃の様に何から何まで悉く騰貴に重ぬるに騰貴を以てすると云ふ勢では、殆んど背に腹は換へられぬとの感を惹き起さざるを得ぬ。我國民の生活の根柢は根本的に動搖し出したのである。此勢にして底止せざるときは、或は恐る、其結果は豫想外のことになるであらう。眞に戦争の爲の不得止ことであるならば、今まで忍耐し來つた者

である以上、更に忍耐す可き筈ではあるが、果して眞に不可避不得止ものばかりであらうか否か、徒らに議論を闘はせて居ては際限がない。我輩は今急速に物價騰貴の原因を徹底的に學問上及實際上から調査する爲めに、大規模なる調査會を起すの急を主張したいと思ふものである。

二

農商務の當局は買占め賣惜しみを以て物價騰貴の大原因なりとする立場から、暴利取締の省令を發布し、最近同半戒告問題なるものを惹起したが、民権蹂躪の非難に驚いて少し手を緩めたのではないかと疑はれる。小麥類の價の暴騰に對する處置は唯だ評判斗りに止まつて居る。況んや其他のものに於てをや。暴利取締令の運用が物價を低落せしめないとて攻撃するものもあるが、それは思はざるの甚しいものであつて、農商務省の一令で直に物價が下落するものも信ずるものもあらば、其賛成者たると反對者たると問はず、均しく甚だ無知な人々と云はねばならぬ。暴利取締令で物價の奔騰を防止し能はざることとは始めより明なる所で、其實施の結果を見ずとも分り切つた話である。大藏當局者も買占め賣惜しみを以て重なる原因と認める意味の論説を金貨本位の記念會でした。然れば其が現内閣の物價騰貴原因觀と看做す可きであらうが、政府は果して何れ丈けの調査を遂げた。で此結論に到着したのであるか、甚だ以て疑はざるを得ない。

附録二

速かに物價調査會を起せ

他方民間識者の議論を聞くに、是れ又た均しく別段深い調査は遂げた上に到着した所ではない様である。而してこれは無理ならぬ事である。民間の一個人としては到底根本的に調査すべき便益がない。我輩自らは兌換券の増發が最も重大なる原因ではないかと兼てより考へて居るもので、即ち本誌上にも其の説を公けにし、又た英國に於ける物價騰貴の研究に注意を加へて居るのであるが、ニコルソンの研究に倣つて、同様の調査をして見たいと切望して居り乍ら、其れが出来ない。何故となれば、必要なる材料が殆んどなく、又あるだらうと考へて居るものも讀書生としては、之を手に入れることが不可能である。其便宜を有する人は調査に要する餘暇を持たぬ、餘暇のあるものは其力を持たぬのであつて、斯くては何時迄待つても真正なる原因を究めず、唯想像や臆説で議論し、其想像を根柢として實際上の方法手段を立てると云ふ状態を免れぬ。國民の生活に今や重大の關係ある此問題が、斯く心細い状態に於てのみ取扱はれて居るといふことは甚だ憂ふ可きことである。

三

農商務省は生産省であつて、主として生産振興と云ふ立場から政策を立てる、これは不得止所であるが、今は生産振興よりも、消費の圓滿を大に考へ圖らねばならぬこととなつたのである。然るに生産振興の爲めには本年度の豫算には、各種の調査費が新たに計上せられて居るが、我輩

は今急切に着手す可き調査事業は、物價調査是であると確信する。其爲めに要する經費は、多少多くとも直ちに其が役に立つ、國民の生活の上に要があるのである。生産振興にのみ餘りに偏することは、如何に資本家本位の今日の國家たりとも、甚だ以て不公平の甚しいものである。生産振興の爲めに多くの調査費を要求する政府は、何故物價調査會を起す可く、之に必要な經費を計上せぬのであるか。其經費は如何にも多くとも厭はぬが、實際左まで多額を要することではないと思ふ。

四

此の調査は成る可く大仕掛のものでなければならぬ。又た全く公平無私のものでなければならぬ。然し實際の可能性は限られたものであるから其は致方ない。我邦現在の状態の許す限りに於て、徹底的に根本的に行ふ可きである。其れには從來數多くあつた各種調査會の如き不得要領のものであつてはならぬ、政黨關係などから委員を振り當てるものであつてはならぬ、官吏に役徳恩恵を加ふる機關に化せしめてはならぬ。眞に能力ある人々のみを集めて、其人々の獻身的努力を持つものでなければならぬ。報酬や勳章や、金盃目當のものであつてはならぬ、何省から何人とか何の團體から一人づゝとか云ふ情實のものであつてはならぬ。其人一人々々に吟味して眞に資格あり實力ある人を集め、而して技倆ある屬僚を附加し十分に經費を費

して、學問上からも實際上からも十分に研究調査せしむるのでなければならぬ。農商務省には臨時産業調査局と云ふものがある。差當り之を利用して、官界並に民間から然る可き人を之に参加せしめ、公平なる調査を爲さしめたら或は費少くして効多いかも知れぬ、其詳細は當局の立案に任せるとして、兎に角急速に調査を開始し其結果を早く知らせて貰ひ、而して其結果に基いて爲す可き事はドシ／＼やつて貰ひ度いものである。其れには可成大なる權能を與へねばならぬ。若し我輩等の考ふる如く兌換券の増額が最大原因なれば、其收縮を計らねばならぬので、此の實行は中々六ヶ敷であらう。然し公平なる調査の結果左様でありとしたならば、必ず收縮を計ると云ふ覺悟を以て居らねばならぬ。

五

現内閣の命数は時々刻々に盡きつゝある。せめて此一事業なりとも之を興して置けば、多少の罪ほろぼしとなるであらう。或は調査の結了せぬ内に内閣は倒れるかも知れぬが、一度始めて置けば如何なる人々が後繼者となつても、之を廢することはすまい。而して幾分なりとも調査の結果が出来上れば、現内閣はせめて其れ丈けなりとも、之を冥土への土産として没落し得るのである。社會政策の語を切りと濫用した現内閣はせめて此一事によつて、社會政策に對して詫を入れることにしたらよからう。無暗威張る計りが威信を保つ所以ではない、多少は善根を

積んで置けば没落後に於ても相當の報はあるだらう。

併し此事業は獨り政府の責任のみではない、苟くも國民の安寧を志す者は、夫々の分に應じて獻替す可きである。商業會議所等も資本階級の利益を伸張する事計り計割して居ないで、少しは國民一般の休戚に關する此種問題に其力を用ゆ可きである。政府にして若し何の施設をしないならば、商業會議所の連合事業として、やゝ大規模なる調査會を起しても然る可き事と思ふ。兎に角誰が企てゝ誰が其の任に當つても構はぬ、我輩は一日も早く物價調査會が設けられて、學問的に實地的に公平無私にして、而して權威ある徹底的研究の企てられんことを切望して已まないものである。

|| 大正六年二月十五日稿全三月『理財評論』掲載 ||

附録三 奸商取締の手を緩むること勿れ

一

曩きに米價騰貴に就いて暴利取締令を布告した農商務大臣が、最近また其運用の一つとして伊勢の國の何某と云ふ者に對して戒告を發したが、それが大分世間で問題になつて居るやうで

附録三 奸商取締の手を緩むること勿れ

日の時勢は之を窮屈に解釋する事を許さない。直に國利民福といふ廣い立場から、實質上に廣い解釋を採らなければならぬ。即ちよしんば窮屈に云へば憲法違反となつても、少し極端な暴論の様ではあるけれども、其條文を廣く解釋し若しく其條文の文句に恃つても、營業の自由を制限する事は一向差支へないと思ふ。否、それが却て社會政策といふ事を度外視するを得ない今日の時勢の眞の要求である。

偕て暴利取締令による戒告の爲めに民権が蹂躪されたとしても、其蹂躪されたる民権とは如何なる内容を有つか、營業の自由が侵害されたとしても、其侵害された營業の自由は如何なる内容を有つものであるかといふ事を考へて見なければならぬ。農商務大臣が戒告を發した當の相手とは、經濟上から云へば無用なる營業者である。否、有害なる營業者である。よしんば窮屈に解釋して民権なるものを蹂躪したとしても、其民権とは買占めに由つて奇利を博せんと欲する者の民権である。自由を保障せらるべき營業とは如何なる營業かと云ふと、經濟上何等存在の理由を許されない無用の營業である。故に國利民福にして之を要求するならば、斯の如き内容を有する民権は多少蹂躪しても構はない。斯の如き内容を有する營業は、自由を侵害しても差支へない事、例へば公けの風俗を紊る營業者は、警察的に種々束縛せらる可きが如くである。伊勢の何某なる不都合の人間が戒告を發せられたからとて、俄かに叫び出すのは奇怪しい。即ち憲法違反といふ非難は、爲にする所あるものゝ議論と斷言しても差支へないのである。我輩が

農商務大臣に切望するのは、斯くの如き愚論に惑はさるゝことなく所信を斷行せん事である。

二

憲法の問題は假りに之れを専門家に譲るとして、今日の經濟生活の實際から云つて、政府が發布した今度の戒告に就いては、之れを二つに分けて論ずる必要がある。即ちかの戒告なるものが、主義として當を得たものか否かといふ問題と、實行の方法として當を得たものか否かといふ問題とである。此兩者は決して混同してはならない。

偕て第一にかの戒告が實行の問題として當を得たものなるや否やを先に考へて見よう。農商務大臣が戒告を發したが爲に一向米價が下らない、即ち其目的を達しないものであつた。であるから此點から云へば、或は農商務大臣の戒告處分は失當であつたと云ひ得るかも知れない。然しながら元來一片の戒告位で、米價の騰貴を防ぎ得るものと思ふのが大いなる間違である。故に我輩は米價の騰貴を防ぐ作用が少いとしても、あの戒告は一向差支へないものであると思ふ。否、それで結構なものであると斷言するを憚らない。我輩が觀て以つて結構であると思ふのは、米價を調節するといふ意味からではない。此點から考へればあの戒告に大した効果の無い事は初めから判り切つて居る。戒告に次ぐに戒告を以つて米價の調節が出来ると思ふのは、從來歐米諸國が物價物資の調節に幾多の苦い經驗を嘗めてゐる事實を無視したもので、

附録三

奸商取締の手を緩むること勿れ

餘りに樂天的に過ぎる。否、我徳川幕府の米價取立て、引下げ兩政策の失敗の歴史を無視したるのである（詳しくは本庄學士著『徳川時代の米價政策を』を見よ）。若し農商務大臣が其積りである戒告を發したものでならば、愚極まれりと云ふべきである。該戒告に其作用の無い事は初から判り切つた事で、何も結果を待つて非難を下すべきではない。我輩がかの戒告を以つて結構と云つたのは此意味ではなくて、道徳的効果の上から云つたのである。であるから假令調節の作用は少くとも、不當の買占めをやる者に對して、戒告するのは結構だと云ふのである。一體今までの内閣は、營業の自由の侵害とか民権の蹂躪とかいふやうな非難に對して、餘りに神經過敏であつた。何等の財産の無い労働階級に對しては、それに十倍二十倍する侵害を加へても一向議論を惹き起さない、財權階級・富豪者流に對しては、少しでも之に制限を加へると、直ちに矢筈しい問題を惹起す。政黨なども之に應援してワイ／＼騒ぐといふのは奇怪千萬な話である。況んや今度の如く民権を蹂躪され、營業の自由を侵害されたと號する者は、社會に取つて無用にして有害なる階級の者である。少くとも労働階級に加へる壓迫と同程度の壓迫を加へても一向差支へないものである。然るに取引所機投資者流の醜類等が寄つて集つて抗議を申立てるとか、陳述するとか云つて問題を惹き起すのは、之れこそ却つて國利民福の敵である。彼等は本來なら聲を潜めて謹慎して居るべき筈である。然るに臆面も無く大聲叱呼して示威的舉動に出づるとは、不埒千萬と云はねばならぬ。幸ひに輿論の機關は此戒告に對しては、多くは其道徳的効果の

上からして戒告處分を是認して居る。政府反對黨の新聞さへも多くは左様に論じて居るのは大に喜ぶべき事である。

第二に主義の問題として善かつたか悪かつたかと云ふに、我輩は主義の問題としても非常に善かつたと思ふ。國民の經濟生活に全然干渉しない國家ならば則ち已む、然らざる國家に於ては、斯くの如き場合に際して政府の有する權限を活用するといふ事は、主義として甚だ結構である。況んや實行方法として或は拙劣を極めて居つたかも知れないが、少くとも當事者たる農商務大臣の戒告を發した動機には、何等の私心を挾んで居なかつたと思像する事が出来るに於ておや。強いて云へば、之れによつて大向の喝采を博さうといふ野心が無かつたとは云へないが、それは聖人君子ならぬ政治家としては已むを得ない。眼前に具體的に私利を圖つたもので無い事は疑ひない、國の爲めにしたといふ事は確かである。故に主義としても我輩は雙手を擧げて賛成するものである。

三

唯遺憾なるは農商務大臣の態度が當を得て居ない事である。殊に議會に於ける答辯に極めて激越なる語調或は恫喝的の言辭を輕々しく用ひた事は甚だ残念である。之れでは道理の問題を變じて感情の問題として了ふ恐れがある。又國利民福の上から已むを得ずにやつたもの

で、決して事を好んでした處置ではないといふ事は、何處までも明かにして置く必要があつた。然るに仲小路氏の言動は如何にも書生的壯士的であつて、政治家の守るべき謹慎を守らなかつた憾みがある。之れが爲めに折角の善い企を感情的に悪いものにした恐れがある。此點は我輩吳れ、も遺憾に堪へない。然しながら戒告されたる者、若くは其一味徒黨の輩が餘りに無耻なる言動に出でた爲に、大臣と雖も人間である以上、多少感情の昂まるのは已むを得ない事で、其昂奮には寧ろ同情してやるべきものがある。我輩は斯く大臣の言動の不穩當を咎めないと同時に、厚額なる利害關係者の如何にも破廉恥極まれる舉動は、鼓を鳴らして之を責めなければならぬと思ふ。殊に議員の中にあつて、此評を甘受しなければならぬ輩のあると云ふものあるを聞くは甚だ残念な事である。

四

論じて茲に至つて少く根本問題に立ち入ると、戒告處分なるものは抑も末である。我邦に於て國民生活に最も關係の深い米の價の決定に就ては、現在の米穀取引所は寧ろ無益なる存在物である事は餘り人が云はぬ。取引所存在の理由を主張する論者は曰ふ、取引所は價格調節の機關、需要供給調節の機關であると。然し明治以來の歴史に徴して取引所なるものが、果して十分に其機能を盡くして居るかといふに、我輩は斷じて否と答へなければならぬを悲しむ。取引

所の存在は國家社會に害こそあれ毫も有用な點を持つて居らぬ。唯だ徒らに射倖投機の心を養ふより外に何もない。現在取引所の謳歌論者は全廢などは夢にも考へ及ぶまいが、我輩は此れは一の重要な問題とす可きものと思つて居る。若し全廢しないで其存在を認めるにしても、恰も公娼を認めると同じやうな意味に於てのみ認む可きである。即ち必然の惡としてのみ看違さるべきものである。米穀取引所投機者流は之を目するに遊廓の娼家の主人を待つが如くすべきで、即ち社會の表面に跋扈するを許さず、謹慎して社會の片隅に蟄居せしめなければいけない。然るに我邦では彼等醜類が大手を振つて白日大道を闊歩して居る。最も營業の自由を重んずる英國でさへ、取引所仲買がお客を勧誘する廣告を新聞紙上に、人目に立つやうに掲載する事を許さない。之れを禁ずる事は恰も遊廓の廣告を禁ずると同様である。然るに我邦では彼等は莫大な紙面を塞いで客引の廣告をなし、新聞紙も恬然として之れを甘受して居る。之れ全く營業の自由を穿き違へたものである。我邦に數年滯在して是等の問題をかかり研究した元帝國大學教授のヴェーレンツヒは、日本の米價の亂高下の原因の重なる一つは米穀取引所にある、現在の狀態を改めない以上は、米價の亂高下は到底免かれないと唱へた、殊に我邦を去る時に方つて詳密に研究した結果を我々同學の前に披瀝して歸つた。外國人でさへ斯く感ずる。況んや我々日本人は少からず之に注意しなければならぬと思ふ。我輩は豫てより少くとも現在の形に於ける米穀取引所存在の理由に就て、多大の疑惑を抱いて居るものである。殊に

近來米價の非常なる騰貴に就いては、取引所が重大なる原因の一つである事を、何うしても否定する事は出来ない。然れば豈に獨り伊勢の何某を戒告するに止まらんや。農商務大臣は更に徹底的に日本全國の米穀投機者流に對して、法律の許す範圍内に於て、根本的に制限を強迫を加ふべきであると思ふ。而して彼等が營業の自由の侵害とか民權蹂躪とか憲法違反とか人聞きの良い事を云つても斷乎として之に耳を借さずして、農商務當局の所信を一貫すべきである。我輩は之を切望して已まないものである。英佛米諸國に於ける大規模の食料調節などの事を考へたならば、我日本の爲してゐることは實に手緩い事を感じる。前に我輩が云つた如く、實行しても尙ほ遠く及ばない。然るに一商人に對する戒告について愚論が跋扈する爲めに、當局者に聊か遲疑逡巡の色があるとしたならば、實に残念千萬の事と云はねばならない。政府反對だからとて、此問題にまで反對するのは謂れない事で、我々は當局者の誰たるを問はず、奸商取締の急要を主張し、當局者をして其の手を緩めしめてはならぬと確信するものである。

|| 大正七年三月『中央公論』掲載 ||

附録四 極窮權の實行

何事か平常に異つた事件が起ると、直ぐ當局者を非難すると云ふのが當今の流行である。殊に政黨者流は奇貨措く可として政府攻撃の材料とする。乍併米價問題に就ては今日まで政友

會も憲政會も何の積極的意見を公けにして居らず、否却つて財産權の神聖だの營業の自由だのと云つて奸商共の喜びさうな事を言つて居たものが多い。之に比すれば拙劣は拙劣でも、農商務大臣が一生懸命に各種の施設をして居た事は、少くとも其誠意は買つてやらねばならぬ。然るに今となつて自分達の過去の態度はサラリと忘れたかの如く、米價調節の急要だの政府を鞭撻するのだと云つて居るのは、局外者たる我々から見れば片腹痛コロか兩腹共痛くなる位の馬鹿らしきである。是れ今日の政黨なるものは、何れも資本黨・富豪黨・財權黨たる真相を自ら暴露しつゝあるものである。政黨間にも具眼の士は元よりあつて、個人としては卓れた意見を抱いて居るやうであるが、黨議とかに束縛せられて不徹底千萬な事を言つて居る。學者らしい人も居るが、其米價調節論は何れも曖昧模糊たるものである。之に比ぶれば御粗末乍ら仲小路氏は兎に角一定の信念(迷信も大分混つて居るが)を持って、之を元として着々色々な事をやつて居た。然るにも拘らず米價は益々奔騰遂に頃日の騷擾を惹起した。元より當局者としては責任を免れぬ譯ではあるが、此度の騷擾に就て最も公平に考ふれば『だから言はな、事ではない』と云ひ得る權利を持つて居るものは、日本に於て仲小路氏儘かに其一人たりと言はねばならぬ。反之仲小路氏の施設を頭ごなしに難じて居た政黨者流は、坊主にでもなつて謝罪す可きである。殊に自己選舉區の地盤擁護の爲めに米屋町連の手先となつて妄動した某々市選出代議士共は、今や戦々競々として自家安全を案じつゝあるものと思ふ。思へば笑止千萬な話である。

此度の騷擾は必竟するに、極窮權(ライイト・オブ・エキストリーム・ニード) Right of extreme need の實行に外ならぬのである。政治家共が政權の爭奪を以て政治の一切萬事なりとして、有頂天になつて居るのみで、政治とは必竟民の生存を保障し安全にするを第一とすることを、全然忘却したに對する人民自衛權の發現と目す可きものである。舊幕時代にも屢々あつた、歐洲にも此先例はイクラもある。必竟人民は大抵な惡政治には我慢もし辛抱もするが、其が國民生存權の尊重を餘りに閉却するときは、極窮權の實行てふ變態を取つて現はれて來るのである。官僚政治の民本主義のと空なる文字を列べて政治の能事としつゝある間に、我國民の生存は極端に脅かされた。而して最も多く苦痛を感じるものは、河上博士の所謂貧乏線の近所に彷徨して居る人々である。其が米價の奔騰の爲めに極窮點(ポイント・オブ・エキストリーム・ニード)に押し落された。此處まで落れば窮て而して通ずで、今迄は金持様は金持様、自分等貧民は貧民で其々別天地に住つてでも居るやうな扱を受けても、大して不平を鳴らさず其が當然な事の如くに考へて居た連中も到底堪まらなくなつて、生存權の主張者となつて現はれるが、其の主張は尋常一様では駄目であるから、ソコデーの變態たる極窮權の實行を以て先づ着手するので、コレハ殆んど一の自然法則の働きの云つても言ひ位當り前の事である。

自然法則の當り前を以つて起つて來るとは、人爲を以て無暗に鎮壓す可きではない、暴民鎮壓の最有力機關たる巡查其者も、一私人として極窮權の要求を深く胸中に藏して居る。此を驅

つて抜刀までさせて、彼を撃退せしめるのは不得止事とは云ひ乍ら、人生の大皮肉事と云はねばならぬ。故に世論の政府非難に我輩は與する事は出來ぬ。治安維持の爲め捨て置けない以上は仕方がないが、問題は極窮權を認めるか否かにある。財産權を以て生存權よりも重しとする英米流の法律觀、政治觀に盲従するか、其れとも我邦は我邦で財産權尊重一點張りならず、國民生活の安全保障を政治の第一義とするか々大問題であつて、今の政治屋連は政府を非難する資格は寸毫も之を有して居らぬのである。當局の態度は今後の處置に見て批評す可きである。乍併批評の權利は政黨者流には斷じて存しない。

|| 大正七年八月十四日稿九月『中央公論』掲載 ||

附録五 國民生活に觸れざる政變は無意味

一 物價調節は不可能

今日の經濟生活は値の生活である、値の生活と云ふことは賣買があつて始めて生ずるのであつて、總ての商品は値で取引せられて居る。物が生産されるされないは第二の問題で、良い品物でも値の廉いことがあり、悪い品物でも値のたかいたことがある。幾ら良い品物が出來ても、値が

低ければ、其れは經濟上の失敗で、悪い品物でも値が高ければ、經濟上の成功である。即ち今日の經濟生活は値の生活で、値の高い低いによつて成功と失敗とが分れるのである。一切は生じたる錢の高で決せられるのである。又直接には値に關係せず交換せられずとも、これを總て金の値で計る處に今日の經濟生活の特色がある。これを學問上貨幣經濟と呼ぶのであつて、又價格經濟と呼んでも宜い、この價格經濟が根本をなして居るのに、物價の調節などと云ふことは事實不可能である。需要が何れ位であるかと云ふことが明かに分るならば、調節も可能であらうが、それが分らなくては調節の仕様はない。労働者が自分の受ける賃銀の不足を主張するに對し、資本家はそれを肯んじないと云ふが如きも、こゝに胚胎するのであつて、人間の一日の労働は幾らの値があるか、夫れが的確に計算し得るものならば、資本家と労働者との間に賃銀問題で紛争の起る筈はない。分らぬから問題が生ずるのである。今日の物價問題もそれで、分つてゐるものならば調節し得るのであるが、分らぬものを調節しやうとするから事實に於て出来ない相談である。

二 馬鹿と馬鹿との喧嘩

たゞ一つ茲に調節の道がある、それは穀類收用令によつて公定價格を定める方法である。併しこれとても政府專賣でない限り、その公定價格が實際に行はれるものとは限らぬ。收用令

は東京及び大阪を標準として卸賣値段を定めたのであつて、それ以外の土地の相場は異つて居る、又品質に依つて値段に差を生じて来る。加之他に運ぶには運賃を要し、仲買人から消費者の手に入るまでには、種々の手数料や口錢が掛るのである。それ故に一定價格を保つことは困難である。鹽や煙草のやうに政府の專賣にするか、又は政府が特權を與へた會社なり團體なりがあつて獨占すれば、物價の調節も可能であるが、それにしてもその調節したる物價が果して他の物價と調和が取れて居るか何うかは分らぬ。かう云ふ根本問題になると、到底現在の經濟組織を變更せぬ限りは不可能である。過般東京朝日新聞紙上に於いて、河上肇博士が『米價問題』を論じ、労働を商品として取扱つたのに對し、姉崎正治博士が『河上博士はやはり經濟學者の通説を執つて、労働を『商品』として扱ひ、労働に對する賃銀を單に需要供給の關係のみと見て立論して居られる』と非難した。河上博士は是に答へて「余は労働を『商品』として取扱つた。併し若し其れが悪ければ、其は余が眼前に横はる事實の罪で、其を見たる余の罪ではない」と答へた。此は河上博士の方が正しいので、姉崎博士のは空想に基く愚論である。労働を商品として取扱ふと云たのが今日實際の事實である。商品として値を附けられ居るのであつて、之を人爲に依つて左右せんと欲するならば、今日の經濟組織即ち貨幣經濟の組織を變更せねばならぬ。さうでない限り、標準は分らず調節の方法も無い。然るに米價が騰貴したと云つて大騒ぎをして、政府の調節の方法が悪いかだと云つて政府を攻撃するのは、官僚萬能主義の謬想をサラケ出し

たものである。不可能なる物價調節を可能なものと思つて、ヤキモキするのは愚の骨頂で、可能ないことを可能ると欺かれて、それを政府が仕出かさぬと云つて政府を非難する者も愚である。此頃の物價調節論は謂はゞ馬鹿と馬鹿との喧嘩で、手のつけやうがないのである。如何に有力な農商務大臣であつても、物價調節を仕遂げ得るものではないのである。暴利取締令は米價調節の爲めに必要なのではない、悪黨を征伐する爲めに必要なのである。

三 米騒動の張本人は大隈内閣

一體物價調節が可能なものか、なんぞのやうに云ひ觸らしたのは政府である。されば政府が國民を欺いたのである。國民も又お目出度く出来てゐるので、欺かれたとは知らず、それを眞に受けて物價調節は可能なものだと信じて居るのである。可能ない事を可能なものゝやうに欺かれて居る國民こそ好い面の皮ではないか。こんな馬鹿氣たことを云ひ觸らした張本人は大隈内閣で、當時の無能農商務大臣たりし河野廣中氏が米價が下落し過ぎたと云ふので、その釣上げをすべく調節策を試みた、そして美事に失敗した。これは少數の生産者を相手にしての調節であつたから、それが失敗に歸しても騒動は起らなかつた。併し今度の米價調節はそれと正反對で、騰貴せる米價を引下げんとして失敗したのであるから、多數の需要者は騒ぎ出したのである。而も失敗たることに於ては前者も後者も一である。唯其差違は、前者は少數を相手であつたか

ら騒動を誘起しなかつたが、後者は多數を相手であつたから騒動を惹起したのである。之れを春秋の筆法を以て云へば、此度の米騒動の責任者は大隈侯に在りと云ふ可きである。然るに其の大隈侯の擁立黨たる憲政會が、政府の物價調節の失敗を攻撃するなどとは以ての外で、恥を知らぬにも程がある。而も大隈内閣は地主の利益を擁護する爲めに、安い米價を高くせんとして失敗したので、成功したとて國民の迷惑は變らないが、今の仲小路農相は消費者たる大多數の國民を擁護せんとしたのであるから、其の失敗は不明より來るもので嗤ふべきであるが、其の精神は大いに諒とすべきである。故に大隈内閣の加擔者は今度物價調節の失敗を彼是と非難するの資格は寸毫も有して居らぬ、況んや大隈内閣は其外にも蠶絲救済などと云つて、少數の絲屋の利益を擁護する爲めに、國庫の金を濫費した、今の政府も米價調節で一千萬圓の金を損した、損は同じ損であるが、其の精神、目的は大いに異なり、前者は極めて少數者の爲めにし、後者は國民全體の爲めにしたのであるから大いに恕してやるべき點がある。

四 米價よりも暴騰せる物あり

抑々米價が高いと云ふが、然らば物價指數總平均に對して米價は何れ位に在るか、今試みに日本銀行の調査を見るに左の如し。

(明治三十三年十月の物價を基數一〇〇とす)

月次	物價指數總平均	米價指數	總平均に對し米價
大正七年一月	一六九・二五	二〇二	(十) 三二・七五
二月	一六七・二一	二二二	(十) 四四・七九
三月	一六八・〇〇	二二六	(十) 五八・〇〇
四月	一七三・八七	二三二	(十) 五八・一三
五月	一八三・三七	二三三	(十) 四九・六三
六月	二四九・五〇	二四一	(十) 八・五〇
七月	二五六・二七	二五八	(十) 一・七三
八月	二七二・〇四	三二九	(十) 五六・九六

右の如く、六月に於ては米價の方が總平均より低く、七月に入つては一般物價總平均指數と米價指數との間には僅かに一・七三の差違があつたのに過ぎない、それが八月になつて非常に騰貴を示したのである。乍去米價の高くなつた八月には、米よりもずつと高い物がある、即ち洋鐵五六〇、洋紙五一二、綿絲四二一、大麥四一〇、裸麥三九〇、藍四五六、洋釘三八五、硝子板三八六、石炭三八六等である。以上の通り米よりも遙かに騰貴したものが随分夥しくある、米價のみが騰貴したのでないことは明瞭である。殊に前記の洋鐵洋紙の如きは米と比較にもならぬ位の騰貴を示して居る(暴利取締は洋紙に就て必ず必要と思ふ)。現在の物價を歐洲戰爭勃發當時の大正三年

八月に比べて見ると、總平均に於て十一割三分の騰貴で、物價の總てが騰つたので米のみではない。尤も米は米食國民たる我々には最も重要な食糧品であるから、其の價の騰貴は最も痛切に苦痛を與へる、それが爲めに他の物價騰貴には愚痴を溢しながらも我慢しても、米價の昂騰には我慢が出来ないで騒ぎ出したので、これは無理もないことである。

斯くの如く、米價々と云つて騒ぐが、米價のみが騰貴したのではないので、總ての物價が昂騰して居るのである。然るに此の際米價のみを調節せんとするのは何の事か、無意味な遣り方である。元來からして物價調節は不可能である。又假りにそれが可能としても、米價のみを調節することは不可能である。萬が一にも米價の調節が出来たとしても、米の賣手のみを損をかけること云ふやうな無理が生ずる。米の生産者や米商のみを不當に抑へ付けるのは同じく曲事である。

五 米價のみを調節するは何事ぞ

物價の騰貴と云ふことは、反面から見れば貨幣の價値が下落したと云ふことである。日本銀行の調査は完全なるものとは云はれないが、今日はこれ以上の調査はない、そこで先づこれに依つて見るに、現在を大正三年八月に比較するに、貨幣の値が五割弱下落して居る、即ち一圓の金が四十錢に下落して居るのである。かくの如く貨幣の値が下落して居るにも拘らず、他の物價を

等閑に附して米價のみを調節せんとするは失當である。横井時敬博士の様に米價は高く無いと云ふ論者もある、之は地主百姓の立場を代表しての言で、悉くは感服は出来ないが、憶かに一面の眞理がある、尤も八月の米價は餘りに高過ぎて居るから、七月迄は謬りはないが、八月の米價に對しては博士の言は誤謬である。併し夫にしても洋鐵洋紙藍等は前述の如く米價よりも遙かに高いのである。大麥の如きも米が三二九なるに對して四四二を示し、米よりも數等高い、又小麥の如きも現に三一八に騰貴して居る。殊に我々日本の日常生活の必需品たる味噌の如きは、五七一に騰つてゐる、然るに其の原料たる大豆は二三〇に過ぎぬ、原料たる大豆と其の製品たる味噌との指數の間に、斯様な隔りがあると云ふには、其間何等かの特殊な理由の存在して居ることを推察するを得るのである。然るに此不可解の大暴騰を來せる味噌を黙つて食べて居る。これ等の現象を見ないで、たゞ米價々々と云ふ、これは米食國民としては無理のない話であるが、政治家や識者が此の點に注意せざるは迂遠千萬である。

一體、農商務大臣が物價を調節するの責任ありと云ふ條文が憲法にあるか、規定もなく又實際に出来ない仕事を、御苦勞千萬にも遣らねばならぬ義務は無い。

六 國民を乞食扱にしたる廉賣

暴利取締令は物價調節には効果はない、たゞ道徳的見地からは是認す可きである、此事は前段に於て述べて置いた。世間には暴利取締令に對して財産權の侵害だとか、營業權の妨害だとか、舊式な自由論で政府を攻撃する者もあるがそれは間違つて居る。さう云ふ連中は今度の騒動に對して顔色がない譯である。選挙區の關係上、自己の地盤擁護の爲めに、米屋町の手先となつて妄動した某々代議士の如きは、坊主にでもなつて謝罪するのが當然である。要するに非難する者も非難せらるゝ者も標的を外れてやつて居るので、全く滑稽である。それでも大騒ぎをするのも可いとしても、喉元過ぐれば熱さを忘るで、ワツと騒いで後はケロリとして居る。外米管理などもそれで、一時は騒いだが、これも三日坊主に終つてしまつた。況して米の廉賣など云ふことは、恰で國民を乞食扱ひにした者で、米廉賣所は乞食募集の張り札を到る處に出したよりなものである。困るなら稼いで食へと教へるのが當然である。稼ぐことを奨励しないで、乞食根性を培養せしめて居る。これこそ國民道徳上の大問題ではないか。困るなら救つてやらう杯と出るのは、國民を侮辱した仕打である、自主的精神のない國民が、益々自主的精神を喪つて了ふ。それも徹底的に遣るなら可いが、直きに廢めて三日坊主をキメ込んで居る。其の後、米價の公定價格を發表したので、少しは低落したが大したことはない、殊に甚だしいのは副食物なしに飯を食へとか、豆や豆腐粕などを食へとかと唱へて、唯さへ營養不良の日本國民をして、其の能力を殺がんとする論者もある。今日の經濟生活の因つて樹つ所を知らぬ連中や、甚だしきは何も譯の解つて居ない女までが飛び出して、ヤレ無茶デーであるとか、おむすびデーであるとか云

つて騒ぐ、恰で百鬼夜行の世の中である。この百鬼夜行の世の中を生み出したのは、詰り貨幣価値の下落が根本原因である。此の原因を他に於て、物價調節と云ふ不可能なことを可能ならしめんとして居る。全く愚の至りである。

七 貨幣調節を斷行し得ざる限り政變は無意味

物價調節は不可能であるが、貨幣の調節は政府の力で可能なのである。然るに政府は可能る貨幣調節をしないで、可能な物價調節に力を入れた、是は正に冠履轉倒と云はねばならぬ。昔希臘の暴君が、寢床を造つて、それに臣下の者共を横臥せしめた、寢床の大きさは一定して居るが、人間の身長は一定して居ない、そこで脚のはみ出したのがあつた、暴君は其のはみ出した脚を切斷して、脚の調節をやつた、寢床を調節すべきを脚の調節をしたのであるから、これは冠履轉倒である。今日の物價調節は恰もこれである。脚たるべき物價を調節して、寢床たるべき貨幣を調節しないのである。所が此の貨幣調節の権限は大藏大臣に在る、然るに勝田藏相は小冊子まで配布して貨幣調節をやらぬ理由を辯明し、貨幣の膨脹は物價騰貴の最大原因に非ずと云つて居る。仲小路農相一人がヤキモキして的外れた物價調節をやつたのだから助からない。憲政會では近來、若槻、濱口などと云ふ人々が、漸く貨幣收縮の必要なることを口にするやうになつた。併し此の憲政會が政權を握つたとしても、果して貨幣の調節を斷行し得るであらうか、これ

は大疑問である。政權を握つて居ない時には随分伶俐な理窟も吐くが、さて政權を握つたとしたら、其の言葉を裏切るのが常である、それに元來憲政會は商工黨、資本黨、財閥黨である、これが何うして貨幣の收縮を實行し得るものか。政友會には高橋是清と云ふ有名な通貨膨脹論者があつて、蠶の生へた舊い經濟説を臆面もなく吐いて、貨幣數量説はモウ學界では認められて居ない、杯と云つて居る。彼は亞米利加の新聞さへも讀んで居ないものと見える。現に亞米利加合衆國政府の如きは、貨幣數量説の權威たるフイツシアを顧問にして、専ら此の方面の調節を計らんとして居るではないか。我輩必ずしもフ氏の説に悉く服するものではないが、高橋氏の如きは何んにも知らないで、五六十年来の昔の事を新らしい説などのやうに言つて居るのである。生兵法は大怪我の原因と云ふ諺に當て嵌るもので、惣い古臭い經濟學を少し許り囁つ居るものだから、飛んだ錯誤を仕出かすのである、高橋氏の財政論が勢力を有する政友會が内閣を組織すれば、連も通貨の收縮を實行することは覺束ない。恐らく今日の所では、何の政黨政派が内閣を組織しても、通貨調節をするの勇氣はあるまい。従つて政變は無意味である、少くとも國民の經濟生活の上から見て、政變は無意味である（米騒ぎに關連して寺内内閣のやつたことは言語道斷、此點から一日も早く引込む可きは勿論であるが）。

八 財産階級を怖がる歴代の内閣

然らば政府は何故通貨の収縮をしないのであるか。これは財産の巨頭連の反對に違ふからである。政府としては國民の米騒動も怖い、それにも増して財界の巨頭連の反對に違ふのは怖いのである。彼等の反對に違つては、政府は存立しない、故にこれを斷行するの勇氣はない。されば今までの政府は財産階級に對して不當な自由を認め其の跋扈を許して、少しでも財産階級の利益を妨ぐることを恐れて居た。此の點から見ると、寺内政府が不徹底ながらも、又方法を謬りながらも、兎に角稍々財産階級の跋扈を抑へんとするの社會政策的施設を執り來つたのは、大に認めてやるべきである、併しこれも要するに不徹底なものである。徹底して通貨の調節を計るの勇氣はなかつたのである。だから悉く失敗に終つたのである。

九 政府の遣り方は兩頭の蛇

全體、通貨の膨脹は買占め賣惜み等の忌むべき事に資金を供給し、それを獎勵するのと異らぬ。如何に暴利取締令を實施しても、如何に戒告を發しても、人間は利のある所に就くもので、利ありと見れば、暴利取締令も戒告も惧れない。故に根本的にそれが不可能ならしむべき方を旋らさねばならぬ、即ち禍根を絶つ必要がある。それは通貨収縮である。買占めなどと云ふことは、通貨膨脹の爲に生ずるのである、それは通貨がダブつて居るので銀行はドシ／＼低利で貸出をする、借る方は低利で資金を得られるからドシ／＼借りる、これが買占を煽つて居るの

である。大藏省では買占め煽動政策を取り、農商務省では買占めを妨遏せんとする、全く矛盾ではないか、これでは兩頭の蛇である。通貨を収縮すれば金利が高くなる、金利が高くなれば、借手は躊躇して少くなる、さうなれば買占めも幾分か減ず可きである。

政府の遣り口が全く兩頭の蛇で、統一して居ないのは總理大臣が無能であるからである、仲小路農相などは通貨収縮をせねばならぬと氣が着いて居たのかも知れないが、勝田藏相は氣が着いて居るのかどうか。或は氣が付いて居るのかも知れぬが、金權財權者流が怖さにそれを斷行し得なかつたのかも知れぬ。要するに仲小路農相は米價問題に就ての責任者ではない、多數國民の爲めと思つて不可能の事を遣つて失敗したのは笑ふべきであるが、其の精神は買つてやる可きである、當の責任者は勝田藏相である。

十 在外正貨は幽靈正貨準備なり

扱て然らば何故通貨が膨脹したか、而して又通貨と物貨との關係は何うか。勝田藏相は物貨の昂騰は通貨の膨脹が大原因をなして居るのではない、主として供給の不足と運輸關係の不圓滑とに基くと云つて居る。これは個々の物に就いて見れば眞理となる點もあるが、全體から判斷すれば誤謬である。物價指數は貨幣の購買力を示して居る。兌換券の増發と物價の騰貴とは何れが先で何れが後であるかと云へば、増發が先で騰貴が後である、此の二つは原因結果の關

係に立つて居る。

歐洲戰爭勃發當時の兌換券發行高は三億三千萬圓であつたのが、最近では七億七八千萬圓に膨脹し、二倍以上に達して居る。即ち兌換券の膨脹は貨幣の購買力を半減したのである。而して之が膨脹の原因を見るに、一は在內正貨の激増であり、他の一は激増せる在外正貨の引當に據る兌換券の發行である。元來から云へば、正貨準備は在內正貨に限るべきもので、在外正貨を正貨準備とするは變體である、況して大戰の今日之れを内地に取寄せる事が絶対に不可能なる在外正貨を、正貨準備に引當つるが如きは、恰も幽霊を生きた人間として取扱つて居るやうなものである。而して此正貨準備として在外正貨を是認することに依つて、二億圓内外の兌換券が發行されて居る。此二億圓内外の兌換券は手品である。何となれば、現時の兌換券發行制度によれば、在內正貨を以てする正貨準備によつて發行出来る兌換券と、一億二千萬圓を限度とする保證準備によつて發行し得る兌換券の額以外に制限外發行を認め、之れに對しては六分の發行税を課して居る。然るに正貨準備として其の實効なき在外正貨によつて發行せる二億圓内外の兌換券に對しては、六分の發行税を課して居ない。直言すれば、日本銀行は在外正貨と云ふ正體の分らぬものを引當にして約二億圓の兌換券を發行し、其の發行税一千有餘萬圓を脱税して居るのである。而も之れが脱税と云ふ事のみならず、一面に於て不自然に日本銀行の貸出利子を低下せしめ、之れが全金融界に影響して居る。貧乏人には一錢の脱税をしても勘辨せず嚴重

に取締る政府が、日本銀行と云ふ最大資産家の巨額なる脱税的行爲を等閑に附し、之れが爲めに國民に大なる迷惑を懸けて居るのに黙視して居るとは何事であるか。

十一 伸縮發行制度の不備不完全

斯くの如くにして兌換券の大膨脹を來して居るのであるが、此兌換券の膨脹は更に數倍の信用通貨の膨脹を隨伴せしめて居る。近來手形交換高が非常に増加した一事でも、之れを知る事が出来るのである。我輩はこれ等の事を數年前から論じて居たのであるが、今となつてはソレ見た事かと云ふ外は無い。一體在外正貨を正貨準備として是認するの端を開いたのは桂内閣である。たゞ從來の在外正貨は外債募集の結果に因つたものであるが、今日のそれは貿易の關係即ち輸出超過に因るものである。而して之れが平時の場合ならば未だ忍ぶ可しとするも、今日の如き非常の時には其の弊害が著しく目立つのである。且つ又在內正貨が増加したからと云つて、無制限に兌換券を増發することも宜しくない、勿論これは法律の文面には戻つて居ないのであるが、本來我邦の伸縮發行制度は獨逸の模倣で決して完全なものではない、此の事は山崎覺次郎博士が數年前より唱道して居らるゝのである。勿論流通する貨幣の額は何れ位が適當であるかは判然と分らぬのであるから、我邦の制度も平時には左して弊害も目立たないが、今日の如き非常の際には遺憾なく其の缺點を暴露して來るのである。故に或國では最高發行額即ち

マキシマムを定めて居る。我輩は少くとも今日の場合、兌換券發行總額に或る限定を置くのが至當であると考へる。

十二 兌換券膨脹を防止する三作用

平時に在つては、正貨増加の爲め兌換券が膨脹し過ぐるときは、自然に之を防止す可き反對作用が起るのである。其れには三種類ある。

一、退藏用の引出。之れは自家の金庫へ金貨を藏つて置くために、日本銀行へ兌換券を持參して金貨に引替へるのである。

二、工業用の引出。之れは金貨を工業に使用するために鑄潰して了ふのである。

三、外國輸出用の引出。之れは通貨がダブつて居ると海外輸入が増加する、従つて海外の支拂が殖える。されば爲替相場が騰る、之れが限度を超えると反つて正貨を輸送する方が利益である、そこで輸入商は爲替手形を買つて外國へ送る代りに、正貨を日本銀行から引出して送ることになる。

以上の三の作用で兌換券の膨脹して居る時には、自ら之れを縮少するものである。又反對に兌換券が縮少され過ぎて居る時には、自由鑄造制度によつて、金を有つて居る者は之れを金貨に鑄造して貰ふ、之れによつて調節作用をする、又貿易上に於ても兌換券の少ない場合には、前に舉

げた例の反對の作用をして調節をするのである。而して上述の三つの調節作用に就て考ふるに、第一の作用は實際に行はれた例がない、日本銀行は國民から絶對的に信用されて居るし、嵩張つた重量のある金貨よりも、兌換券の方が便利であるから至つて特殊の事情のある場合を除いては引出す者はない、従つて通貨收縮の作用をなさぬ。第二、第三の作用は大藏省令で禁止又は限度を設けられて居る、即ち工業用の爲めに引出して鑄潰することは絶對に禁ぜられ、又外國に正貨を持つて行くには、一人に付き金百圓を限度としてそれ以上を許さぬ。

十三 在外正貨を正貨準備とするを廢せよ

右の如くで正貨を減少するの作用が無くなつてゐるので、従つて兌換券を調節する作用も無くなつて居る、これが爲めに在内在外の兩正貨の在高的範圍内に於て、兌換券は殖え放題である。尤も第二、第三の作用を禁止したのは、現在の我邦の事情上已むを得ぬことで、其の政策を探るところとは之れを非難しないが、乍去これによつて我邦兌換制度本來の特長として認められて居る所の屈伸力が失はれて了つたと云ふことに對しては、大に注意す可きである。況んや前にも云つた如く、兌換券の膨脹は、信用通貨の大膨脹を齎すので、一の兌換券膨脹は五乃至七の信用通貨膨脹と云ふ現象を招くのである。手形交換高、預金高の激増等は之を物語るものである。されば政府は通貨を調節するの政策を執るのが當然である。それには第一に桂内閣時代からやつて

居る所の在外正貨を準備として兌換券を發行する事を全廢し、在外正貨引當の發行を制限外發行のものと認めて六分の税を課すべきである。さうすれば日本銀行の貸出利子が高くならざるを得なくなるから、先づ一般金融界に於ては貸出の作用が制限せられる事となる。かくて正體の分らぬ二億内外の兌換券を引締め、在內正貨に對する分はマキシマムを定むべきである。此所まで遣らないで、農商務大臣一人が標的の外れた物價調節をして、當の大藏大臣は手を拱いて兌換券の殖え放題になつて居た。全く物になつて居ないのである、可能なる貨幣調節の方面に手をつけないで、専ら物の方面にのみ主眼を置いて居た、之れでは成功は覺束ない。去りとて内閣が更迭した所で、恐らく貨幣の方に手を附ける事は出来まい、これをすれば財産階級から手厳しい反抗に遭ふからである。財産階級が怖いやうな政黨や政派では、本當の仕事は可能ない、寺内内閣が他の内閣に變つたとて狐を狸に代へたやうなものである。

要するに貨幣調節と云ふ根本問題を解決せねば、國民の生活は依然として不安定である。根本問題を其の儘に放任して置いて、廉賣とか安價生活とかと云つて、國民を乞食扱にしたり、營養不良無能力無精力にしたりするは、これこそ亡國思想の甚だしきものである。

|| 大正七年九月十三日談話同十月『日本評論』掲載 ||

附録六 原内閣に要望す

原内閣の成立は甚だ歓迎す可き事である。其意味は、二大政黨對立論杯の陳腐な考からではない、又た政黨内閣が理想的政治と思ふからではない。否、政友、憲政兩會とも政權を取つた過去に於て、決して善政を行つたのでないことは國民の熟知する處で、此點に於ては官僚内閣に替ふるに政黨内閣を以てしても替つて替りばへのないことは疑ふ可からざる所である。乍併兎に角衆議院に多數を占めて居る政黨が國政の料理に當る事は憲政の常道であつて、殊に無爵者の原氏が首相となることは、形式の上から丈けでも大進歩で、聽て眞に國民を基礎とする政治の行はる可き端緒が開かれたものとして慶祝せざるを得ぬとである。憲政會の人々と雖も自黨内閣が出来れば結構だが、それも出来ない事が明かであれば、其次ぎには原内閣が善いと考ふるに相違ない。之に對して政府政友同罪論などを唱へて、ケチを附ける者があるのは甚だ怪しからぬ事と思ふ。彼等が多年凡ゆる辛酸を嘗め盡くした揚句、やつと大正七年の今になつて曲りなりのにも衆議院多數黨の内閣を組織する事が出来たのは、日本の憲政史上に一大紀元を劃するものである。それを今更ら舉國一致内閣や人材内閣などと唱へて、漸く成立した政黨内閣にケチを附けたがるのは、甚ださしい根性と云はなければならぬ。原内閣の壽命もどうせ二年か三年のものだらうが、其次ぎには加藤内閣が出来る順序である。若し今日原内閣の出来るのを妨

けて、平田や清浦のやうな官僚内閣でも飛出させたら、次の加藤内閣の出現もそれだけ遅れて来る譯ではないか。

寺内内閣政友會同罪論などは實に愚論である。一體政友會からは黨員として一人も寺内内閣に道入つて居なかつた。唯外から政府を援けただけである。而かも事々物々に援助を與へたものではない。却つて粗末千萬なる新稅案を否決したこと、無用有害なる所謂自主的出兵を拒んだこと、兎に角二つの點に於て政府の失態を匡正して善い方へ指導した。同罪を論ずれば、寧ろ憲政會が其罪を分たなければならぬ筈だ。何となれば、寺内内閣が失敗した物價調節なるものは、其源を大隈内閣に發したものである。時の農相河野廣中氏が米價調節、蠶絲救済を企て、抑も政府の力を以て物價を調節し得可しといふ一大惡政を始めたのは大隈内閣の當時である、即ち節を作つたのは大隈内閣である。故に若し物價調節の失敗米騒動の罪を糺して、其責任の爲に寺内内閣が倒れたとするなら、政友會が政府と罪を分つ可き度合よりも憲政會の方が遙かに多い。而も寺内内閣の米價調節の失敗は善意の失敗である。國民生活の困難を軽減せんと主義から起つたもので、其方法こそ拙劣を極めたものであつたが、其趣意は賞讃に値する。殊に何人も嘗て手を附けなかつた暴利取締を斷行した事は一大英斷と云はねばならぬ。然るに同じく物價調節でも、大隈内閣のは國民の一部分たる地主と米の生産者の利益の爲めに、國民全體の食料品を高くしやうとしたので、其の實行法の拙なるを責むると同時に、其精神をも

非難しなければならぬ。如斯調節は成功しても排斥しなければならぬ。況んや失敗に終つたに於ておや。否、根本的の非難は、抑も一國政府の力を以て物價を左右しようとし、又左右出来るものと思はせたのは、是れこそ官僚萬能政府萬能主義で、憲政會領袖連が年來主張せる民權の自由とは正反對の思想である。而かも民權の大本山と稱する大隈侯の内閣にして、斯く國民の生活を犠牲とし、經濟界の大魔法を全然蹂躪した政策を取つたのは、大浦事件よりも更らに其罪が大である。我輩は此時それまで常に尊崇して居た大隈侯にすつかり愛相を盡かして終つて、斷じて二度と再び候に日本の國政は託すべからずといふ確信を得た。憲政會は無論同罪である。就中蠶絲救済に至つては、極めて少數の蠶絲製産者及び生絲商人の爲めに莫大の國資を消費して顧みなかつたのは、斷じて許すべからざる曲事で、況んや總選舉間際に行はれた不都合をや。之に對して政友會には、輸入米の關稅撤廢に反對した罪惡がある。又た工場法の施行に反對したと云ふ大失態がある。聞く所によれば、近く大正七年八月に於て滿期となつた工場法第三條の除外例を、更に延長しようといふ議が營業者から政友會へ提出された。斯の如き誘惑が來たのも、平素資本家の利益を圖るに汲々たる所があるから彼等に附込まれたのである。幸に寺内内閣の農商務省が斷乎として之に反對したので、可憐なる工女が十四時間働かされるのを免かれたのは誠に結構である。二度と再び斯る愚案は顔を出して貰ひたくないものである。原内閣が出来るとして、其内閣の最大缺點は之れである。尤も之れは獨り政友會内閣ばかりの缺

點ではない。恐らく憲政會内閣が出来ても此缺點は共通であらう。即ち今日の政黨は常に自黨の利益に専らで國民の生活の安定向上を圖るよりも、寧ろ富豪、財權者、實業家に結ぶものである。故に政黨内閣が出来たのは喜ぶべきも、それによつて遽かに日本の政治が改善され得べしとは思はれない。官僚内閣と毫しも變らないかも知れない、否、或はそれよりも悪いかも知れない。殊に政友會は鐵道敷設とか港灣の修築などいふ利權問題を利用した歴史があるから、愈々自黨内閣を組織した時、此點は大に懸念に堪えないことである。

然しながら此等は過去の罪惡で、今更ら咎め立てても仕方が無い。將來の希望として、原内閣は全然過去の態度を改め、政黨本位、資本本位でなく國民本位でやつて貰ひたい。無論政黨内閣が出来ても、今日のやうな有様では大して善くはあるまいと思ふが、然し幾分でも善くならうと心懸けて努力して呉れなければ困る。

二

借て我輩が原内閣に對して希望する所は、差向き對内對外の二大事項である。對内問題とは、物價騰貴より来る國民生活の不安である、對外問題とは、近く来る可き(吾輩は爾か思ふ)講和問題である。物價騰貴の最大原因を兌換券の過増に在りと信ずる我々は、高橋是清氏の蔵相たることに極力反對せねばならぬ。高橋氏は個人としてはエライかも知れないが、其思想たる今日

の場合に大臣と成るには全く不適任である、何となれば、彼は有名なる通貨膨脹萬能論者である。氏は常に揚言して通貨がいくら膨脹しても、物價を高めるものではないと云ふ微の結晶したやうな古い此經濟論を得意になつて振廻すのである。「生兵法は大傷の基」で、生じつか經濟論杯を知つて居なかつたら、こんな愚論を吐かなかつたであらう。昔漂泊時代に僅に學び得た經濟論が、出世した今日の氏に累ひして居るのだ。容易に説を變へる事は出来まい。假に大臣になつて初は輿論の勢に怖れ通貨膨脹論を口にすることは無いとしても、氏位の年齢となれば肚の中から改める事は出来まい。不相替膨脹一點張の財政政策を取ることであらう、之れは實に迷惑千萬な事である。

物價騰貴の最大原因が通貨膨脹に在る事は、別に論じて置いたから、茲にはそれを繰返さないが、原内閣の第一の仕事は物價騰貴から起る國民生活の不安を取除く事にあると確信する。それをしなれば原内閣の壽命は無い。折角成立した政黨内閣の健全なる發展を熱望する一人として、我輩は物價騰貴の根本原因を取去る事に銳意努力する事を切望する。之れが何よりも今日の急務である。それが出来れば獨り原内閣が民心を得るのみならず、又日本に於ける政黨内閣の前途大に祝福すべきである。無爵の人原氏が總理大臣になり、又藩閥以外の出身者たる原氏が内閣を作る事は、國民生活に密接な關係のある人が政權を取つた意味に於て、我々は歓迎するのである。其人が國民の眼前に横はる大困難を取去る事が出来なければ、其内閣の存在は

全く無意義である。官僚内閣でさへも仲小路氏の如きは精神だけは國民生活の不安を憂へて百方苦心した。政黨内閣にして若し之れに劣るやうなら、全然其存在の意義は無い。若し高橋氏のやうな人が財政の局に當つたら、國民の生活はいよ／＼不安を來たすであらう。國民の不幸之より大なるはない。斯くてはやがて原内閣を呪ふ聲が起り、延いて又日本に於ける政黨内閣の前途に一大蹉跌を生ずるものと確信する。

元來通貨膨脹を防止するのは決して困難ではない。之を行ふには唯確信と勇氣と誠意とがありさへすれば、他に何等の技をも要しないのである。此點から云へば、精しくは知らないが山本達雄氏の方が良い。山本氏は武富氏と共に在外正貨の真相を幾分か國民に知らせるやうにした人である。今日の様に我等が稍々詳しく在外正貨の状況を知る事が出来ることになつたは氏の御蔭である。從來の官僚は悉く手品を使つて秘密にし、全く國民に在外正貨の額を知らさなかつたが、少しく知らせるやうにしたのは、慥か憲政會の武富時敏氏であつた。此の武富氏の英斷は世間の人々が餘り云はないが、我々から見るとなか／＼進歩的な處置であると賞讃するに憚らない。山本氏は之より更に一層詳細に在外正貨の額と政府及び日銀所有の正貨の額とを分別して國民に知らせる様にしたかと思ふ。尤も同氏が在外正貨を以て正貨準備に充つる事を全廢するか、若くはそれに制限を置かなかつたのは残念である。然し兎も角も山本氏の處置は官僚内閣時代より勝つて居る。山本氏が誠意を以て研究したら、在外正貨を兌換券の準

備に充つるを全廢せる英斷に出でるかも知れない。少くとも愚論謬説を以て頭を滿たさず、虚心坦懷輿論の指示する所に聞く事が出来るかと思ふ。兎に角誰が蔵相になつても世間の輿論に聞き自分も十分研究し、大藏省も十分調査して、今日の禍根が在外正貨の準備にある事に氣が着き、之を全廢するやうにして貰ふことを切望せざるを得ぬ。先入の偏見に囚はれた人や、銀行業者とか、實業家とか、資本家の權勢に頭の上がらぬ人々は斷じて御免を蒙りたい。

次には農商務大臣に其人を得なければならぬ。仲小路氏の熱心は嘉す可きも、其方法は如何にも拙劣を極めた。農商務省の屬僚中には俊秀の士も居ることと思ふが、それを統轄する大臣に其人を得なければ駄目である。原内閣の農商務大臣は仲小路氏の精神は受け繼いで貰ひたいが、同氏の施設を其儘踏襲して居ては困る。それでは到底物價騰貴を緩和することは出来ない。殊に國民經濟調査會へ置土産として提出した米價調節の方策——外米の專賣、内地米の最低最高價格の公定、即ち米價公定の最低價格以下に下落すれば政府が買入れ、最高價格より以上に騰貴すれば政府が賣出すといふ如き案は非常な愚案である。置土産も物によりけりで、斯の如き愚案は置いて行かれて迷惑する。仲小路氏の熱心には敬服を惜しまぬ我輩も、いよ／＼出でていよ／＼拙なる其方法には呆れ返らざるを得ない。英吉利穀物政策史の一端でも知つて居る人ならば、此方策を愚案と云ふに相違ない。斯の如き案は英吉利を初め歐洲大陸でも屢々試みられた案で、新案でも何でもない。而かも成績如何と云ふに一つも成功したものはない。

それを疑ふ者はどんな簡單なるものでもよい、英國の穀物政策を書いた書物を見れば直ぐ合點が行く。エリザベス以來十九世紀の初めに至るまで英吉利はそれを担ね繰り返して居た。斯の如き徴の生えた案を置土産に再び擔ぎ出して來て、國民經濟調査會に提出したのは愚の骨頂である。若し調査會に若干にても見識のある人が居るならば、此くの如き愚案は即日政府へ衝き戻すであらう。恐らく農商務省では英獨の戦時の食料品管理策を穿き違へたものであらう。英獨を初め他の交戦國は互に戦時非常の場合だから、管理を行つて物資の調節をするので、我邦現在の如き物價騰貴に對して行ふものとは性質が違ふ。亞米利加がフーヴァーを擧げて食物管理をやつたり、獨逸が穀物官營法をやつたりするのを日本が直ちに眞似しようとするのは、如何に自主獨創の思想が無い日本と雖も餘りに甚だしい。

原内閣の農商務大臣は先づ仲小路氏の愚案を一掃して、所謂白紙主義でやらなければならぬ。仲小路氏の精神は學ぶ可きだが、彼の實行した施設は高閣に束ねなければならぬ、さうして改めて國民の輿論に聞き、又専門家の研究にも依頼し、新規に案を立てなければならぬ。米價だけ調節すれば他の一般物價は自ら調節されるといふ様な根本誤謬を一擲しなければならぬ。否政府が政府の權力を以て經濟生活の基點たる物價其物を左右し得るとか、又は左右すべきものとかいふ考を一掃して仕舞はねばならぬ。政府が物價に干渉するは特定の利益特別の理由のある場合に限るのであつて、其の場合には收用令も公定價格も官營管理もよからうが、今日の場合

にそれを要求してゐるのではない、今日の場合には一般の物價騰貴を防いで貰ひたいのである。物價其物の調節は政府が物價に干渉したからとて出來ぬ、勿論干渉して調節の出來る場合はある。其場合は個々の物について政府が干渉するのは可いが、然しそれは除外的施設であつて原則的施設であつては困る。それが原則的施設になると經濟組織を根本的に破壊して終ふ。他日はいざ知らず今日は直ちに決すべきではない。況んや狭き官省の間に踳躄せる俗吏の机上の考案を實行せられては堪つた物ではない。官僚政治の最も悪い缺點を暴露したものである。政府が爲すべき今日の急務は物價調節でなくして通貨調節である。通貨調節は政府の當然爲すべきことであつて、又政府が一日も怠つてならぬ義務である。何故なれば、通貨は國家の有する造幣大權、鑄造特權の二獨占權當然の結果である。何を貨幣とするかを定めること、其の定めた貨幣を製造發行する權限は全然政府にある。故に之を調節するは政府でなくてはならぬ。政府は國民生活の必要に適應して按排せねばならぬ。即ち通貨を調節する義務を有つて居る。然るに寺内内閣は此く當然爲すべき事は少しもやらず、全く通貨の殖えるに任せて殖え放題に殖やし、却て反對に逆も出來ない、又當然爲すべき事でない方面にヤキモキしてゐた。物價は政府がどうする事も出來ない者である。日本國中に何千萬石の米を生産さすかといふ事を國家で定める事は出來ない。又何千萬石の米を消費さすかを定める事も出來ない。其需要供給の關係をどうする事も出來ないのに、結果たる物價をどうかしやうとするのは無法である。今日

の經濟生活も分配も消費も皆國民の自由活動に託するを原則とする、無論其處には弊害はある、弊害は國家が矯正せねばならぬが、弊害の爲めに其原則を打壞するのは、今日の社會組織を破壊するもので、社會主義の要求する所である。其の要求を容るゝならよいが、さうでない以上は、生産、分配、消費も之を指導する事は出来ない。何人も之を指導する者が無いから自由競争で自ら定まる。それが物價となつて表はれるのである。それを左右するには其本源を捉まへなければならぬ。例を挙げれば米である。土地を國有にして農業を官營事業として終へば、其生産は政府が勝手に定める事が出来る。それでも年の豊凶によつて豫期の成績を挙げられないが大體の統一が出来て、米の一石を三十圓なり二十八圓なりに定めることは出来る。恰も鹽の專賣、鹽草の專賣と同様である。或は土地を國有にしないまでも、農産物は凡て其の生産者が政府に賣渡さなければならぬとする事、獨逸の今日の如くにすれば、それは米價の調節は出来る。世に所謂米穀官營論なるものは之れであらうが、日本では實際其處までは行つて居ないから、物價の調節は畢竟出来ない相談である。米價騰貴を暴利を貪る者があるから起ると云つて、米の賣買をする者のみを取締まるのは無効である。勿論彼等の内には暴利を貪る者もあらうが、然し正當なる者が又決して少くないのは事實である。英國や獨逸のやうなら仕方が無いが、日本は現在其處まで行つて居ない。世上の米穀官營論の如きは如何にも周章狼狽の態で餘りに一步飛び離れて居る。一步退いてもつと自然的なもつと當面の急に應じた方法を講じなければ駄

目だ。而して其方法が無いかと云ふに有る。通貨調節が即ち之れである。唯米のみならず近來の洋紙木炭の如きは、思ふに著るしい買占め賣惜しみが行はれて居るに相違ない。洋紙の如きはザラ紙の外輸出を禁止して居るが、それにしても今日さう急に需要が殖えた筈はないし、又國內の生産高がさう減つたとは思はれない。然るに其價格が殆ど毎日のやうに騰がるのは何處かに何かあるに相違ない。増買や岡半同様の輩が洋紙界に跋扈してゐるかも知れぬ。

然るに米許りに干渉して、米については戒告や處分を受ける者があるに、其他は増買岡半以上の者があつても少しも取締られて居ないのは不公平千萬である。即ち暴利取締によつて、物價調節をやり得ると思ふのが間違である。やつても逆も出来る筈は無い。取締令は結構で、若し増買の如き不徳漢が顯はれたら、處分をどしどし厲行して貰ひたいが、それは物價調節の爲めではない、暴利を取締るのは物價の安い時でも必要である。物價調節と暴利取締とは全然引離してしまはなければならぬ。故に原内閣の農商務大臣は仲小路氏の失敗を一掃して、留意無く大藏大臣と談合し、農商務省は大藏省の下に立つて働くようにしなければいけない。大藏省がやらぬとて農商務省が代つてやるのは權限の踰越である。今までの寺内内閣の施設は机上の俄か案で、獨り取引所の仲買人が之を晒ふのみならず、常識に對へて見て無茶苦茶である。何よりも之を根本的に破棄しなければならぬ。

軍事外交と云ふと政治の二大項目とされて居るけれど、今日はそれよりも急務なのは國民生

活問題である。此新しい問題を前に控て内閣を形造るのは政治家としては寔に千載の一遇で、手腕があれば其手腕を示し、見識があれば其見識を示すべき絶好の機會である。原内閣にして此大問題を解決する事が出来れば、即ち立派に試験に及第したものである。將來の國政を屢々料理して貰はなくてはならぬ、若し依然として少數資本家の利益に厚く、國民生活に没交渉な施設を行ひ、又は黨略本位の政治をやれば、多數黨必ずしも多數黨たるを保し難く、國民の輿望は政友會を離れ、政友内閣が出来てもやはり駄目で、「憂しと見し世ぞ今は戀しき」やはり官僚にやつて貰つた方がずつと好いと云ふやうになる。若し斯うなれば日本の憲政の退歩である。一度び出来た政黨の内閣、無爵の總理大臣に健全なる發展を遂げさせんが爲めには、我々は政友會自身の爲めにも、眼前に横はる國民生活の解決に大に熱心せん事を希望する。然るに嘘か眞か新聞の傳ふる所に據ると、政友會の或人々は物價騰貴の解決などは譯はない、官吏の俸給を増せばよい、さうすれば銀行會社等の民間でも増俸するだらうからと云つたそうだが、以ての外の心得違ひと言はざるを得ぬ。其様の心得では逆も國政を託すことは出来ぬ。

三

次には講和問題である。我邦は此度の戦争には常に日和見の態度を執つて來た。自ら進んで何事も爲さなかつた。大戦は何時終るであらうか唯だ英米政治家の鼻息を伺つて居る。英

國は單獨不講和で我邦をも束縛して居るが、これは單獨不講和ではない。英國以外の聯合國から講和發議權を奪つたに過ぎぬ。英國自身は自分が講和しやうと思へば何時でも單獨講和をやるに相違ない、否他の聯合國を強制して加盟せしむるに相違ない。單獨不講和は英國には通用しない、英國以外の國のみに通用して却つて其手を束縛する口實となつて居る。乍併其英國も最早講和を望んで居ること切なりと信ずる。最近着のステーチストは、佛國に於ける聯合軍の成功なるものは其實大失敗である、聯合國は一人の天才的名軍人は居ないと斷言して居る。表面には強がりを言つて居る英國も、今や大に講和の必要を切に感じて居ると思ふ。獨逸側は勿論である。即ち講和の來るは遠いことではないと思ふ。原内閣は其在任中に講和成立を見ることゝ覺悟せねばならぬ。而して從來の日和見でなく我邦より進んで講和の促進に盡力し、世界に於ける日本の發言權を『ワンス・フォー・オール』に確定す可き大任を荷ふ覺悟を持つて貰ひ度い。我輩一人の希望としては彼のウキルソンの十四個條の講和綱領の如きものを我邦より聯合國に提出して貰ひ度いと思ふ。ロイド・ジョーヂやウキルソンの大演説に隨喜の涙を流す計りが能事ではない。我邦の外務大臣なり總理大臣も、一度位いは世界的の發言を爲す可きである。我邦が一個のプログラムを提出して之に基いて講和の促進を提議し、若し獨逸聞かざれば更に大々的に出兵するも厭はぬ。併し公平な條件なれば今や獨逸は之れに耳を藉す覺悟は持つて居ると思ふ。單に Peace offensive などと蹴飛ばす可きではないと信ずる。官僚内閣と

事替り、兎に角議會に多數を有し可なりの民望を後援として居る原内閣は正に之を勉む可きである。而して對内の最大問題たる物價騰貴防止は、講和の來らざる限り決して十分に其目的を達するものでない。對内の此政策を成効せしめ國民生活を安定するに就ても、對外的に自主的講和の發議は緊急の必要事である。

四

尙附け加へて置きたいのは、教育の方面に就いても從來の型を破つて貰いたい。尾崎氏が一度文部大臣になつて僅か數ヶ月しか在任しなかつたが、官僚のやつて來た官吏言論拘束の規則を廢した事は、積極的には何もしなかつたが消極的には結構な事であつた。だから『追がは尾崎氏よくやつたと』喜ばれたものである。折角出來た政黨内閣であるから、從來の官僚式の施設を一掃して貰ひたい。凡そ文部省程無學無識の輩の集まつた所は無い。具體的に云へば、近頃の外國語學校長と音樂學校長との首の向き換への如き之れである。向き換へられてノコロコ轉任して行く校長も不見識だが、文部省で校長を軽く見て居るのが根本的の間違ひである。外國語學校の校長としては語學の教養といふ事に十分の見識十分の經驗が無ければならぬ。音樂學校の校長でも同じで、校長は必ず音樂家でなければならぬとは云はぬが、相當の修養のある人でなければ駄目である。其を甲から乙にすげ換るのでは、校長は『ヘッド』でなくして『キ

ヤツブ』である。藁帽を烏打帽に代へるやうな無造作な始末である。之れでは學校が治まらず生徒が騒ぐのも當然である。文部省自から斯く校長の地位を輕視するから、生徒が之を侮るのは無理もない。一事が萬事で、こんな事は今に初まつた事ではない、昔からそうなのである。校長が不適任で治まりが着かず、學校が騒ぎ出すと鎮壓するが、抑も文部省が校長や教師の無能老朽を其の儘に放擲して置くから、直接利害の關係ある學生の迷惑は此上ない、ソコで騒ぐので騒ぐのは當然である。文部省が適任者を選ぶ誠意さへあれば、學校騒動杯は起るものではない。然るは一種文部省閥なるものがあつて其黨派の者でなければ校長に出さない。學校は文部省の巡查派出所と心得て居るのだ。否直轄學校は文部省老朽官吏の掃き溜とせられて居る。そんな事で一國の文政が振ふ筈はない。今日の直轄學校には無能老朽の教師が充滿してゐる。半數以上も皆低能か老朽の先生ばかりである。少し氣概のあり學問の出来る者は、腰を屈して文部省の直轄學校に居はしない。幸にして文部省が壓迫を加へる事の出來ない帝大には、層も勿論妙くないが、大體に於て他より優れた教師が集まつて居る。然しそれとても其待遇は普通文官よりも劣つた待遇を與へて居るではないか。今度大臣になるであらう元田肇氏と同期に大學を出て、學徳及び高く篤學の點に於て天下一品と云はれて居る宮崎博士の如きは、其俸給は一局長だにも如かない。斯くの如き待遇をして居て尙且つ日本の學問の向上を望むのは、木に縋つて魚を求むるものである。幸と帝大には斯様な物質的待遇の厚薄を眼中に置かない宮崎

先生の如きがあるが、然し之は稀な例外で萬人に之を望むことは出来ない。直轄學校あたりでは少し目先の利くものはドシ／＼飛出して成金原の手代になるものが多い。畢竟斯の如きは文部省が無能で一國の文政を託するに足らない證據である。願くは政友會内閣は文部省に伴食大臣を置く事をやめて、有力なる大臣を置いて文部省閣を打破斷行して、愚物鈍物の團集を我教育界から一掃し、根本的に大々革新を圖つて貰ひ度いものである。原内閣にして以上の方面に若干成績を挙げれば、それこそ政黨内閣の前途は祝福すべきである。

|| 大正七年九月二十六日談話全十月『中央公論』掲載 ||

四 日本に社會主義起る可きや

極東時報の主筆者によりて予に與へられた此問題は、極めて簡明なように見へるが、實は甚だ複雑である。何故となれば、抑も社會主義なる名を冒すものは澤山あるけれども、人々の見る所必ずしも一致一定して居らぬので、其々勝手な解釋を下して居るからである。殊に英米國で謂ふ社會主義と歐洲大陸で云ふ所の社會主義との間には大分差違が

あるのである。英米では大陸で社會政策と稱して居るものをも、平氣で社會主義と名づけて居る。例へば Municipal socialism などと云ふが英國にある。此は決して現社會を根本的改造革命しようと云ふ主義ではない。唯だ社會上の弊害を取除く爲めに、自治體が種々な施設を爲すことを指して云ふのである。即ち水道、瓦斯電燈電車、屠牛場市場、質屋、職業紹介所、無料又は廉價宿泊所、嬰兒保育所又は一時預り所等を市町村が經營すること、自治體社會主義の實行と名けて居るのである。今問者が意味する社會主義なるものが此意味のものであるならば、社會主義日本に起る可きや否との間は殆んど無意味に歸する。何んとなれば、日本の都市でも、此等市營事業中の或ものは既に經營しつゝあることは誰人も知る所である。

又た右と正反對に、無政府主義、虛無主義の如きものを指して、社會主義と云ふ人もある。我日本には先年の無政府主義者一派の不祥なる出來事を以て、社會主義の主張から出て來たものと思つて居る人も尠からずあるようである。此れも今日公認せられたる——少くも歐洲大陸に於て——意味から云へば大なる誤謬である。彼等の思想主張は決し

て社會主義ではない。個人主義論の極致たる無政府主義に屬するものである。マルクスとバクーニンと相容れざる如く、彼等の思想は社會主義の思想とは相容れないものである。従つてマルクス派を以て自ら信じて居る人々とは、其思想主張は全然相容れず、相許さぬものである。左様でないならば、此等の人々が自らマルクス派と稱することは甚だ以て不當であると斷言せねばならぬ。

予の最も畏敬する先學金井博士は嘗て公けにせられた論文に於て、社會主義は個人主義の極端なるものなりとの意味を論ぜられた事がある。乍併予を以て見れば、此は誤解に陥つて居るものと思ふ。個人主義の極端なるものは例へば、スチルナーの如き此れである。英國のゴドウキンは少し違ふ否見方によつては大に違ふ。我々は獨逸の最高等女學校教諭たりシカスパー・シュミット（スチルナーの本名）に於て、最も純粹なる最も大膽なる個人主義の告白者を見出すのである。支那の學者には此に比す可き者があると思ふ。日本には未だ嘗つて無かつた。社會主義——今日學問上に受取らるゝ意味にての——は、決して個人主義ではない、其起源も個人主義でない、其結局も個人主義でない。

ロバート・オーエンの書の何か一つを見れば、此事は直ぐ知れる。

金井博士と略ぼ反對の意味に於て誤解に陥つて居る説は、慶應義塾長の鎌田榮吉氏の説である。鎌田氏は社會政策學會の大會に於て述べて曰く、社會政策即ち Socialistic policy は、兎角個人を無視し壓迫する弊がある。此は戒飭を加ふ可きである。此説は短い言葉の中に二つの大きな誤解を含んで居るものと思ふ。第一、社會政策なるものは、學問上又實際上決して Socialistic policy ではない。獨逸では Sozialpolitik と云つて決して Sozialistische Politik とは云はなす。佛蘭西では寧ろ économique sociale (Prof. Gide 等の用ゐる語例によれば) と云つて居る。Politique sociale と云はなすことはなく、Politique Socialistique とは決して言はない。伊太利では Politica sociale と云ふ、和蘭でも Socialpolitiek と云つて居ると覺へて居る。Socialistique なる形容詞を用ゐる國はない。英米でも Socialist Policy なる語を社會政策の意味に用ゐた例は聞いたことがない。若し其文字を用ゐることありとせば、其は社會主義的政策のことであつて社會政策のことでない。此點に於て語の用法の不精確な英米人と雖も、區別を附けて居るように見受ける。乍去、鎌

田氏が此くの如き誤解に陥つたのは無理ならぬ事情がある。即ち前云ふ如く、英米では社會政策と社會主義との區別をハッキリ附けないから、Social Policy も Socialistic policy も大抵同じようなものだらうと、鎌田氏が速断したのであらう。鎌田氏にして英語の外少くとも佛語の用例に考へ及んだならば、此くの如き速断に陥らなかつたらうに甚だ残念な次第である。

第二に鎌田氏は社會政策は個人を無視する嫌があると云はれたのは大なる誤解である。抑も社會政策の根本主張は獨逸語で menschenwürdiges Dasein (life worthy of a man) と云ふ事である。河上博士の言を藉りて云へば、人を人として見る、人を道具として見ない、人を其れ自らの目的として見る、決して手段とし見ないと云ふ一事に存して居る。一切の社會政策の思想主張は此根本義の上に築かれてあるのである。個人を壓迫するか、之を無視するなど云ふことは、社會政策の極力排斥する所である。假りに鎌田氏に従つて社會政策と社會主義とを略ぼ同じなものとして見ても、社會主義は決して個人を無視し、又は壓迫せんとするものではない。カントの所謂 Der Mensch als Selbstzweck (其

自らの目的としての人間)と云ふことを力説することは社會主義の怠らざる所である。乍併金井博士の云はるゝ如く、其は個人主義の一變態なるからではない。

右は日本の思想界に於て、特に卓越した二大代表者でさへも、今日の學問に於て認められる立場から見れば、重大なる誤解に陥つて居ることを示して、社會主義の眞意義の我邦に徹底して居らぬ次第を説明せんと欲する爲めに云つたので、兩大家に對して有する予の個人的敬意の甚だ深厚なることは、之が爲めに毫も輕減する次第ではないは、勿論のことである。

然らば予輩が見て以つて、學問上唯一の正しき解釋に於ける社會主義とは如何なるものかと云へば、其れは甚だ簡單明瞭に云ひ表はし得る。即ち私有財産少くとも生産要具 (マルクスに従へば、労働客體 *Objects de travail* 労働と要具 *moyens de travail* とを總稱す。労働客體は原料と半製品とを含む) の私有を全廢し、従つて所謂資本的企業 *Entreprise capitalistique* を全廢すべしと主張する主義が社會主義である。他にも色々主張はあるが、其は派生的のものであつて、根本的のものではない。根本的主義は右の一句に盡きて

居る。今日の現社會は、私有財産、一夫一婦婚及教會（基督教國に於ては）の三つを基礎として立つて居る。社會主義は少くとも其一つを著しく（全部に非ず）崩壊し去らんとするものであつて此意味に於て現社會組織の根本改造を主張するのである。教育に就ては人に依つて大分主張が違ふ。教會の存在を認める人も少からずある。一夫一婦婚に至つては、自由戀愛説、團體婚説、國家婚説色々な主張があり、又一夫一婦婚を其の儘に是認する人も澤山にある。即ち此等に就ては、根本的主張は別に立てぬのであつて、各人任意な説を唱へても、其れが社會主義たるには何等差支ないことになつて居る。唯私有財産（少くとも生産要具の）廢止を主張せざるものは社會主義ではない、之を主張するものは、他の説は如何であつても、均しく是れ社會主義である。是れが今日の學問上に認められて居る精確な意味に於ける社會主義である。私有財産を廢せよと云ふことは、個人の權利を無視し又は蹂躪せよと云ふことではない。否、社會大多數の者をして出来るだけ、權利を伸張せしむるに其が必要であると認めて主張するのである。社會の最下級の者に至るまで、其個性を十分發揮せしめ、眞に名實相合ふ自由平等同胞の主義を實現せしめん

と欲し、其の爲めには私有財産の廢止が第一の必要前提なりと主張するのである。されば、社會主義の根本義は經濟上にのみ打建てられたものではない、其れよりモット奥へ進入するのである。即ち社會主義は其根本義に於ては、經濟哲學上の一主義たるのみならず、法律哲學上の一主義である。其敵とする所は今日の經濟生活の全部ではなく、寧ろ今日の法律殊に私法 *Droit privé* である。民法の物權殊に所有權である。故に學問上之を取扱ふべきものは實は經濟學たるよりは寧ろ民法學でなければならぬ。一九一一年の瑞西新民法は明かに此傾向を認めた最新の產物である。日本のメーンたる穂積陳重博士は早くから此點に着眼して、其門下生に對して『民法と社會主義』と云ふ題を課したと聞いて居る。併し法典の解釋に寧ろ日本なき日本の民法學者は、博士の此の課題を高閣に束ねて今日に及んで居る（二三の例外はないでもないが）。西洋では未だ民法學者が深く社會主義の研究に進入した人は多くな。最も卓越した例外は塊太利の Prof. Anton Me. Ger. アントン・メンガー教授である（Ch. Andler の佛譯を看よ）。其他は大抵經濟學者に一任してある。社會主義の取扱ふ問題は多くは經濟問題であり、殊に社會主義の指導

者は多く經濟上の事柄に通曉して居た人で、經濟上の議論を専らとして居つた爲に此れに對抗するものも亦多くは經濟學者であつたのは不得次第である。乍去此れは寧ろ人事關係上の話で、學問上の性質から起つたわけではない。乍去社會主義者の中でも其の卓越したもの、即ち英國のゴトウキン、ホール、タムソン、ブレ、ホツヂスキンの如きは、法律哲學の領分に多少進入して居る。而して此點に於て最も卓拔な人は、佛國のブルドーンである。マルクスは此點に於て彼に及ばぬのみならず、實は窃かに學ぶ所尠くないものと思ふ。恰かもカントがルソーより學ぶ所が多かつた如くであると思ふ。然るに社會主義と云へば直ちにマルクスを連想するもブルドーンに思ひ及ぶものは少ない。ブルドーンの不遇は獨り其の存生中に止まらないのである。

さて予は右の如く社會主義を解釋するものである。従つて社會主義起るべきやの問に對しても、右の意味の社會主義起るべきやと云ふ問と解釋して、之に答へんと欲するものである。他の意味に於ける社會主義の將來は予が今問題外とする所である。『起るべきや』と云ふ問の意味も二様に解釋することが出来る。一自然の成行に放任して置い

ても、晚かれ早かれ起るべきやと云ふのが其一つである。二今強ひて骨を折つて起さうと思へば起るかと思ふのが其二である。其第二の意味に於ては、予は否と答へざるを得ぬ。第一の意味に於ても然りと答へんと欲するものである。

日本の現状に於ては、如何に骨を折つて見ても、右云ふ意味の社會主義は起らぬものと思ふ。其故は、現在に於ては企業の廢止又は其制限よりも、其擴張其發展が目前の急務である。私有財産の濫用弊害は少しとは云へぬが、其れよりも私有財産の活用の不十分なるより起る弊害が遙かに大である。資本主義が跋扈して困るよりも、却つて資本主義が持來す良き賜を受けることが甚だ不十分である。資本主義の洗禮を受くべき必要の下に在るものが甚だ多い。而して他方には人を人として見、之を道具と見るべからずとの思想は、日本人には未だ中々諒解せられない。即ち鎌田氏が憂へたやうに、稍々もすれば個人性の無視壓迫が平氣で行はれて居る。社會主義が少數の讀書生の玩弄物として論ぜられることは、決して社會主義が日本に起ることゝは同一事ではない。日本に社會主義起ると云ふのは、多數の勞働者多數のプロレタリア階級が其主義を懐抱するやうにな

らなければならぬ。Sorrelの語を以て云へば *hommes de science* の主義たるのみならず *hommes de lute* の主義となるのでなければならぬ。ベルンシュタインをして云はしめば *Le but final n'est rien et le mouvement est tout* である。日本の労働者の大部分は未だ其諒解も修養も有して居らぬ。社會主義的傾向を帯びた若干の讀書子が『我等笛吹けども汝等踊らず』と大聲疾呼しても今日の日本労働者之を馬耳東風に聞流すのである。何となれば、彼等は其の大聲に共鳴すべき何物をも持つて居らぬからである。ゾムバルト Sombart は嘗て『何故に米國に社會主義存せざるや』と云ふ一書を著はして米國の二大政黨は労働階級の要求を其プログラム中に取り入れることを勉めつゝあるから、別に社會黨を形づくる必要を感じぬ。米國の労働者は獨佛の其れより遙かに樂な生活をして居るから、特に悲觀論に與みする必要を感じぬ云々と唱へたが、我日本に就ては、丁度其反對の事實を認め得られるのである。日本の労働者は政黨に依つて一瞥も與へられぬがさりとて、彼等は他に其要求を主張すべき方法を考へるなどと云ふことはない。其可能をも考へることはない。其生活は切り詰めてあるから、日々のパンの願慮以外心を動か

すことは殆んどない。此くの如き労働者に對して、如何に骨を折つて見ても、社會主義の起り得ようはないのである。而して若干の讀書子は餘りに多く理想家である。彼等に取つては *Le mouvement n'est rien* である。佛蘭西の Sorrel が指摘したマルクスの獨逸労働者に於けるよりも、更らに更らに數層遠い距離を持つて居る。彼等の社會主義は羽織と袴の社會主義である。印伴纏の社會主義ではない。嘗ては近接を勉めた人々もあつたが、今は兩者は全然別の世界に住んで居るものである。寧ろ鈴木氏の友愛會の如き非社會主義者の方が實際労働者と接近しつゝある。日本の現在の労働者に取つては、友愛會の爲す所の如き方が、却つて大いに訴ふる所がある、大いに *appealing* であるのである。他日はイザ知らず、今日に於て友愛會が段々盛大となることは、即ち日本に社會主義が容易に起るものでないことを有力に證明するものと、予は考へて居る。

右の反面に於て、將來の或る時期に到るときは、事物の自然に放任して置いて、我邦に社會主義は起る事と信ずる。其時期の何時なる可きやは、豫言者ならぬ予の如きものゝ毫も關知せざる事である。或は甚だ遠き將來であるかも知れぬ、或は近き將來であるか

も知れぬ。兎に角或る時期に至るときは、少數の讀書子の玩弄物として、なく、多數のプロレタリア、多數の勞働者、多數の *hommes de lutte* が *life and death problem* として、私有財産の廢止企業の廢止を主張するようになること、信ずる。予の此説に對しては必ず幾多の反對説を聞くこと、豫期して居る。今其の豫期せらるゝものゝ一二をあげて見よう。第一に、我邦の朝野を擧げて社會政策の實行に銳意盡力するならば、社會主義は起り得ぬであらう。否起らうとしても起り得ぬであらうとの説。第二に、將來に於て社會主義の起ると云ふことは一の不祥事である、我等は其發生を防止するに有らゆる力を用ゐなければならぬ。然れば社會主義の必然的發生は免れ得よう。第三に、我邦勞働者の自覺に乏しきことは汝の説の如し、然れば將來と雖も、社會主義を眞實に主張する勞働者の起り得ようはない、單に羽織と袴の社會主義の若干擴張に止るであらうと。

右に對して予は簡單に次の如く答へる。第三説の如きは餘りに日本の勞働者を悲觀した説である。現在に於て殆ど何等の自覺なきは、事實不可疑所であるが、遠き將來にまで涉つて、其儘に推移す可しと斷言する事は餘りに極端な見解である。第二説、社會主義

の發生を不祥事と見ると云ふのは、無政府主義破壊主義、危險思想と社會主義とを同一視する誤に陥るものである。元より現社會の運用圓滿に行はれて、何等根本的改革の必要なく、従つて根本的改革的起らざることは希はなければならぬことである。乍併、希ふ事は一事である、實現せらるゝ事は他の事である。兩者は決して同一ではない。第三説、社會政策が十分に行はるれば、社會主義起らざる可しと云ふは、一の我田引水論である。社會政策は社會政策の任務を有して居る、社會主義の代用物ではない。其の競争者でもない。予は學問上社會主義の根本主義は之れを全然否認して、社會政策の完成を以て一生の研究事項として居るものであるが、其れは社會政策さへ完成すれば、社會主義は發生せぬと信じて居るからではない。社會主義發生の有無に拘らず、苟くも文明國たるものは社會政策を實行す可き神聖なる義務を有すと確信するからである。如何に熱心に基督教を信仰して居ても、其が其以外の宗教の起るのを防止し能はぬが如く、社會政策如何に十分に行はれても、未だ其れに満足せぬ人の起ることは之を禦ぎ得ないのである。之を禦ぎ得ると主張するのは自惚の甚だしいものである、少くとも予は左様なる意味に於

て、社會政策の主張を立て、居るものではない。唯だ社會主義が日本に起り來らば、予の學問上の所信を以つて學問上の手段に訴へて、飽迄此れと戦ひ得んが爲めに勉強しつゝあるものである。

社會主義は過去に於ては、社會上の弊害の甚しかつた爲めに刺戟せられて起つたが、其刺戟が微弱であつても社會主義は起る可き運命を持つて居る。即ち私有財産制度にして存する限り、之に就て法律哲學的懷疑の起るとは、如何にしても防ぐことは出来ないものである。私有財産制度の弊害が甚しいから斗りではない。其弊害は今と大差なくして、人々の眼が法律哲學的に開けて來れば、或る人々の心の中に疑念が起り、疑念は臆て廢止又は制限の要求を産み出すことは、逆も免れ得ないのである。社會が腐敗するから社會主義が起ると思ふは間違である。腐敗した社會には虚無主義、無政府主義や破壊思想が起るのである。社會主義は其れとは全く趣が違ふのである。政黨が墮落すると *etc.* *tion directe* が主張せられるのである。議院社會主義 *Socialisme parlementaire* や『トラー・ド・ユニオニズム』の勢力を得るのは政治及び政黨の腐敗した所では起り得ぬ現象である。

る。

以上述べた所が、予をして遠き或は遠からざる將來の或時期に於て——我日本の社會と政治とが現在より以上に頽廢し墮落しない限りは——我邦に社會主義起ると信ぜしめる理由である。但し右の前提にして缺けるときは、社會主義は起らぬ否起り得ぬ、其代り學問上の根據に立たぬ所の破壊主義が起るかも知れぬ。是は甚だしき不祥事たることは言ふまでもない。我等は全身全力を擧げて此くの如きことなからしむ可く努力せねばならぬ。社會政策の急要は、此の反省が端的に教ゆる所であると信ずる。

|| 大正六年十月十四日稿同十一月十七日『極東時報』掲載 ||

五 何を調節する

|| 物價調節の謬想、貨幣調節の急要 ||

物價騰貴の爲めに各地に暴動が勃發した結果として、物價調節殊に米價調節問題は、重大なる問題として痛切に感ぜらるゝことゝなつた。近刊の『日本及日本人』を見ると、經濟財政の學問が如何に進歩したと言つてもタカが知れて居る。斯くの如き米暴動の起るを豫言した經濟學者は一人もないではないかと言つて居るが、成程暴動の起るを豫言したものはないかも知れぬ。併し是れは豫言しないのが當然である。若し斯様なことを豫言するならば、國民に對して暴動を煽動すると云ふ嫌ひを免れないのであるから、誰も具體的に暴動の勃發に就いて豫言しなかつたかも知れぬが、今日の時勢の重大なことは心あるものゝ夙に考慮して居つた所である。我輩は去る三月の『理財評論』に於て、『速かに物價調査會を起せ』前段七
七二頁と云ふ題下に、『我々は國富増進の犠牲となつて今日まで隱忍して來たのであるが、此頃のやうに際限なく物價が騰貴しては、到底脊に腹は代へられないとの感起すことになつた。物價騰貴の爲めに國民の生活は根本的に動

搖して居る。若し此の勢ひにして今後尙ほ停止する所がなければ、或は恐る其結果は豫想外のことになるであらう』と論じたのであつたが、是れは別段米暴動勃發に對する豫言ではないが併し果して我輩が恐れて居つた通りに豫想外の珍事を惹起し、米暴動は勃發したのである。當時我輩は右の論文に於て即時に大規模の物價調査會を起し、根本的に物價騰貴の原因を調査研究して其の結果に基き、物價騰貴の趨勢を抑制すべきことを唱道したのであつた。聽く所によれば、近頃政府は最後の事業として經濟調査會を起すとのことであるが、是れが若し本年三月我輩が『理財評論』で論じた時分に着手したならば、今日既に其の効果を擧げて居て、或は騒動を豫防し得たかも知れぬ。然るに今日の如く米暴動が起り、而して現内閣の命數が時々刻々に盡きんとしつゝある時に於て、是れを企圖すると云ふのは、甚だ時機を失した嫌ひがないでもないが、遅れ馳せながらも斯様な事業を起すと云ふことは、當然爲す可きことであつて、寺内内閣としてはせめてもの罪滅ぼしになるであらうと思ふ。我輩は右の文に於て更に次の如く言つて置いた。『假令寺内内閣が今日經濟調査會を起すとしても、其の調査の出來上らない中に早く没落の運命

に陥るであらう。併し此の事業は寺内内閣が倒れても不必要に歸するのではなく、後に來る内閣は當然なされなければならぬ事業である故、寺内内閣は最早其の命數幾日もないと言つても宜しく冥土への土産として着手す可きである。殊に社會政策なる語を濫用した現内閣としては、其の濫用に對するお詫として是非とも是れ位のことにはなさなければなるまい。單に威張るのみが能事でもあるまい、少しは善行を積んでおけば後來の爲めにもなる譯である。我輩は其一日も早く實現されんことを望むとともに、此の調査會が從來の各種の調査會の繰返したるに止まらざらんことを切望するものである』と。

我輩は此の機會に於て前内閣の失政の原因を根本的に考へて、後の内閣の参考に供し、他面世間に行はるゝ物價調節に關する各種の謬想を指摘して、吾人の急要とするものは物價調節其の事に非ず、貨幣の調節是れである所以を明かにしたいと思ふのである。

二

抑も物價調節と云ふことは、我輩を以て言はしむれば既に其の事自身が間違つて居る。元來物價は調節することの出来るものでない。如何に政府萬能であると言つても、現時の社會組織が改造せられざる限りは、政府の權力を以てして物價調節は出来ないものである。物價調節が政府の任意に出来るものなれば、社會主義者は社會經濟の根本的改造を絶叫せずして済むと謂はなければならぬ。今日の經濟生活は畢竟物價生活である、一舉一動價に關係のないものはない。價と共に生れ價と共に死すと云つてよいのである。然るに物價の調節が政府の力によつて出来る、即ち物價の高低が人爲的に出来るものとすれば、我々の生活は誠に容易であると謂はねばならぬが、事實は如何に政府の權力を振ふとしても、現在の社會組織の下にあつては、人爲的に物價を調節することは殆ど不可能であるから、勢ひ社會改造論者が起つて來るのである。而して此の問題に就いては、社會主義者も非社會主義者も全然意見が一致して居るのである。如何に政府萬能を謳歌する者でも、其の力によつて物價調節が出来るとは信じて居らぬ。さればこそ現在の社會組織に對し是れを改造するの必要なることを説くではないか。

三

近來米價調節の一方法として、米穀官營論を唱道するものがあるが、實に無茶苦茶の議論と謂はなければならぬ。殊に社會主義を危険視する人が米の官營を主張するに至つては、其の矛盾も亦甚だしいでないか。畢竟米の官營は專賣でなければ効果はなく、而して米の專賣は延いて土地國有と云ふ事に歸着する外はない。此處にまで至らざる米の專賣制度は全く無意味である。是は社會主義の唱道する所であるが、而も是等の主張には反對して、單に米の官營を主張するに至つては、其の議論極めて淺薄であつて、如何に彼等が米暴動に周章狼狽したか、親はれる。而して又他の一面に於ては、米の廉賣を遣るとか豆を喰へとか、或はお菜なしに喰へとか言つて、粗食を奨励するものがあるが、元來日本人は粗食で勞働能率の低い所へ以て來て、更に其の能率を引下げ様なことを奨励するのは、益々國民を墮落せしむる暴論であつて、恐るべき亡國論であると謂はなければならぬ。殊に米の廉賣とか救済とか云つて騒ぎ廻るのは、畢竟國民の獨立心を害うて、國民

をして乞食の徒たらしめんとするものである。然るに我邦の當局者識者等が何等の考慮を此の點に拂はずして、周章狼狽の極徒らに乞食の製造に骨を折つて居るのは、見つとも無いも極れりである。抑も今日の社會生活の根本義は働いて喰へ、働かなければ喰ふなど云ふことにある。然るに現今の状態は如何に働いても物價の暴騰の爲めに生活が困難となつて來たのであるから、従つて米暴動の如きも起つたのである。されば當局者は深く其の因て來る所を考へて、根本的に對策を講ずべきにも拘らず、米暴動の勃發するや、忽ち周章狼狽して、米の廉賣とか救済とか慈善行爲を敢てしたのであるが、斯の如きは實に麵麩を求むる者に石を與ふるよりも寧ろ慘酷な行爲であり、又國民を輕蔑する仕方と謂はなければならぬ。

四

想ふに物價を調節するに就いて、其の根本義を間違へては居らぬか。元來物價は調節すべきものでもなく、又調節することの出来るものでもない。若し物價を調節せんとす